Go!プリンセスプリキュア
PRINCESS PRECURE
オフィシャル
コンプリートブック
ごきげんよう！
製作スタッ
大集合色
お覚悟はよろしくて！
秘蔵イラスト
全50話
ストーリーガイド
つよく、やさしく、美しく舞った
4人のプリンセスのキセキ

原画／中谷友紀子
© ABC・東映アニメーション

オフィシャル コンプリートブック

contents

スタッフおつかれさま色紙

放送終了を記念して、
製作・CGスタッフのみなさんが寄せ書きをしてくれました。
その色紙をどーんとご紹介!

製作スタッフチーム

M.Hiroshi

デジタル映像部

GO！プリンセスプリキュア　一年間応援ありがとうございました！
フローラが持ち続けた夢が未来への道となり、遂に最終回を迎えることができました。見てくれた子供たちも「夢を持つ大切な気持ち」をずっと持ち続けてくれるといいな。

後期ED・映画プリキュアとレフィのワンダーナイト！
監督　宮本浩史

また会える日までごきげんよう!!

1年間ありがとうございました 応援してくれたプリンセスたち！ごきげんよう♪

おつかれサマー

1年間おつかれ様でした！

プリキュア最高!!!

作業画面がずーっとかわいくて幸せな時間でした!! お疲れ様でした。

CG スタッフチーム

◀色紙の裏には、CGディレクターを務めた小林真理さんによってキュートにデフォルメされた４人のプリキュアの姿を発見！

キュアフローラ／春野はるか

夢への扉を開く、戦うプリンセスたちを紹介するよっ♪

Character Collection 1 キャラクターコレクション

キュアフローラの表情集

キュアフローラ

（声／嶋村侑）

中学１年生の女の子・春野はるかが変身するプリキュア。敵であるゼツボーグに襲われた七瀬ゆいを救いたいという強い想いが、子どものころにもらった「お守り」であるプリンセスキーと呼応して、プリキュアへと覚醒した。花が大好きなはるかの想いがパワーになる、花のプリキュアだ。イメージカラーはピンク。

咲きほこる花のプリンセス！　キュアフローラ！

プリキュア・プリンセスエンゲージ！

変身はプリンセスパフュームに変身キーをセットすることで可能になる。名乗りの決めポーズのあとのセリフは「お覚悟はよろしくて！」

冷たい檻に閉ざされた夢、返していただきますわ！

お覚悟はよろしくて！

変身前のはるかは次ページに登場!

はるかの表情集
夢はプリンセスになること！
春野はるか
（声／嶋村侑）
全寮制の私立ノーブル学園に通う中学1年生。絵本『花のプリンセス』の主人公にあこがれ、夢はプリンセスになること。幼いころ、ある少年がくれた「お守り」が、夢をかなえるキーになった。いつも笑顔で花のように明るく、あきらめずに努力をする頑張りやさんだ。4月10日生まれ。好きなものは、お花、動物。
はるか4歳
少年と出会ったころ。このときから夢はずっとプリンセス！
疲労顔…
頑張りやさんのはるかは、徹夜でドレスを作って、疲れきった顔に……。
制服
＊夏の制服
はるかの家族
実家は和菓子店。はるかも休日には家の仕事を手伝っている。
父・春野いぶき
（声／松本保典）
母・春野もえ
（声／儀武ゆう子）
陽気な職人の父と、店を切り盛りする元気な母。父は娘たちラブ♪
妹・春野ももか
（声／松浦愛弓）
＊冬服
＊ももかのプレゼント
妹は、お姉ちゃんが寮に入って、ちょっとさびしい……。
＊作業着
回想の春野家
はるか's COLLECTION
はるかの身の回りの小物をご紹介。
メイク道具は、使いこなせていません……。
バイオリン
バイオリン職人の錦戸さんからもらったバイオリン。スカーレットとの関係で欠かせない、重要なアイテムだ。
バッグ
海藤家のプライベートビーチへ遊びに行ったときに使った旅行バッグ。
メイクアップ
プリンセスレッスンのひとつだが、ほかの3人と比べてヘタすぎ……。

はるかの
フローラル
ファッション
花が大好きなはるかのおしゃれは、花がモチーフのキュート系。色はもちろんピンクがベースである。
浴衣
エプロン
リゾート服
夏の私服
私服
テニスウェア
ウェットスーツ
ジャージ
パジャマ
FLOWER
水着
冬のコート
秋冬の私服
サンタコスチューム
ロマンチックチュチュ
バレエのレオタード
ドレスがいっぱい
学園ではドレスを着る機会が多い。ちょっとプリンセス気分♪
幻の世界の〝花のプリンセス〟
校内ファッションショーのドレス
ジュリエット（舞台衣装）
プリンセスコンテストのドレス
ノーブルパーティのドレス

キュアマーメイド／海藤(かいどう)みなみ

Character Collection 2 キャラクターコレクション

キュアマーメイドの表情集

キュアマーメイド

（声／浅野真澄）

中学２年生の海藤みなみが変身するプリキュア。みなみは生徒会長。キュアフローラに変身したはるかのピンチを目撃し、生徒を守る生徒会長の強い使命感からプリキュアに覚醒した。海が大好きなみなみの想いがパワーになる、海のプリキュア。コスチュームや決め技も海や水がモチーフだ。イメージカラーはブルー。

澄みわたる海のプリンセス！キュアマーメイド！

プリキュア・プリンセスエンゲージ！

変身はプリンセスパフュームに、変身キーをセットして行う。波のような髪の動きが特徴的である。

お覚悟はよろしくて！

冷たい檻に閉ざされた夢、返していただきますわ！

変身前のみなみは次ページに登場!

海藤みなみ
（声／浅野真澄）
私立ノーブル学園の生徒会長。中学２年生。責任感が強いしっかり者だが、オバケは苦手。実家の海藤家のために働くことが夢だったが、海洋学者・北風あすかとの出会いで気持ちが揺らぐ。「夢は変わってもいい」と、はるかたちに励まされ「海の獣医」という新たな夢を追いかける。７月20日生まれ。好きなものは、海、紅茶。
夢は、海藤家のために。でも…
みなみの表情集
制服
夏の制服
５歳のころのみなみ
回想の家族
５歳のころ、家族と行った海で、みなみはイルカのティナと出会った。
令嬢のみなみには、このころから許嫁を自称する幼なじみもいた。
みなみの家族
実家の海藤家は多数の会社を経営。両親も兄も世界を飛び回っている。
両親は自分の本心を言わないみなみのことを、むしろ心配していた。
母・海藤ますみ
（声／篠原恵美）
父・海藤つかさ
（声／木下浩之）
兄・海藤わたる
（声／興津和幸）
海藤家の後継者として、両親の仕事を手伝う。妹想いのやさしいお兄様だ。
みなみの大切な人たち
ティナ
（声／こおろぎさとみ）
おぼれたみなみを救ってくれたイルカ。ふたりは親友である。
作業着
北風あすか
（声／坂本真綾）
あすかは海洋学者。彼女との出会いで、みなみは海が大好きな自分自身の気持ちと、正直に向き合うことになる。
みなみ's COLLECTION
みなみの身の回りにある小物とメイクをピックアップ！
バレエレッスンのバッグ
バレエの着替えなどを入れるバッグ。学校指定の「N」のロゴが入っている。
メイクアップ
はるかのように塗らない！　目元と頬に少しアクセントを入れて、上品に仕上げる。

みなみの
マーメイド
ファッション
みなみの私服は、
海を連想させるブルー系が多い。
すっきりとまとめるのが
彼女のおしゃれポイント。
浴衣
リゾート服
夏の私服
私服
バレエのレオタード
テニスウェア
ウェットスーツ
水着
ドレスがいっぱい
みなみのドレスはマーメイドの尾
を連想させる、豪華な裾に特徴が！
船上パーティのドレス
ノーブルパーティのドレス
サンタコスチューム
校内ファッションショーのドレス
冬のコート
秋冬の私服
夢の中のドレス

Character Collection 3
キャラクターコレクション
キュアトゥインクル／天ノ川きらら
キュアトゥインクル
（声／山村響）
中学１年生の天ノ川きららが変身するプリキュア。モデルとして活躍するきららが、クローズからファッションショーを守りたいという強い想いで覚醒。だが、事件解決後はプリキュアになることを拒否し、フローラたちを驚かせた。トゥインクルのモチーフは星で、決め技もそれにちなむ。イメージカラーはイエロー。
きらめく星のプリンセス！
キュアトゥインクル！
プリキュア・プリンセスエンゲージ！
キュアトゥインクルの表情集
冷たい檻に閉ざされた夢、返していただきますわ！
お覚悟はよろしくて！
プリンセスパフュームに変身キーをセットして変身する。光あふれるエクスチェンジ！

プリキュア
キュアトゥインクルの基本形。肩をきれいに見せる露出の多い衣装と、ニーハイブーツが特徴だ。
決め技
シャランラ、銀河よ！
プリキュア・ギャラクシー・コーラス！
▲プリンセスパレスにギンガキーをセット。銀河から星を落とす！
キラキラ、流れ星よ！
プリキュア・ミーティア・ハミング！
▲プリンセスロッドにシューティングスターキーをセットし、無数の流れ星を天空に！
キラキラ、月よ！
プリキュア・フルムーン・ハミング！
▲プリンセスロッドにルナキーをセット。満月状のバリアで押し返す！
モードエレガント ルナ
ルナキーで変化するモードエレガント。フローラ、マーメイドとの合体技「トリニティ・リュミエール」で着用。
モードエレガント
プリキュアからプリンセスラインのドレスに変化するモードエレガント。これはトゥインクルキーにより変化。
エクスチェンジ・モードエレガント！
決め技
キラキラ、星よ！
プリキュア・トゥインクル・ハミング！
ごきげんよう！
◀モードエレガント状態で星をブーメラン状にして放つ。最後に「ごきげんよう！」
モードエレガント ギンガ
ギンガキーをプリンセスパレスにセットして変化した形。CG画像でドレスの裾の星たちも輝く！
モードエレガント シューティングスター
シューティングスターキーで変化するモードエレガント。3人の合体技「トリニティ・エクスプロジオン」を放つ際の衣装。
合体技
響け！すべての力！
プリキュア・エクラ・エスポワール！
▲モードエレガント サクラ、サンゴ、ギンガ、サンのドレスを着用した4人の合体技
グランプリンセス
トゥインクルの最終フォーム。ドレスラインはフローラに近いAライン。合体技「プリキュア・グラン・リベラシオン」を発動するときに着用する。
ロイヤルキーをプリンセス・パレスにセットして変化。この状態の4人で合体技「プリキュア・グラン・プランタン」を発動。
モードエレガント ロイヤル
15
変身前のきららは次ページに登場!

天ノ川きらら
（声／山村響）
私立ノーブル学園に通う中学１年生。スーパーモデルの母にあこがれ、夢は世界的なモデルになること。プリキュアになる気はなかったが、はるかの行動に刺激され、プリキュアとしても頑張ることを決意した。まっすぐに夢に向かって進む、強い意思を持つ。９月12日生まれ。好きなものは、星、ドーナッツ。
夢は、ママを超えるトップモデルになること！
制服
★夏の制服
きららの表情集
8歳ぐらいのきらら
きららの夢は不変。子どものころから、ママの背中を追いかけてきた。
きららの家族
パパもママも仕事で忙しく、家族はそれぞれ自立している。
母・天ノ川ステラ
（声／大原さやか）
スーパーモデルとして活躍中。下町育ちで、素顔は気さくな女性。
★ショー衣装
父・高天原健
パパは映画スターであり、ブラジルで撮影中。回想シーンの中で、一家団らんする微笑ましい姿が描かれた。
きらら's COLLECTION
勉強と仕事を両立させるきららは、仕事用のグッズも多数ある。
キャリーバッグ
ニューヨークに向かおうとしたときのバッグ。
スケジュール帳
寮生活をしながら仕事をしている。自分でしっかりスケジュール管理。
お仕事用のバッグ
撮影に必要な小物なども入る、大きめのバッグ。
メイクアップ
現役モデルなので、メイクは４人の中で一番上手。ネイルもバッチリ♪
お仕事関係の人たち
きららの所属事務所のスタッフと、よき理解者・ボアンヌさん！
★ショー衣装
明星かりん
（声／牧口真幸）
きららの事務所の後輩。きららにあこがれて、モデルをめざす。
ボロロ・ボアンヌ
（声／山崎たくみ）
世界的デザイナー。新しいモデルを探し、きららに興味を持つ。
舘響子
（声／佐古真弓）
事務所の社長。テキパキと仕事をこなす、やり手の女性である。

★浴衣
★リゾート服
きららのトゥインクルファッション
きららは普段からおしゃれに敏感。TPOに合わせて、アクセサリーやサンダルなどのグッズも、多彩にチェンジ！
★夏の私服
★私服
★ノーブルパーティのドレス
★テニスウェア
★ウェットスーツ
★部屋着
★水着
仕事柄、コスチュームチェンジが多いきらら。でも、ときには着ぐるみ風も……お仕事、お仕事！
仕事の衣装がいっぱい
★ドーナッツプリンセス
★ファッションショーのステージ用
★ファッションショーのステージ用
★雑誌の撮影用
★サンタコスチューム
★校内ファッションショーのドレス
★雑誌の撮影用
★雑誌の撮影用
★雑誌の撮影用
★夢のファッションショーステージ用
★冬のコート
★秋冬の私服

キュアスカーレット／紅城トワ

キュアスカーレット

（声／沢城みゆき）

ホープキングダムのプリンセスであるトワが変身するプリキュア。ディスピアに洗脳されていたとはいえ、ディスダークのトワイライトとしてプリキュアたちと戦ってきたことへの贖罪と、兄のカナタを救いたいという強い想いから覚醒した。深紅のコスチュームを身にまとい、炎の技を使うプリンセス。イメージカラーは赤。

プリンセスパフュームに変身キーをセット。全身を包む炎は大きくて激しい。動きもダイナミック。

変身前のトワは次ページに登場!

トワの表情集
子どものころのトワ
子どものころから、兄のように上手に
バイオリンを弾くために努力をしていた。
夢は、グランプリンセスになること!
紅城トワ
（声／沢城みゆき）
「紅城」という苗字は、ノーブル学園の学園長がつけてくれた。本来は、ホープキングダムのプリンセス「プリンセス・ホープ・ディライト・トワ」。夢はグランプリンセスになること。本物のプリンセスなので、世間知らずな振る舞いで周囲を驚かせる。ノーブル学園の寮ではきららと同室。12月5日生まれ。好きなものは、バイオリンを弾くこと、あんみつ。
制服
ノーブル学園の制服。白いソックスに、流行とは無縁の高貴さが漂う。
トワの家族（in 夢ケ浜）
再会した兄のカナタは記憶を失い、
トワのことさえ覚えていなかった。
兄・カナタ
（声／立花慎之介）
トワ's COLLECTION
人間界に来たばかりの
トワが持っている小物といえば……。
メイクアップ
お化粧道具は借り物かな。キッチリメイクで、プリンセスの気品が引き立つ。
旅行カバン
みんなと夏のリゾートへ。なんとバッグを自分で(!)引いている。

トワのスカーレットファッション
プリンセスを思わせる、フリルのついたデザインの衣装が多い。最初の私服は、はるかたちからプレゼントされた。
浴衣
夏の帽子
私服
バレエのレオタード
船上パーティのドレス
サンタコスチューム
ネグリジェ
水着
冬のコート
秋冬の私服
世間知らずのトワちゃんがいっぱい
人間界が初めてのトワ様は、チャーミングな行動を連発されました♪
ありがとう
▲食事を運んでくれた同級生に、上品な笑顔で軽～くひと言
メイドは3人もいれば、よろしくてよ
▲ひとりで生きねばと、城探しを依頼するトワ様。これでも本人は遠慮しているつもり
ワタクシだって、やればできるのです…！
▲失敗を厳しくしかるきららにプンプン。でも洗濯バサミで止めてない、できてない……
パフ、お茶を！
▲きららの目を覚ますために、お茶の用意をさせるトワ様。授業中なのに……
じつはこれ、1度やってみたかったのよね♪
▶お城にも長い階段があったらしい。無邪気なプリンセスでした♪

Character Collection 5
キャラクターコレクション
七瀬ゆい
七瀬ゆい
(声／佳村はるか)
私立ノーブル学園の中学1年生で、寮でははるかのルームメイト。ゆいはプリキュアにならなかったが、フローラたちの秘密に気づき、応援してきた。夢は絵本作家になること。絶望の檻に何度も閉じ込められながら、あきらめない強い心で、ついには自力で脱出することに成功した。最終話では、ゆいが描いた絵本も登場していた。
私服
夏の私服
ノーブルパーティのドレス
制服
ゆいのメルヘンファッション
絵本が大好きなゆいのファッションはパステルカラーでメルヘンチック。そして絵描きの定番であるベレー帽！
秋冬の私服
浴衣
水着
冬のコート
校内ファッションショーのドレス
ゆい's COLLECTION
絵本作家をめざすゆいは、
絵を描く道具をたくさん持っている。
クレヨン
絵画コンクールに出品するため、ゆいはクレヨンを使って絵を描いていた。
Yui Nanase
スケッチブック
みんなで海へ遊びに行ったときも、ゆいはスケッチブックとペンを持参した。

私立ノーブル学園
Character Collection
6
キャラクターコレクション
はるかたちの学園の人たちをご紹介。夢に向かって頑張る生徒たちばかりだ。
生徒会
風紀委員長
冬のコート
ノーブルパーティのドレス
浴衣
夏の私服
如月れいこ
（声／水野理紗）
中学２年生。規則に厳格。パフを寮内で飼うことに反対したが、じつは犬が苦手だった。次第にパフのとりこになった。
副会長
東せいら
（声／橋本結）
中学2年生。スポーツが得意で元気ハツラツ。会長のみなみをバックアップする。彼女をお化け嫌いにした張本人。
書記
西峰あやか
（声／新名彩乃）
中学2年生。みなみ、せいらとは、小学校からの幼なじみで仲よし3人組。控えめで、おっとりとした性格をしている。
夏の私服
書記
古屋ナオト
（声／村田太志）
中学2年生。数少ない生徒会の男子メンバー。会長のみなみを尊敬している。冷静で真面目な秀才タイプである。
副会長
今川シュウ
（声／田丸篤志）
中学2年生。みなみを尊敬する副会長。ちょっとキザな性格。パーティなど華やかな場になると張りきる。
クリスマスパーティのせいらの衣装
ノーブルパーティのドレス
冬のコート
一条らんこ
（声／矢作紗友里）
中学３年生。トップアイドルになるのが夢。邪魔する者は排除する主義らしい。一方的に、きららをライバル視している。
クリスマスパーティの衣装
冬のコート
藍原ゆうき
（声／阿部敦：幼少期／儀武ゆう子）
中学１年生。夢は世界で活躍するテニスプレーヤーになること。子どものころに、はるかの夢をバカにした少年がゆうきだった。
テニスウェア
秋冬の私服
ノーブルパーティのスーツ
浴衣

私立ノーブル学園の生徒＆先生たち
私立ノーブル学園
きららのクラスメイト
瀬川ひとみ
（声／清都ありさ）
寮内の宝探しで、暗号を解読し、きららにほめられていた「ひとみん」。
神田ようこ
（声／井上遥乃）
きららに苦手意識があったが、宝探しで仲よくなれた「ようたん」。
サッカー部
左から２番目の部員が、得点王になる夢を閉じ込められた。
教職員
学園の教師。入学式に遅刻したはるかをしかったのは座間先生。
数学の先生
国語の先生
音楽の先生
英語の先生
座間すみれ
（声／横尾まり）
はるかのクラスメイト
平野ケンタ
（声／小林裕介）
演劇部所属。演劇会で足を負傷しながら、ロミオ役を熱演した。
古屋りこ
（声／植田佳奈）
演劇部所属。舞台に立つとアガってしまうが、演出時には鬼のように厳しい。
小森はなえ
（声／千菅春香）
花が大好きで、はるかと意気投合。フラワーコーディネーターをめざす。
映画部
ノーブルパーティの様子を撮影していた生徒。夢はホラー映画の巨匠。
料理部
パーティ用のケーキ作りに奮闘した料理部員。夢はパティシエール。
藍原ゆうきファンクラブ
テニス部の「ゆうき君」を、熱心に応援していた３人娘。
小巻のりこ
栗田まい
狩野さやか
伊集院キミマロ
（声／矢部雅史）
中学２年生。海藤みなみの許嫁（自称）で超お金持ちの子息。海外留学から戻り、なんとボディガード付きでノーブル学園に登校する。
寮母
白金
（声／安芸けい子）
学園の寮の一切を取り仕切る。登場するときは「寮母の白金です」と名乗る律儀な人。学園ＯＢたちの夢がつまった建物も管理していた。
白金さんの鍵
学園長
望月ゆめ
（声／沢田敏子）
子どもの夢を応援するため、50年前に私立ノーブル学園を創設したのが、望月ゆめ。彼女は、絵本「花のプリンセス」の作者でもあった。
ゆめ20歳
絵本作家・望月ゆめ

多彩なゲストキャラクター。多くはディスダークのターゲットに！
各話のゲストキャラクター
Character Collection
7
キャラクターコレクション
野球部員（6話）
中学生（5話）
路線バス（4話）
ステージ周りのクレーン（4話）
マーブルドーナツ（4話）
販売車（4話）
カメラマン（4話）
柔道・空手少年（3話）
ドーナツ店店員（12話）
TV番組スタッフ（12話）
メイクさんほか
撮影クルー
プロデューサー
小物
根性ドーナッツ君（12話）
お化け（9話）
ノーブルパーティの女の子（9話）
リムジン（32話）
キミマロのボディガード（32話）
消防団員（25話）
きらら担当の編集者（24話）
執事オイカワと老婦人（15話）
錦戸
（声／阪脩）
みなみが行きつけのバイオリン工房の主。記憶喪失のカナタを助けて保護したこともあった。
女子高生（34話）
メイクさん
参加者
プリンセスコンテスト（34話）
チョコとカナタのボタン
大道芸人（33話）
猫たち（33話）
幻の花の世界（47話）
城の侍女と執事
王子
小鳥
王子の馬
雪のお城作りに参加する生徒たち（46話）
お菓子ボックス（41話）
絵画教室の子どもたち（41話）
女の子と人形（35話）

スプリキュア～レクション

りのシーンを、秘蔵のスペシャルカットも交えて紹介しよう!

ステキなパフさん

CM明けのアイキャッチでは、おしゃれが大好きなパフのヘアアレンジコレクションを大公開！さて、全部で何種類だったでしょうか?

- マダムアレンジ　11話　25話
- ふんわりおさげ　6話　20話
- かんざしアレンジ　1話　15話　29話
- パーティ巻き　12話　26話
- ツインおだんご　7話　21話
- ハートアレンジ　2話　16話　30話
- ツリーアレンジ　13話　27話
- ショート風　8話　22話
- ツインテール　3話　17話
- キュートアレンジ　14話　28話
- パイナップルポニーテール　9話　23話
- みつあみヘア　4話　18話
- リボンツイン　10話　24話
- サイドまとめ　5話　19話

かわいいパフ!

〜Go!プリンセ

ステキ☆コ

本作にはスタッフの遊び心がいっぱい。スタッフこだわ

KIRARA TIMES

モデルとして活躍するきららを特集した雑誌が多数登場。そのすべてが作り込まれていた。本邦初公開の誌面を読み尽くせ！

4話

プリンセスパフュームを持ったきららの写真に、はるかたちは驚く。パフュームは「本人私物」だそうだ。

17話

きららのモデルとしての活躍を伝える雑誌の数々。特集記事も実際に組まれているが、表紙のキャッチにも注目。

雑誌の裏表紙は……

こんなとこまで来ちゃった。

42話

書店にはきらら特集コーナーが展開。棚で隠れた雑誌の表紙、裏表紙にも、ナイスなキャッチコピーが！

ホープキングダム
Character Collection
8
キャラクターコレクション
プリキュアに助けを求めた王国のみなさんと、アイテムを紹介。
ロイヤルフェアリー
アロマ
（声／古城門志帆）
ホープキングダムに住み、王家に仕えるロイヤルフェアリー。まだ執事見習いだが、王室の宝・プリンセスパフュームを守って、妹のパフと共に地球へやってきた。非常に責任感が強く、ときには口うるさく注意することもあった。
人型
執事の修業をするため、ミス・シャムールの力で人間の姿に。
パフ
（声／東山奈央）
アロマの妹で、王国ではメイド見習いのロイヤルフェアリー。学園の寮には「犬」として住むことを許された。おしゃれが大好きで、髪をアレンジしてもらうと喜ぶ。甘えん坊でのんびりやさんだが、フローラたちを助けるために敵に飛びかかる勇敢さもある。
人型
ミス・シャムールの力で人間に。白金さんにメイドの仕事を徹底指導された。
クロロ
（声／甲斐田ゆき）
ディスダークのロックに体を乗っ取られていた妖精。本当は臆病。
ロイヤルティーチャー
ミス・シャムール
（声／新谷真弓）
ホープキングダムに伝わる「レッスンパッド」に宿る妖精。語学をはじめとする各種学問、プリンセスのたしなみにも精通する。はるかたちをグランプリンセスにするためレッスンを担当した。普段の姿は猫風だが、人間の女性になることも可能。
人型
人間の姿になると、パフたちとは違って大人の女性の姿になる。
プリンセスレッスンパッド
カナタ王子
<プリンス・ホープ・グランド・カナタ>
（声／立花慎之介）
花と海と星で形作られた美しい王国・ホープキングダムの王子。勇敢でやさしく、妹想い。ディスピアによって絶望に染められた王国を救うため、アロマとパフにプリキュアの覚醒に必要なアイテムを託して、自らは王国にとどまって戦い続けた。バイオリンの名手。彼の妹のトワは、その音色にあこがれ続けていた。
9歳のころのカナタ
はるかと初めて会ったころ。お守りとしてドレスアップキーをはるかに与えた。
バイオリン
バイオリンの音が行方不明のトワに届くように、いつも身近に置いていた。
船上パーティの服
海藤家のパーティでの衣装。さすが王族、身のこなしが違った。
ウィッシュ
王子は愛馬に乗って、国の様子を見てまわっていた。
ホープキングダム王＆王妃
カナタとトワの両親。ディスダークによる絶望の檻に閉じ込められていた。
ホープキングダム王
（声／川島得愛）
ホープキングダム王妃
（声／天野由梨）

先代プリキュア
遠い昔に闇を払い、ホープキングダムを作った伝説のプリキュア。チエリ、ユラ、セイと出会ったはるかたちは、新たにサクラキー、サンゴキー、ギンガキーを受け継いだ。
先代キュアフローラ
チエリ／先代キュアフローラ（声／藤田咲）
ユラ／先代キュアマーメイド（声／ゆきのさつき）
セイ／先代キュアトゥインクル（声／清水香里）
アイテムコレクション
先代プリキュアはホープキングダムを作り、多くのアイテムを残した。ドレスアップキーとパフュームの組み合わせによりモードチェンジが可能となる。はるかからカナタへの贈り物が変化したロイヤルキーや、プリンセスパレスなどの新しいアイテムも誕生した。
キュアスカーレット
キュアトゥインクル
キュアマーメイド
キュアフローラ
ドレスアップキー
ドレスの変化
変身アイテム
プリキュア
モードエレガント※
変身ドレスアップキー
スカーレット
トゥインクル
マーメイド
フローラ
正面
モードエレガント
ハナビ
ルナ
アイス
ローズ
エレガントドレスアップキー
※スカーレットの「スカーレットキー」と「ハナビキー」を使ったモードエレガントは未登場。
真上
モードエレガント
フェニックス
シューティングスター
バブル
リリィ
プリンセス・パフューム
ミラクルドレスアップキー
※上記の12個のキーが、ホープキングダムオリジナルのキー
モードエレガント
サン
ギンガ
サンゴ
サクラ
プレミアムドレスアップキー
モードエレガントロイヤル
プリンセスパレス
ロイヤル
ロイヤルドレスアップキー
上記17個のキーが融合して出現
ゴールドキー
グランプリンセスのみが使うことのできるキー。これにより絶望の扉を開くことに成功した。
合体技
グランプリンセスとなった4人は、ゴールドキーを使ったこの合体技によって、ディスピアを浄化したのだ！
プリキュア・グラン・リベラシオン!!
開け！ 夢への扉！
グランプリンセス
グランプリンセスに覚醒すると、キーが融合する！
武器
ミニロッド
プリンセスロッドのかけらが、ゆいたちの心と反応してミニロッドに。
クリスタルプリンセスロッド
先端にキーをセットすることで決め技を可能にしたロッド。
スカーレットバイオリン
カナタのバイオリンから誕生したスカーレット専用の武器。

トワイライト
数奇な運命をたどったプリンセス・トワの、悪の顔についてクローズアップ！
Character Collection
9
キャラクターコレクション
わたくしこそ、唯一無二のプリンセス！
気高く、尊く、麗しく
トワイライトからブラックプリンセスへ。パフュームに黒いドレスアップキーをさすことで変身する。
トワイライト
（声／沢城みゆき）
ホープキングダムのプリンセスとして国民に愛されていたトワ。兄のように上手にバイオリンが弾けないと悩む心の隙に、絶望の魔女・ディスピアは入り込んだ。洗脳され、ディスピアの娘・トワイライトとして人間界に出現。誇り高く、プリキュアをニセのプリンセスと言い放つ。
ブラックプリンセス
トワイライトのパワーアップバージョン。戦闘能力がアップし、素顔も見えず、不気味さだけ増している。
ブラックプリンセスのアイテム
トワイライトの杖
プリンセスロッドのように、ブラックキーをさして武器として使う杖。
4つめのパフューム
古城でトワイライトが見つけた。本来はプリンセスパフュームらしく、長く埋もれていた。
ロストパフューム
4つ目のパフュームにディスピアが力を与え、トワイライトの変身用のアイテムに。香水も黒に染まった。
ブラックキー
3個目のキー
2個目のキー
1個目のキー
ブラックキーはホープキングダムのドレスアップキーに似せて、ディスピアが体内から生成し、トワイライトに与えたもの。3個存在する。
トワイライトの馬

ディスダーク

Character Collection 10 キャラクターコレクション

絶望の世界を作ろうとする闇の勢力は、怪物ゼツボーグを生みプリキュアを苦しめた。

ディスピア

(声／榊原良子)

闇の勢力・ディスダークを支配する絶望の魔女。先代プリキュアに封印されていたが、ホープキングダムのプリンセス・トワを連れ去ることで国民の絶望のエネルギーを集め、復活した。ダメージを受けると、茨の森で癒す。性格は冷酷そのもの。

ディスピア最終形態

ディスピアが巨大化した状態。仮面が消えて恐ろしい素顔を見せた。

ディスピアの影

ディスピアは、自身の体から影を伸ばして攻撃することもできる。

モードエレガントにエクスチェンジ！

3個の黒いドレスアップキーから放たれた邪悪なエネルギーが、トワイライトを包む！

ブラックプリンセス モードエレガント

ブラックパフュームによって、モードエレガントも可能になった。その姿はディスピアに近づいた。

絶望アイテム

絶望ゲージ

夢の力を檻に閉じ込めることで生まれる絶望エネルギーを溜める装置。

ドレスアップキーケージ

プリキュアのドレスアップキーを閉じ込めておくことができる檻。

絶望のタネ

絶望の森の種子。クローズが人間界を茨の森にしようとまき散らした。

ディスプラウト

ディスピアが自分の体から生み出した分身で、これを放つとメツボーグが生まれた。

Character Collection 11 キャラクターコレクション
ディスダークの三銃士
ディスピアの部下も変身した。パワーアップバージョンに、ご注目！
クローズ
(声／真殿光昭)
ディスピアの３人の部下の中で、最初にはるかたちの前に現れた男。性格は凶暴で、短気。プリキュアの誕生を阻止しようと、アロマとパフを追って人間界に来た。だが、フローラの覚醒を許してしまい、その後も登場するたびに失敗してしまう。何度か強化され、姿も変えたが、プリキュアに倒され、しばらく姿を消すことになった。
クローズ 第２形態
ディスピアによって邪悪なパワーを強化され、筋肉隆々になる。黒い羽が生えて飛行も可能。戦闘能力もアップしたが、さらに次の形態へ。
クローズ 第３形態
体は人間の形が残っていた第２形態から、さらにパワーアップ。巨大なカラスの姿を持つ。戦闘力はアップしたが、自我をなくした化け物に！
クローズカラス
新生クローズはカラスに姿を変えることもでき、プリキュアたちを監視した。
新生クローズ
姿を見せなかった間に再強化され、クローズは復活。ディスピアの信頼を取り戻してNo.２になっていた。学生に扮してはるかを罠にかけるなど、それまでのクローズでは考えられない頭脳プレイも見せた。この新生クローズの最終形態が、最終話でキュアフローラの決戦の相手となった。
黒須君
学生の姿に変身したクローズ。明るく振る舞い、敵らしさのない黒須君に、はるかは油断してしまった。
クローズ最終形態
最終的にディスピアの体に取り込まれたクローズは、ディスピア崩壊後、その絶望エネルギーを吸収して、この形態へと変化した。
新幹部
ストップ＆フリーズ
(声／井澤詩織)(声／伊東みやこ)
ストップ
フリーズ
最終形態
最終話で双子は、ヘビ状の怪物へと変身した。
新生クローズが、絶望のタネから生み出した双子の幹部。クローズに従順に従って行動する。

シャット
（声／日野聡）
三銃士の２番手として登場。ナルシストで、美しいものを愛する伊達男。トワイライトを愛し、トワには反感さえ抱いていた。失敗が続いたことでディスピアに冷遇され、居場所をなくして旅に出たこともあった。最後はロックと一緒にディスピアに反発して、夢を守るために戦った。
シャット 第２形態
ディスピアに冷遇され続けたシャットは、自らの絶望の力で、獣のような表情をした第２形態に変貌した。
シャット表情集
シャット 第３形態
さらに強力な絶望の力は、シャットを巨大な獣の化け物に変えた。理性を失い、トワイライトの面影が残るキュアスカーレットを襲った。
シャットの黒いバラ
バラを愛するシャット。黒いバラは攻撃アイテムにもなった。
ロック
（声／甲斐田ゆき）
生意気な少年に見えるが、三銃士の中では一番の実力者。ディスピア不在の間に青年ロックに姿を変え、プリキュア３人のドレスアップキーをGET。そしてディスピアを出し抜き、絶望の王になろうとしていた。ロックの本体は、パーカーのほうだった。
ロックの本体はパーカー
分身ロック
分身すると、髪やコスチュームの色も変わる。目の玉がマントに残ったバージョンが、オリジナルだ。
ロック最終形態
絶望のエナジーで強化されたロックは、羽が生えた巨大な化け物へと変貌。口から強烈な光線を放って攻撃する。
巨大ロック
ディスピアに再強化され、巨大化したロック。攻撃力は増したが、ただ暴れるだけのモンスターと化していた。
青年ロック
ロックは青年に変身して、さらに３人に分身すると、３人のプリキュアと対峙した。
中身は…
クロロ
ロックは、ホープキングダムの妖精・クロロの体を乗っ取っていた。

Character Collection 12 キャラクターコレクション

ゼツボーグ&メツボーグ

ディスダークはゼツボーグ&メツボーグを使い、世界を絶望に染めようとしていた。プリキュアたちが浄化した怪物をプレイバック。

ゼツボーグ（声／中務貴幸）

◆チアリーダーゼツボーグ(27話)
◆セミゼツボーグ 第1形態(26話)
◆セミゼツボーグ 第2形態(26話)
◆編集者ゼツボーグ(24話)
◆絵本作家ゼツボーグ(28話)
◆セミゼツボーグ 第3形態(26話)
◆消防団ゼツボーグ(25話)
◆甲冑ゼツボーグB(30話)
◆甲冑ゼツボーグA(30話)
◆キミマロ ゼツボーグ(32話)
◆フラワー ゼツボーグ(31話)
◆ゼツボーグ城(30話)
◆騎士ゼツボーグ(29話)
30
◆ふぐゼツボーグ(33話)
◆ウナギ ゼツボーグ(33話)
◆舞台監督 ゼツボーグ(37話)
◆ロミオ ゼツボーグ(37話)
◆ペンギン ゼツボーグ(36話)
◆プリンセス ゼツボーグ(35話)
◆メイクゼツボーグ(34話)
◆サメゼツボーグ(33話)
◆きららゼツボーグ(42話)
◆絵本ゼツボーグ 強化タイプ(41話)
◆炎メツボーグ(40話)
◆野良ゼツボーグ(39話)
◆ロボット ゼツボーグ(38話)
◆花メツボーグ(47話)
◆海メツボーグ(45話)
◆海メツボーグ 巨大化(45話)
◆先生ゼツボーグ(44話)
◆星メツボーグ(43話)

イラストギャラリー 1

番組宣伝ポスターなどの美麗イラストをご紹介♪

●初出：番組宣伝ポスター

●初出：Ｇｏ！プリンセスプリキュア オフィシャルコンプリートブック 表紙　原画／中谷友紀子

GUIDE ガイド 第1話～第50話

はるかとカナタの運命の出会いから感動のフィナーレまで、『Go！プリンセスプリキュア』の名シーンを振り返る。４人が入手したキーやアイテム、変身ドレスや技の掛け声も紹介！

咲きほこる花のプリンセス！キュアフローラ！

モードエレガント

▲浄化する技を繰り出す衣装。掛け声は「舞え、花よ！ プリキュア・フローラル・トルビヨン！」

第1話 私がプリンセス？ キュアフローラ誕生！

夢はプリンセス！ でもちょっぴり恥ずかしい!?

夢を抱く生徒が集まるノーブル学園。春野はるかの夢はプリンセスになることだが、恥ずかしくて他人には言えない。そんなはるかが森でアロマとパフに出会う。ふたりを追って現れたクローズが、はるかのルームメイト・七瀬ゆいを絶望の檻に閉じ込めて、ゼツボーグを生み出す。はるかが幼いころに少年からもらったお守りは、ドレスアップキー。それを使いプリンセスパフュームの力を解放すると、はるかはキュアフローラに変身。ゼツボーグを浄化されたクローズは逃げ、ゆいは無事に救出された。アロマとパフは、プリンセスプリキュアを探しにホープキングダムから訪れたロイヤルフェアリーだ。幼いはるかにキーをくれた少年は、ホープキングダムのカナタ王子だった。

ドレスアップキー

◀幼いはるかが「夢のお守り」として、カナタからもらったもの。眠りから目覚めて鍵になる

第2話 学園のプリンセス！ 登場キュアマーメイド！

ふたり目のプリキュアは学園の美しき生徒会長

ホープキングダムは、絶望の魔女・ディスピアに侵略されている。救世主であるプリンセスプリキュアは３人いて、真の力を発揮するには「つよさ、やさしさ、美しさ」を身につける必要があるという。そこで、あこがれの先輩・海藤みなみにバレエを習うはるかだが、足を捻挫してしまう。変身してゼツボーグに立ち向かうキュアフローラは、足の痛みでピンチに。駆けつけたみなみの「学園のみんなを守りたい」という想いに、浜辺で拾ったドレスアップキーが反応。アロマからプリンセスパフュームを渡されたみなみはキュアマーメイドに変身し、華麗にゼツボーグを浄化する。残るプリキュアはひとり。だが、戦闘中に３つ目のプリンセスパフュームがなくなってしまった。

▲渚でドレスアップキーを拾ったみなみは、入学式に遅刻したはるか自身に償いを考えさせた

◀敵を浄化する技の掛け声は「高鳴れ、海よ！ プリキュア・マーメイド・リップル！」

第3話 もうさよなら？ パフを飼ってはいけません！

パフと一緒にいるために学生寮の規則変更に挑戦

寮へ入り込んだパフが、風紀委員長の如月れいこに見つかる。パフを迷い犬と思った彼女は、保護施設に引き取ってもらうべきだと主張する。ロイヤルフェアリーがプリキュアから離れるわけにはいかないが、寮の規則でペットは飼えない。そこではるかは、パフを寮で飼うための新しい規則を提案する。それには寮生全員の賛同が必要だ。一方、プリンセスプリキュアの復活を阻止しようとするクローズは、同じディスダークの三銃士であるシャットと競うようにゼツボーグでノーブル学園を襲撃。だがキュアフローラとキュアマーメイドの活躍で、２体のゼツボーグは浄化される。じつは犬が大の苦手だったれいこも、はるかの提案に賛同し、パフは寮にいることが認められた。

▼寮で犬を飼うことに賛成と反対の意見は同数。みなみは「１週間後に全員が賛成すれば飼う」と提案する

STORY ストーリー

プリンセスプリキュアの活躍をレビュー!

▲きららは、学校の休み時間も手帳にファッションショーのアイディアをメモするなど、トップモデルへの夢に向けて突き進んでいる

第4話 キラキラ きららはキュアトゥインクル?

モデルの仕事が忙しいのでプリキュアはできません!

なくなったプリンセスパフュームは、天ノ川きららが持っていた。はるかたちは、モデルの仕事で多忙な彼女を追って街へ向かう。そこに現れたゼツボーグを撃退するキュアフローラとキュアマーメイドが「一緒に戦おう」と誘うが、きららはパフュームを返してきた。きららが3人目のプリキュアと確信するはるかたちは、彼女が出演するファッションショーへ。そこに再びクローズのゼツボーグが襲ってくる。ショーを邪魔されて怒るきららは、楽屋で見つけたドレスアップキーとアロマから渡されたパフュームを使ってキュアトゥインクルに変身。見事にゼツボーグを浄化するきららだったが、「忙しいのでプリキュアはできない」と、またしてもパフュームを返してしまう。

▲ゼツボーグにひと泡吹かせるためだけに戦ったきららは、はるかたちの誘いをあっさり断る

◀敵を浄化する技の掛け声は「キラキラ、星よ! プリキュア・トゥインクル・ハミング!」

◀楽屋の化粧ポーチの中にあったキーを気に入ったきららは、ペンダントにして首から下げた

第5話 3人でGO! 私たちプリンセスプリキュア!

モデルもプリキュアもフル回転して頑張る!

きららは、彼女にプリキュアになってほしいと願うはるかを自分の1日に付き合わせ、忙しさをわかってもらうことにする。レッスンや雑誌の取材、ファッションショーのオーディションなど、目の回るようなスケジュールだ。きららの夢と忙しさを知ったはるかは、仲間に誘うのをあきらめ、きららを応援すると約束する。ところがきららの心の中では、はるかは夢と同じくらい大切な〝仲間〟に成長していた。オーディションに合格した連絡を受けたきららは、ゼツボーグと戦うはるかとみなみのもとへ駆けつけて、キュアトゥインクルへ変身。戦いを終えたきららは、忙しくても、はるかと一緒なら200%の力を発揮できるとして、プリンセスプリキュアの仲間になった。

◀きららは、はるかのアドバイスで「星」のアクセを追加し、オーディションに合格した

▲人々を絶望の檻に閉じ込めてゼツボーグを生み出すクローズとシャットの目的は、プリンセスプリキュアの誕生を阻止すること

▲れいこは、彼女を守ろうとするパフが、小さな体で巨大なゼツボーグに立ち向かう勇気ある姿に感動する

▲犬が苦手だったれいこが反対票から賛成票に変わり、勇気を振り絞ってパフの頭をなでた

プリンセスレッスンパッド

▲ミス・シャムールが宿るパッド。カナタとの通信手段にも使われ、立体映像を投影できる

第6話 レッスンスタート！めざせグランプリンセス！

12個のキーを見つけて究極のプリンセスになる！

アロマは、プリンセスプリキュアの目標とは、ゼツボーグと戦うことと、究極のプリンセスである「グランプリンセス」になることだと説明する。そのレッスンをしてくれるのは「レッスンパッド」から現れるミス・シャムールだ。そこへ、カナタから連絡が届く。彼は、はるかたちに、絶望の魔女・ディスピアが率いるディスダークに侵略されたホープキングダムを取り戻すために、12個のドレスアップキーを集め、キーの力を解放するグランプリンセスになってほしいと願う。一方、ディスピアも、キーを探して破壊しようとしている。三銃士のひとりのロックが差し向けたゼツボーグを浄化した3人は、残り9つのキーを見つけてグランプリンセスになることを誓い合った。

◀ロックは初対面のキュアフローラを「花のプリンセスというわりに地味だね」とけなして、彼女を怒らせている

◀ロイヤルティーチャーのミス・シャムールが、グランプリンセスに必要な素養を教えてくれる

第7話 テニスで再会！いじわるな男の子?!

昔も今もバカにされてはるかのやる気に火がついた

ノーブル学園で球技大会が開催される。みなみはサッカー、きららはバスケットボール、はるかは未経験のテニスを選ぶ。ペアを組む藍原ゆうきは、幼稚園時代にプリンセスになるというはるかの夢をバカにした男の子で、今回も「お前は立っているだけでいい」とバカにする。ゆうきを見返すためにミス・シャムールのレッスンを受けるはるか。だが、ゆうきがテニスに打ち込む姿を見て、彼も夢に真剣であることを知る。大会当日、シャットがゆうきを檻に閉じ込めてゼツボーグを生み出すが、プリキュアの活躍で浄化。キュアフローラを見たゆうきは、はるかの夢を認め、頑張りやな彼女を見直した。ただし、ふたりが本当に仲よくなるには、まだちょっぴり時間がかかるようだ……。

▲▼テニスで負けたくないゆうきにとって、初心者のはるかは下手に動かれると迷惑な相手？

◀「一番プリンセスっぽい」という浮ついた理由でテニスを選んだはるかに、ゆうきは激怒！

◀ゆうきは、ミス・シャムールとの極秘の練習でサーブの腕を上げたはるかの根性を認めてくれた

第8話 ぜったいムリ!?はるかのドレスづくり！

はるかを信じて任せるか救いの手をさし伸べるか？

はるかは、生徒が正装で参加するノーブルパーティに、自分で作ったドレスで参加すると決心するが、夜遅くまでドレス作りに励んだことで勉強がおろそかになり、みなみに注意される。奮起して勉強もドレス作りも頑張るはるか。ところが、パーティ前日、パフが誤ってドレスを汚してしまう。はるかを信じて見守るみなみと、時間的に絶対間に合わないと心配するきらら。そこにゼツボーグが出現。みなみときららは、はるかがドレス作りに集中できるように、ふたりで迎え撃つ。しかし、すべてのことを頑張ると自分に誓ったはるかは、作業を中断して参戦し、ゼツボーグを浄化する。無事にドレスを完成させたはるかは、心配してくれたきららのやさしさに感謝するのであった。

▶夜遅くまでミシンをかけるはるか。音楽の授業のリコーダーを手元に置き、その練習も欠かさない

プリキュアの役目が判明したパフ♥

第9話 幕よあがれ！憧れのノーブルパーティ！

宴の舞台裏の怪しい暗闇でみなみの弱点が明らかに！

華やかなノーブルパーティが始まった。大はしゃぎするはるかだが、みなみがパーティを陰で支えていると知って、みなみの役に立ちたいと願う。一方、クローズが倉庫でゼツボーグを生み出し、パーティ会場を停電させてしまう。停電の原因を調べるべく倉庫へ向かったみなみは、お化けを見せて驚かすゼツボーグの攻撃に顔色を変える。彼女は、小学校時代の肝試しのトラウマでお化けが苦手なのだ。だが、駆けつけたキュアフローラの「学園のプリンセスを守るナイトになる」という言葉に勇気を得たキュアマーメイドがゼツボーグの浄化に成功。再開したパーティでダンスに誘ってくれたみなみに「これからも頼りにしていい？」とささやかれ、役に立てたはるかは大喜びした。

◀みなみは、かつて肝試しで友人の乗せいらがおどかしすぎたため、お化け恐怖症になってしまった

◀生徒会が主催するノーブルパーティは、生徒会長のみなみが準備や進行を指揮している

第10話 どこどこ？新たなドレスアップキー！

プリンセスプリキュアの秘密をゆいに見られた！

カナタから、新たなドレスアップキーの反応があったとの連絡が入る。その場所は、なんとノーブル学園。校内をあちこち探す3人だが、キーは見つからない。ゆいは、寮母の白金さんが不思議な鍵を持っているのを見たという。白金さんのあとをつけた3人は、ローズガーデンの中に建つ風車小屋を発見する。そこは、卒業生の将来の夢が刻まれたタイルが内側の壁一面に貼られた秘密の場所だった。そこにクローズが現れて、卒業生の夢がつまった風車小屋をゼツボーグに変える。はるかたちは、彼女たちをこっそり追ってきたゆいが見ている前で変身。決め技を3人同時に放つことでゼツボーグを浄化した。3人が新たなキーを入手して喜んでいると、ディスピアの幻が現れた。

▲風車小屋の壁が、きららの母やみなみの兄たち、学園の卒業生が作った夢のタイルで輝く！

〜エレガント〜
ドレスアップキー

◀それぞれふたつ目のモードエレガントにドレスアップするためのキー。実際に使うのは11話

▲はるかのために紅茶を運んでいたパフが足をすべらせて、完成目前だったドレスを汚してしまった

▲▼寝不足のはるかはフラフラだ。でも、頑張る大切さを教えてくれたみなみや、自分を心配してくれたきららのために頑張る！

第11話 大大大ピンチ!? プリキュアVSクローズ！

巨大な絶望の檻の中でも夢を信じて活路を開く！

プリンセスプリキュア3人とゆいは、ディスピアが作り出した巨大な絶望の檻へ飛ばされる。そこは、ディスダークの力が何倍にも強くなる世界だった。巨大な鳥に変身したクローズの猛攻に3人は手も足も出ない。一方、アロマとパフから事情を聞いたゆいは、パッドで連絡してきたカナタの「プリキュアの夢が『クリスタルプリンセスロッド』を引き寄せる」という言葉を3人に伝える。3人が夢を強く念じると、新たな力・ロッドが届く。それに風車小屋で手に入れたエレガントドレスアップキーをセットすると、3人は新しいモードエレガントにドレスアップ。クローズを浄化して絶望の檻の世界を破壊したプリキュアたちは、無事にノーブル学園へと戻ることができた。

▲▼ディスピアは、クローズがすべてをかけてプリキュアを始末するために最後のチャンスを与えた

◀事情を知ったゆいは、危険をかえりみず、カナタからの伝言をはるかに届ける覚悟を決める

クリスタルプリンセスロッド

▶ホープキングダムの王家に伝わる秘宝。プリキュアの夢の力を感じて引き寄せられる

輝け！ 3つの力！ プリキュア・トリニティ・リュミエール！

▲エレガントキーをセットしたロッドで空中に描いた巨大なティアラ。その光が敵を浄化する

モードエレガント

▲フローラは「バラ」、マーメイドは「氷」、トゥインクルは「月」の攻撃技を使えるようになった

第12話 きららとアイドル！ あつ～いドーナッツバトル！

新商品の試食をかけて燃える三番勝負に挑戦

きららにTVの仕事が入る。好物のマーブルドーナッツを紹介するリポーターだ。はるか、みなみ、ゆいが見物するなか、収録がスタート。レギュラーリポーターの一条らんこは、きららを一方的にライバル視している。そこで、番組の企画で、ふたりは発売前の新作ドーナッツの試食をかけた三番勝負をすることになる。一番目はらんこが勝ち、二番目と三番目はきららの勝ち。そこへシャットが現れて、らんこを檻に閉じ込めてゼツボーグを生み出す。だが、キュアトゥインクルたちがゼツボーグを浄化して、らんこを無事に救出した。暑苦しいらんことの共演を終えてホッとするきらら。だが、らんこはノーブル学園の3年生で先輩だった。ふたりの戦いは、今後も続くようだ……。

▲ドーナッツをモチーフに各自がデザインしたゆるキャラの着ぐるみを着たマラソン対決！

第13話 冷たい音色…！ 黒きプリンセス現る！

バイオリンを奏でる仮面の少女の正体は……!?

ある日、はるかは華麗にバイオリンを弾く仮面の少女と出会う。バイオリンに興味を持ったはるかは、みなみに紹介されたバイオリン職人の錦戸から1台プレゼントされる。練習するはるかに仮面の少女は「心を閉ざして弾け」と助言した。そんなはるかの演奏を聞いた錦戸は「気持ちが見えない」と感心しない。そこへシャットを連れた仮面の少女が現れる。彼女はディスピアの娘・トワイライト。ディスダークのプリンセスだったのだ。彼女の「黒いキー」で胸の鍵を開けられたシャットがパワーアップ。錦戸を檻に閉じ込めて生み出したゼツボーグにプリキュアたちは苦戦するが、浄化に成功。事件後、花をイメージしたはるかの演奏を聞いた錦戸は、満足そうに微笑んだ。

◀バイオリンをもらったはるかは、ミス・シャムールのレッスンを受ける

▶トワイライトが持つ「黒いキー」は、プリキュアのドレスアップキーとは違うものだ

◀みなみときららからアドバイスしてもらったはるかは、心をこめてバイオリンを弾いた……

重要人物が続々と登場する日々！

第14話 大好きのカタチ！春野ファミリーの夢！

はるかの妹・ももかが不機嫌なのはなぜ？

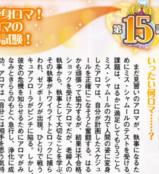
ノーブル学園の「ファミリーデー」は、1年生の家族を招いてもてなすイベント。久しぶりに両親と妹・ももかに会えて喜ぶはるかだが、ももかはなぜか不機嫌。ももかは、学校の仲間と楽しそうにしているはるかを見て「自分たちははるかと会えなくてさびしいのに、はるかは平気そうだ」と混乱し、すねていたのだ。きららに「さびしい思いははるかも同じ」と諭されて、ももかははるかと仲直り。そこへトワイライトとシャットが現れ、はるかの家族を閉じ込めてゼツボーグを繰り出す。しかし、ももかが手作りしたティアラを守るキュアフローラがゼツボーグを浄化した。ティアラを頭につけてバレエを踊るはるかに、ももかが声援を送る。春野一家の絆は強まったようだ。

▼はるかは、学友とおそろいである頭の花飾りの上に、ももかの手作りティアラをつけている

◀和菓子店を営む春野ファミリーの夢を絶望に変えて生まれたゼツボーグは、どら焼き型

第15話 大変身ロマ！アロマの執事試験！

執事にとって大切なのはいったい何ロマ……？

まだ見習いのアロマが、執事になるためにミス・シャムールのテストを受ける。課題は、はるかに満足してもらうこと。ミス・シャムールの力で人間の姿に変身したアロマは、自分が計画したスケジュールを正確にこなそうと奮闘する。はるかも頑張って協力するが、結果は不合格。ショックを受けたアロマだが、老婦人の執事から、執事として大切なことを学ぶ。その執事がトワイライトとロックに捕らわれ、ゼツボーグが出現。ひとりで戦うキュアフローラがピンチに陥る。しかし、彼女の危機を知らせるためにアロマがみなみときららのもとへ急行し、浄化に成功。アロマは「自分には相手を思う気持ちがたりなかった」と反省し、執事の修業をいちからやり直す決意を固めた。

▶アロマは、食事や乗馬や買い物など、たくさんの予定ではるかに満足してもらおうと考えた

▲アロマは執事、はるかはグランプリンセス。どちらが早くなれるか？　アロマは自信満々！

第16話 海への誓い！みなみの大切な宝物！

海に暮らす生き物たちや海を愛する人々を守る！

みなみの家族・海藤グループが経営する海のリゾートで開かれる、地元の人々への感謝祭。それに招かれたはるかときららは、みなみの兄・わたるや野生イルカのティナを紹介されて大興奮。そこへ、トワイライトとロック＆シャットが出現。ロックがわたるを檻に閉じ込めてシャチ型のゼツボーグを生み出し、シャットもタコ型のゼツボーグを繰り出してくる。戦闘中に、ティナがゼツボーグの攻撃からキュアマーメイドをかばって負傷してしまう。すると、輝く海底からやさしさに満ちた泡がわき上がり、ミラクルドレスアップキーが出現する。その勢いで反撃する3人は、2体のゼツボーグを無事に浄化できた。海の生き物たちは、海の平和を守った3人に感謝してくれた。

▲野生イルカのティナは、幼いころ海で溺れたみなみを助けてくれた。彼女の大切な友だ

▼みなみの兄は、幼いころに「海の王者・シャチのように強くなりたい」と願っていた

▲輝く海底からわき上がる泡に包まれると、ティナの傷は癒され、新たなキーが現れた！

◀ロッドにセットして、泡で敵の動きを封じる技「プリキュア・バブル・リップル」を放つ

▲平和を取り戻した海で喜ぶティナたちを見て、みなみにもうれしさがこみ上げてくる

第17話 まぶしすぎる！きらら、夢のランウェイ！

ステラ&きらら母子が実家と舞台で大激突！

きららと彼女の母親・ステラが出演するファッションショーの前日。きららの緊張を察したステラは、きららと一緒にはるかとみなみを強引に自宅へ連れて行く。娘の気持ちを逆なでするステラの言動に、きららの怒りが爆発。ところが、怒りを発散したことできららの緊張はすっかり解けていた。それがステラの狙いだったのだ。ショーの当日、その舞台へトワイライトとシャットが登場し、ステラを檻に閉じ込める。ステラの夢は、きららとの母子共演。ふたりの絆に引き寄せられて、キュアトゥインクルの前に新たなミラクルドレスアップキーが出現する。ゼツボーグは浄化され、ショーも成功。ステラときららは「ふたりでトップモデルになる」という新たな夢を誓い合った。

▲ステラは、彼女への強いライバル心から焦るきららをリラックスさせるため、怒らせるように仕向けた

▼娘のきららと一緒にランウェイを歩く夢をかなえたステラ。だが、夢は尽きることがない

◀「焦っても仕方ない。自分は自分」とリラックスしたきらら
▼その笑顔をデザイナーは称賛

◀無数の流れ星で敵を攻撃する技「プリキュア・ミーティア・ハミング」を発動できる

第18話 絵本のヒミツ！プリンセスってなぁに？

みんなの中にいろんなプリンセスがいる！

はるかが大好きな絵本『花のプリンセス』の作家・望月ゆめ先生のサイン会が開催。はるかが絵本の結末を尋ねると、望月先生は「それぞれが考えた結末があっていい」と話す。そこへトワイライトが現れ、望月先生たちを鏡に閉じ込めた異空間でプリンセスプリキュアに戦いを挑む。3人を偽物のプリンセスと見下すトワイライトは手強い。だが、望月先生の言葉から「自分だけのプリンセスをめざす」というキュアフローラの強い想いが、ミラクルドレスアップキーを出現させる。3人の新たな合体技を受けたトワイライトは「プリセンスは私だけよ」という捨てゼリフを残して退散していった。またひとつ成長した3人が帰るノーブル学園。その学園長こそ、望月先生だった。

▲▼ディスピアは、プリキュアとの直接対決へ向かうトワイライトに、新たな黒いキーを授けた

◀大きなユリの花びらの吹雪で敵を攻撃する「プリキュア・リス・トルビヨン」を放つ

輝け！3つの力！プリキュア・トリニティ・エクスプロージョン！

◀ロッドに追加される輝くリボンで空中にティアラを描き、そこから放たれる光で浄化する

第19話 はっけ〜ん！寮でみつけたタカラモノ！

4つ目のプリンセスパフュームが見つかった！

バイオリンのプリンセスレッスンを受けるはるかたちは、ミス・シャムールに「カナタには、ホープキングダムのプリンセスである妹がいた」と聞かされる。そのころホープキングダムでは、プリキュアに敗れたことを悔やむトワイライトが城を抜け出した。プリキュアへの怒りを燃やすシャットはノーブル学園へ。寮の食堂のおばさんを閉じ込めてゼツボーグを生み出した。女子寮では、交流を深める宝探し大会の真っ最中。みんなが互いに別の一面を知り、新たな友情という宝物を手に入れたのだ。はるかたちも仲間を守る気持ちを強くしてゼツボーグを浄化する。一方でトワイライトは、誰かに呼ばれるようにして足を踏み入れた古城で、プリンセスパフュームを発見した。

◀トワイライトはシャットの言葉に腹を立てて城を出た。プリキュアを恨むのは筋違いだ

◀▼くじで決まった3人のチームでクイズを解く。正解・不正解の判定は臼金さんの担当

◀トワイライトは「パフュームがあれば、プリキュア以上の力を得られる」とほくそ笑む

第20話 カナタと再会!? いざ、ホープキングダムへ！

4つ目のパフュームでブラックプリンセスが誕生

ディスピアは、トワイライトが持ち帰ったプリンセスパフューム用に黒いドレスアップキーを生み出し、彼女に授けた。同じころ、はるかたちの9つのキーが輝き、3人をホープキングダムへ瞬間移動させる。3人はバラバラになるが、はるかのもとにカナタが駆けつけた。キーに導かれた3人はそれぞれ別の古城にたどり着き、先代プリンセスプリキュアから「4つ目のパフュームに闇が迫っている」と告げられる。ホープキングダム城で再会した3人は、カナタの案内で城内へ。彼らの前に現れたトワイライトを見たカナタは、彼女が行方不明になっている妹のトワだと告げる。驚く一行の前でトワイライトはパフュームに黒いキーをさし、ブラックプリンセスにドレスアップした。

▶9個そろったドレスアップキーが突然輝き、はるかたちをホープキングダムへと召喚した

トワイライトの正体が判明したパフ♥

▶▼シャットとロックの攻撃を振りきったみなみときららも、ホープキングダム城へ到着

◀▲カナタと再会したはるかは、先代プリキュアの言葉を聞いてホープキングダム城へ急行する

▲▼黒いキーを使ったパフュームからは、トワイライトが怯えるほどの闇のエネルギーが噴出した

▲トワイライトは、カナタの妹で、グランプリンセスになる夢を抱いていたトワだった！

第21話 想いよ届け！プリンセスVSプリンセス！

暗闇から妹を呼び戻す兄のバイオリンの調べ

ブラックプリンセスの力は強大で、プリキュアとカナタは倒れてしまう。ディスピアは、自分がトワを絶望の森に引き寄せ、ホープキングダムを絶望に包むためにトワイライトとして育てたことを明かした。絶体絶命だが、キュアフローラは希望を捨てていなかった。トワイライトが弾くバイオリンの音色には夢とカナタへの想いがあふれていたので、トワの心はむりやり閉ざされているだけに違いない、というのだ。3人が放った合体技とカナタのバイオリンの音色に心を呼び覚まされて、トワイライトはトワへと戻った。激怒したディスピアが繰り出した茨の触手を防ぐカナタ。彼は、トワを託した3人を元の世界へ戻して、自分は留まり、ふたつの世界をつなぐ扉を破壊した。

▲思い出の曲を耳にしたブラックプリンセスの目から涙がこぼれ落ち、その心は浄化された

▶扉を破壊すればディスピアの魔手が広がるのを防げるが、もう行き来はできなくなる!?

▼ディスピアに記憶や心を消されて、トワイライトとして育てられたトワには、カナタの声は届かなかった

第22話 希望の炎！ その名はキュアスカーレット!!

ディスピアをはねのけて トワがプリキュアに！

ディスピアから解放されたトワだが、トワイライトとして数々の罪を犯してきたことを苦しみ、はるかがカナタから預かったバイオリンを受け取ろうとしない。そこへディスピアが現れ、トワを茨に閉じ込めて絶望を吸いつくそうとする。仲間の協力により茨の中に飛び込んだキュアフローラの「失敗を一歩ずつ取り返せばいい」という説得で、トワは自分を取り戻す。しかも、再びグランプリンセスをめざす彼女の強い心で、パフュームとキーが姿を変えた。それを使ったトワはキュアスカーレットに変身して、カナタのバイオリンは「スカーレットバイオリン」へと変貌した。ディスピアを退けたトワは、カナタのバイオリンを通して、彼がどこかで生きていることを感じていた。

▲トワとフローラが奏でる音色が重なってひとつの曲になり、絶望が消えると檻も消滅する

深紅の炎のプリンセス！ キュアスカーレット！

▶ディスピアが20話でトワイライトに与えた黒いドレスアップキーが、炎の中で変化した

ドレスアップキー

〜エレガント〜 ドレスアップキー

〜フェニックスキー〜

〜ハナビキー〜

◀最初に使った黒いキーがフェニックスキー、2番目の黒いキーがハナビキーに変化する

◀浄化する技の掛け声は「羽ばたけ、炎の翼！ プリキュア・フェニックス・ブレイズ！」

スカーレットバイオリン

◀先端にドレスアップキーをセットし、弓で短い曲を奏でることにより技を発動する専用武器

▼▶ディスピアの実体が出現し、トワはいばらの塔の最上階にある檻に閉じ込められてしまった

第23話 ず〜っと一緒！ 私たち4人でプリンセスプリキュア！

夢への一歩を踏み出すために 学園で心に温もりを補給！

はるかたちに親切にされるトワは、「私はホープキングダムを救うまで楽しい思いをしてはいけない」と自分を責め、ひとりで生きようとする。ところが、故郷とはまるで違うルールにとまどうばかり。そんなトワに望月先生が声をかけ「心に温かいものを入れると動く力がわく」とアドバイス。そこへ、絶望の森で体を癒すディスピアの代理で指揮を執るロックが現れる。望月先生が檻に閉じ込められて、ゼツボーグが出現。ひとりで立ち向かうキュアスカーレットは苦戦し、駆けつけたはるかたちに力を貸してほしいと頭を下げた。4人が力を合わせて浄化に成功。望月先生にノーブル学園への入学を勧められたトワは「学園で、温かいものをたくさん見つけますわ」と笑顔で答えた。

▲体を癒すため絶望の森へ戻るディスピアは、「絶望ゲージ」が一杯になるまで人間の絶望を集めるように命じた

▼甘味処でトワにごちそうしてくれた望月先生が学園長だったことは、みなみたちにも初耳！

▲キュアスカーレットは、過去の過ちを謝罪し、人々を救うために協力を求めた

▲掛け声は「つよく！ やさしく！ 美しく！ Go！ プリンセスプリキュア！」

▲人間世界を知らないトワは、城を手に入れようとするなど、トンチンカンなことをしでかす

トワさまのいろんな面が見られた日々!

▲キーは12個集まったが、トワのキーはカウントされない？

第24話 笑顔がカタイ？ ルームメイトはプリンセス！

モデルの仕事とトワの世話できららはてんてこ舞い！

トワがノーブル学園の一員になった。だが、執事やメイド任せの生活をしてきた彼女は、なんでも自分でやる寮の暮らしに、すぐにはなじめない。トワのトンチンカンな言動をフォローするのは、ルームメイトで同級生のきららの役目だ。だが、新たなモデルの仕事が決まって忙しさが増したうえに教室や寮でトワの面倒を見るきららは、疲れがたまっていく。寮の洗濯当番でふたりきりになったとき、トワから「笑い方を教えて」と頼まれたきららは、自分のほうが笑顔を忘れていたことに気がつく。互いに自然な笑顔を取り戻すことで気持ちが通じたふたりは、ロックが生み出したゼツボーグを抜群のコンビネーションで浄化。きららとトワは心を許し合える親友になれたようだ。

▶学校で「ホープキングダムから来た」と自己紹介するトワ
◀見守るアロマとパフ、きららは仰天！

▲笑うことを忘れたトワは「笑えば温かいものに近づけそうな気がする」という

第25話 はるかのおうちへ！ はじめてのおとまり会！

夜の暗闇を怖がるトワ その悲しい理由とは？

多くの生徒が帰省する夏休み。和菓子店を営むはるかの実家に、みんなで泊まることになった。みなみとトワにとっては初めてのお泊まり会だ。一行は、店の手伝いや温泉、流しソーメンで夏を満喫。昼寝で悪夢にうなされるトワは「夕暮れになるとトワイライトの記憶を思い出し、また闇に飲み込まれるようで夜が怖い」という。みなみは「もっと仲間を頼っていい」と助言する。花火を楽しむ一行の前にシャットが現れた。トワイライトを恨む彼は、ゼツボークでトワを襲撃する。しかし、みなみは「トワイライトではない、私たちの仲間のトワよ！」と宣言。頼れる仲間と協力してゼツボーグを浄化したトワは、眠るのがもったいないと思えるほど、夜が怖くなくなっていた。

▲「春屋」は、座敷やテーブルでスイーツを提供する甘味処タイプの和菓子店
▼はるかは看板娘だ

▶みなみがスーツケースにつめ込んできた大量の花火を、全員で楽しむ

▲みなみは「夜が怖かったら、みんなと一緒にいればいい」と、トワを安心させてくれた

第26話 トワ様を救え！ 戦うロイヤルフェアリー！

トワを守る強い想いでアロマとパフが変身！

生徒がいない寮に戻ったトワが風邪で寝込んでしまう。頼りになるミス・シャムールのパッドは、実家に戻ったはるかが持っている。そこで、はるかに電話で連絡し、ミス・シャムールが調合したハーブティーをアロマが運ぶことにする。パフがトワの看病をしていると、シャットがセミからゼツボーグを生み出す。鳴き声がうるさいゼツボーグを虫捕りアミで捕獲しようと奮闘するパフ。そこへアロマが戻る。パワーアップしたゼツボーグに大ピンチのふたりが突然光に包まれてドレスアップ。その体から発する癒しのオーラを浴びて元気を取り戻すトワと駆けつけたはるかたちの活躍で、ゼツボーグは浄化された。アロマとパフもロイヤルフェアリーとして成長しているのだ。

▼執事とメイドの衣装に変身。これ以降、ふたりの胸飾りはこのデザインに変わっている

▼長い距離を全速力で走ってきた3人も、アロマとパフの光を浴びて疲労が回復していた

OP

第1話～第25話

明るく元気な曲に合わせて、はるかたちの日常や学園生活、プリキュアとしての戦いの様子が盛り込まれた。キャラクターが増えたり、正体が明らかになったりした際には細かく映像が変更されていき、観ているだけでも、こだわりとにぎやかさが感じられる映像となった。変更点はP.79のリストをチェック。6～8話、35～40話は同時期に公開された映画のハイライトシーンを使用した特別仕様となった。

「Miracle Go！プリンセスプリキュア」

第26話～第50話

26話から、歌詞が2番のものに変更された。スカーレット／トワの描写が多数追加されたほか、敵キャラクターなども変更されている。

ED

第1話～第25話

シリーズ前半で使用された「ドリーミング☆プリンセスプリキュア」は、フローラ、マーメイド、トゥインクルの3人によるダンスを中心とした映像。シリーズ後半の「夢は未来への道」は、歌の途中でその日のソロを担当するキャラクターの名前が歌詞に入り、該当するキャラクターのソロによるダンスにスポットを当てた構成になっている。39～42話は、映画の中編に登場したレフィの姿が描かれたオリジナル仕様だ。

「ドリーミング☆プリンセスプリキュア」

ED エンディングテーマ振り付け ▶▶▶ MIKIKO 第26話～第50話

「夢は未来への道」

トゥインクル Ver.

フローラ Ver.

スカーレット Ver.

マーメイド Ver.

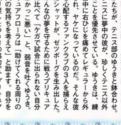
主題歌（OP）

「Miracle Go！プリンセスプリキュア」
作詞／大森祥子　作曲／渡辺亮希
編曲／渡辺亮希、池田大介
うた／礒部花凜

主題歌（ED）

「ドリーミング☆プリンセスプリキュア」
作詞／マイクスギヤマ
作曲／山本清香　編曲／多田彰文
うた／北川理恵

主題歌（ED）

「夢は未来への道」
作詞／マイクスギヤマ
作・編曲／石塚玲依
うた／北川理恵

映画公開中は限定カットも！

第27話 ガンバレゆうき！応援ひびく夏祭り！

今のゆうき君はかっこ悪い！フローラ流の応援は叱咤激励

夢ヶ浜の夏祭りを浴衣姿で楽しむはるかたちが、テニス部のゆうきと鉢合わせ。テニスに夢中の彼が、珍しくテニス以外のことを優先させている。ゆうきは、練習中に右ひじを痛めてレギュラーから外され、ヤケになっているのだ。そんな彼を心配するファンクラブの3人を捕らえたシャットが、ゼツボーグを生み出した。みんなの夢を守るために戦うプリキュアに比べて「ケガで試合に出られない自分はかっこ悪い」と、弱音を吐くゆうき。キュアフローラは「助けてくれる周りの人の気持ちを考えて」と励ます。自分を取り戻したゆうきの協力で、プリキュアはゼツボーグを浄化。テニス部の合宿に備えて寮へ戻るゆうきは、フローラが自分を知っていることを不思議に思った。

▲ゆうきのファンクラブトリオは、はるかに彼のことを元気づけてほしいとお願いする

第28話 心は一緒！プリキュアを照らす太陽の光！

ゆいが見ていてくれるからプリキュアたちは戦える！

海藤家の別荘があるプライベートビーチで遊ぶはるかたち。トワは、自分が泳げないことを恥ずかしくて言い出せない。ゆいは、一緒に別荘に戻ったトワに絵日記を見せて「いつか誰かにみんなのことを伝えるのが友達である自分のやるべきこと」と語る。そこへロックが現れて、ゆいを檻に閉じ込め、ゼツボーグを生み出す。浜辺にいるはるかたちの前に移動したロックは、3人に分身して戦いを挑む。キュアスカーレットがゼツボーグを浄化して無事にゆいを救出。すると、ゆいの絵日記から、これまでにない新たなドレスアップキーの「サン」が生まれた。はるかたちもロックを撃退したかに見えたが、3人が持っていたすべてのドレスアップキーをロックに盗まれてしまった。

▼プライドが高いトワは、素直に「泳ぎが苦手」と言えず、ゆいをうらやましく思った

▲不気味な影が3人のドレスの表面をすばやくはい回り、それぞれのキーを奪っていった

◀発動時の掛け声は「燃えよ！ 炎よ！ プリキュア・スカーレット・プロミネンス！」

第29話 ふしぎな女の子？受けつがれし伝説のキー！

決してあきらめない3人へ先代が贈る新たなキー

キーを盗まれて落ち込むはるかたちを助けたいパフが、キーの匂いをたどる。あとを追うはるか、みなみ、きららは、森で3人の少女の茶会に招かれた。そこへディスピアが出現。変身できなくてもあきらめないはるかたち。それを見た3人の少女が差し出すキーで変身したはるかたちがディスピアを撃退。だが、それはディスピアの幻影だった。先代のプリンセスプリキュアだと名乗る3人は、夢と希望を失わないことを誓うはるかたちに、新たなドレスアップキーを渡して消えていく。夢を守る決意を新たにしたはるかたちの前に、巨大なゼツボーグが現れる。それは、ロックが3人から奪ったキーの膨大なエネルギーによってゼツボーグと化したホープキングダム城だった。

▼森で出会う少女は、変身前の先代プリンセスプリキュア。そこは彼女たちの記憶の世界。かつてのホープキングダムだ

▲9つのキーの夢の力が絶望に変換されて、「絶望ゲージ」は一気に満タンになった！

第30話 未来へ！チカラの結晶、プリンセスパレス！

王になる野望を抱いたロックが巨大な怪物に！

アロマとパフは、城の中に奪われたキーがあると察知。分身したロックの相手をキュアスカーレットに任せた3人は、先代から渡されたキーと奪われたキーが呼び合う力を利用して城内へ向かう。変身できない3人は、アロマやパフの援護でロックの攻撃をかわし、檻に近づく。一瞬の隙をついたはるかが檻の鍵を開け、閉じ込められていたキーを取り戻した。怒ったロックは分身を合体させ、城に残る絶望の力を吸収して巨大な怪物に変身。キュアスカーレットも駆けつけて戦いに加わるが、ロックは手強い。だが、4人の絶対に負けないという想いにキーが反応し、ホープキングダム城は「プリンセスパレス」に姿を変える。それを使った4人の合体技で、ロックは浄化された。

▼すべてのキーの輝きが城のゼツボーグを浄化して「プリンセスパレス」に変えたのだ！

◀▲はるかは「サクラキー」を使って絶望の檻の鍵を開ける。パフも、頑張って手伝うパフ♥

プリキュアの新たな力が誕生パフ♥

▲絶望の王となる野望を抱いていたロック。その正体は、ロックが着ていたパーカーだったのだ

響け！すべての力！プリキュア・エクラ・エスポワール！

プレミアムドレス

◀4人の合体技だけではなく、それぞれの一番強い決め技も発動できる

第31話 新学期！新たな夢と新たなる脅威！

絶望のタネをまき散らす復活のクローズ

2学期が始まった。花壇の草むしりを再開するはるかが、花が好きな同級生の小森はなえと意気投合。そんなはるかの前に、蘇ったクローズが現れる。彼が呼び寄せた新たな幹部のストップとフリーズは、はなえを檻に閉じ込めてゼツボーグを生み出した。プリキュアたちがそれをプリンセスパレスの力で浄化すると、クローズは「絶望は絶望を育てて大きくなる」という不吉な言葉を残して消える。ホープキングダムに戻ったクローズは、ロックの絶望で一杯になった「絶望ゲージ」を絶望の森のディスピアに捧げる。そこに生まれた茨の城にて、ディスピアが復活。クローズから「人間の世界に絶望のタネをまいた」という報告を受けたディスピアは、満足気な笑みを浮かべた。

▲▶ロックに憑依されていた妖精のクロロをはるかたちが保護した

▼各地にまかれた「絶望のタネ」は、地面に落ちると地中に吸い込まれ、周囲を絶望の闇に染める

プレミアムドレスアップキー

▲それぞれ「桜吹雪」「珊瑚やイルカの群れ」「銀河からの星のシャワー」の攻撃技を発動する

▶夕暮れ迫る大空に突然亀裂が走り、そこから巨大なホープキングダム城のゼツボーグが出現

◀新幹部のストップとフリーズは中身の色が緑色の「絶望のタネ」から生まれた

第32話 みなみの許嫁!? 帰ってきたスーパーセレブ！

以前のみなみと今のみなみ どちらが素敵なの……？

みなみの許婚を自称する伊集院キミマロが英国から帰国。彼は、みなみが地面に座ってランチをしたり、庭仕事で指先を傷つけたりしているのを見て、彼女が以前と比べて変わったとショックを受ける。その元凶をはるかと思い込むキミマロは、はるかに「みなみにふさわしくない」と宣告。それをみなみに怒られて落ち込むキミマロをストップとフリーズが絶望の檻に閉じ込め、ゼツボーグを生み出した。キミマロの言葉を気にするはるかは、みなみにふさわしい相手になろうとして焦り、空回りする。みなみに「はるかのままでいて」と言われて自分を取り戻したはるかは、仲間と力を合わせてゼツボーグを浄化。はるかに謝罪したキミマロは、今のみなみも悪くないと思った。

◀みなみは「私は今の私が好き。今の私があるのは、はるかのおかげよ」と、はるかに感謝する

第33話 教えてシャムール♪ 願い叶える幸せレッスン！

身だしなみの乱れは心の乱れ 戦う相手にも厳しくレッスン

クロロと街へ出かけたミス・シャムールを追うはるかたち。ふたりは猫の集会場にいた。彼女は、不仲の三毛猫と黒猫におしゃれ対決を提案。そこにシャットが現れて、黒猫を絶望の檻に閉じ込め、ゼツボーグを生み出す。シャットと戦うミス・シャムールは、クローズに邪魔されてメイクの途中だったシャットが悩みを抱えていることを見抜き、メイクを手ほどきする。たとえ戦う相手でも、元気のない人を励ますのがエレガントなのだ。プリキュアはゼツボーグを浄化し、メイクに満足したシャットはご機嫌で帰る。それを見ていたクロロも元気になった。助けてくれたお礼に黒猫がはるかにくれたのは、ホープキングダムの王家の紋章が刻印されたカナタの服のボタンだった。

▲▼はるかはメイクのアドバイスを受けようとしたが、ミス・シャムールはバッドを留守にしていた

▲ミス・シャムールは、クロロに元気になってもらうために、彼を街の猫たちに紹介する

▶黒猫が昨日拾ったという綺麗なボタンはカナタのもの。カナタは夢ヶ浜の街にいる!?

第34話 ピンチすぎる〜！はるかのプリンセスコンテスト！

頼りにしていたきららが来ない！ どうする？

カナタを探す手がかりとなる星占いでは、「王子はチョコレートに」というお告げ。そこではるかは、チョコレート会社主催の「プリンセスコンテスト」に出場する。当日、きららは、仕事の遅れとゼツボーグの襲撃でコンテストに間に合わない。はるかは「ショーにトラブルはつきもの。その場にあるものでなんとかする」というきららの言葉を思い出し、ドレスのサイズが大きいトラブルを自力で乗り切る。無事に出番を終えたはるかが戦う3人の元へ駆けつけ、ゼツボーグを浄化する。コンテストで特別賞になったはるかは、マスコットキャラ「チョコレート王子」から花束を贈られた。星占いはこのことだったのか？ 帰り道ではるかは、人混みの中にカナタの後ろ姿を見つける。

▲コンテスト当日は、きららがはるかのメイクをしてくれる予定だった

▲きららのアドバイス「女の子のをかわいく見せるのは笑顔」を守ったはるかは、特別賞を受賞した

第35話

やっと会えた…！カナタと失われた記憶！

記憶をなくしたカナタと友達から再スタート！

街でカナタを探すはるかに、バイオリン職人の錦戸は心当たりがあるという。錦戸の工房に急行するはるかとトワの前に現れたのは、まぎれもなくカナタだ。再会を喜ぶトワがカナタに飛びつく。ところが、海岸で倒れているところを錦戸に助けられたカナタは、記憶を失っていた。はるかたちは、カナタの記憶を戻すため、彼の前でプリキュアに変身したり、トワのバイオリンを聴かせたり、はるかと彼が最初に出会った丘へ彼を連れ出したりする。だが、カナタの記憶は戻らない。そこに現れたストップとフリーズが女の子を閉じ込めてゼツボーグを生み出す。それを浄化したはるかは、夢を取り戻した女の子と友達になったように、今のカナタとも友達から始めることにする。

▲あの手この手でカナタの記憶を呼び戻そうとするはるかたちだが、すべて失敗に終わる

カナタさまがお戻りになられたロマ！

▶ストップとフリーズは、クローズがまいた「絶望のタネ」を育てるために絶望を集めている

第36話

波立つ心…！みなみの守りたいもの！

北風あすかとの出会いでざわめきだす、みなみの心

海藤グループのパーティが豪華客船で行われ、はるかたちも参加。そこで獣医の北風あすかと知り合ったみなみは、海の生き物を見守る彼女の仕事に興味を抱く。あすかは、世界的な海洋学者でもあり、海藤グループ入りを嘱望されていた。だが、自由に海の研究をすることを望むあすかは、その誘いを断っていた。そんなあすかが、ストップとフリーズによって絶望の檻へ閉じ込められてしまう。キュアマーメイドたちの活躍でゼツボーグを浄化し、あすかは無事に救出される。あすかは、自分に似ていると感じたみなみを海の研究に誘おうとする。しかし、みなみの夢は海藤グループの一員として働くこと。誘うのをあきらめて帰るあすか。それを見送るみなみの心は揺れ始めた。

▲両親の夢がつまった船を守る。両親を手伝う仕事を夢見るみなみには当然のことだった

▲▶「私と一緒に……」という言葉を残して去ったあすか。彼女を見送るみなみの表情は複雑だった

◀みなみは「海をもっと知るために組織に縛られず、自由でありたい」と言うあすかに心を強く動かされる

第37話 はるかが主役!? ハチャメチャロマンな演劇会！

はるかがジュリエット役♥ ロミオ役を演じるのは？

各クラスがお芝居を披露する演劇会。はるかのクラスは、ゆいの脚本で『ロミオとジュリエット』を上演する。ロミオ役は演劇部の平野ケンタ。ジュリエット役に抜擢されて悩むはるかだが、カナタが練習に付き合ってくれた。演劇会当日、ストップとフリーズが学校に現れて、ケンタと演出係を捕らえて2体のゼツボーグを生み出す。プリキュアが2体を浄化したものの、ケンタは足をケガしてしまった。このままでは上演できない。カナタが代役を名乗り出るが、はるかは「クラスのみんなの力で上演したい」と、その申し出を断る。足の痛みでケンタが転倒するハプニングをはるかの絶妙なアドリブで切り抜け、『ロミオとジュリエット』の舞台は拍手喝采のうちに幕を下ろした。

▼無事に演劇会を終えたはるかは、カナタの思いやりに感謝。ふたりで名シーンを演じた

▶◀トワときららのクラスは『シンデレラ』を、みなみのクラスは、『竹取物語』を上演することに

第38話 怪しいワナ…！ひとりぼっちのプリンセス！

あきらめないはるかを絶望させる相手とは!?

クローズは、プリキュアの中心にいるはるかを罠にはめようとする。生徒に化けた彼は、撮影で留守にするきららと同じ日に留守にするのをためらうみなみを説得して外出させる。また、ゆいを美術館に誘い、トワがゆいに同行するように仕向けた。さらに、アロマとパフをペットショップへ追いやり、ふたりを見かけたというウソではるかを森へ誘い込んだ。トワとゆいは罠に気づくが、ストップとフリーズに足止めされる。正体を現したクローズにひとりで立ち向かうはるかは、苦戦しつつもあきらめない。ところが、駆けつけたカナタは、はるかが傷つくのを見ていられず、「プリンセスになるな」と言う。幼いころからの心の支えを否定されたはるかは、絶望してしまった……。

▲▼クローズは、隣のクラスの「黒須」と名乗り、夢を応援する芝居で、はるかの心を開かせる

第39話 夢の花ひらく時！舞え、復活のプリンセス！

夢こそはるかのすべて なくすなんてできない！

はるかの絶望で、絶望のタネが芽吹く。絶望の檻に閉じ込められた街の人々からゼツボーグの群れが生まれ、キュアマーメイド、キュアトゥインクル、キュアスカーレットが立ち向かう。絶望しているはるかは、変身できない。その悲しみで倒れ伏したはるかが過去を振り返る……。きっかけは、絵本のプリンセスへのあこがれ。それからの出来事は、最初の夢があって経験できたこと。はるかは、夢があったからこそ今の自分がいることに気づく。その夢をあきらめることはできない。はるかは立ち直り、カナタも「はるかの夢を守りたい」という新たな夢を持つことで記憶を取り戻す。カナタの夢から新たなキーが生まれ、プリキュアたちは新たな合体技でクローズたちを撃退した。

▶はるかは前回購入した演劇会のおれを渡す
◀夢を見てくれた昔の自分に感謝するはるか

みんなの気持ちでパワーアップしたパフ♥

第40話 トワの決意！空にかがやく希望の虹！

この国の王女としてみんなの夢を取り戻します

記憶を取り戻したカナタとの再会を喜ぶトワ。それを見守っていたみんなが、ロイヤルキーの導きでホープキングダムへ瞬間移動する。4つの虹は消え、絶望の森に覆われた故郷を悲しむクロロたち。プリキュアの気配を察知したディスピアが錠前形の分身を生み、メッツボーグに姿を変えてプリキュアたちを襲う。苦戦するキュアスカーレットだが、「民の心の支えとなることがプリンセスの役目」という両親の言葉を思い出す。微笑む彼女を見てクロロも笑顔を取り戻した。メッツボーグを浄化し、スカーレットは民の夢を取り戻す決意を新たにした。それに反応して輝く彼女のキーをセットしたプリンセスパレスに祈ると、廃墟の城は炎の城へと生まれ変わり、赤い虹が蘇った。

ロイヤルマジェスティ！

▶輝くロイヤルキーをパフュームにセットして上の呪文を唱えると、それぞれの城へ瞬間移動できる

燃えさかれ！希望の炎よ！

第41話 ゆいの夢！想いはキャンバスの中に…！

夢の力と夢を守ることの大切さをみんなに伝えたい

美術館の絵画コンクールへの出品を勧められたゆいは、入賞すれば絵本作家に近づけるかもしれないと考えた。しかし、うまく描こうと意識するあまり、自分が描きたい絵がわからなくなってしまう。悩んだあげくコンクールへの参加をあきらめたゆいは、望月先生の絵画教室の子どもたちが描く絵を見て、自分が絵を描く楽しさを忘れていたことに気がつく。そこにストップとフリーズが現れ、子どもたちをかばったゆいが絶望の檻に捕らわれる。ゆいが心の中で必死に抵抗すると檻の中の体がかすかに動き、ゼツボーグが弱まる。そこをプリキュアが浄化。ゆいは、自分が描きたかったのは夢を守るプリキュアの姿だったことを思い出し、完成させた作品をコンテストに出品した。

▲多くの人に夢の力が届いてほしいとの願いがこもったゆいの「夢の虹」は、佳作を受賞

▲ゆいは、さまざまな種類の下書きを描いたことで、自分が描きたい絵を見失ってしまった

▶自分の力で立ち上がるキュアフローラ。そんな彼女の姿を見て、カナタも記憶を取り戻した

～ロイヤル～ ドレスアップキー

▼はるかのプレゼント（バイオリン型アクセサリー）とカナタの新たな夢が融合して生まれた

第42話 夢かプリキュアか!? 輝くきららの選ぶ道！

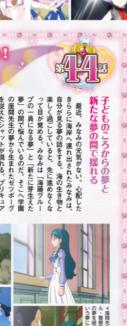
きららの夢だった世界へ 羽ばたくチャンス到来！

世界で活躍するトップモデルという夢への階段を駆けのぼるきららに、海外進出の足がかりとなる世界的なファッションショーへの出演が決まった。ニューヨークで行われるジャパンコレクションだ。そんなきららに、アシスタントとして事務所の新人モデルの明星かりんが付いた。ニューヨークへ出発する日。空港へ向かうきららたちの前にストップとフリーズが現れ、かりんを絶望の檻に閉じ込めてしまう。はるかたちにここは任せて空港へ急げと言われるきららだが、かりんの夢が「きららのようなモデル」と知り、戦いに加わった。ゼツボーグを浄化して無事にかりんを助け出すことはできたが、飛行機に乗り遅れたきららのジャパンコレクション出演の夢は潰えてしまった。

◀プリキュアとしてかりんの夢を守ったが、飛行機に乗り遅れたきらら自身の夢は一気に遠のいてしまった

第43話 一番星のきらら！ 夢きらめくステージへ！

みんなの夢のお披露目会で きららの夢の輝きが復活☆

きららは、モデルの仕事を休業するという。プリキュアの使命を優先し、自分の夢を犠牲にするつもりだ。彼女の夢の輝きをなくさせたくないはるかは、サプライズイベントを企画。みんなの夢を発表するドリームファッションショーだ。それを見たきららは、夢を追う気持ちを取り戻す。ホープキングダムの星の城がきららの夢に反応するのを察知したディスピアが、メッボーグを人間界へ送る。きららたちは浄化に成功し、ホープキングダムに瞬間移動して星の城を目覚めさせる。すると、美しい空と黄色の虹が蘇った。春にパリへ行く誘いをボアンヌから受けたきららを、はるかは「それまでにグランプリンセスになってホープキングダムを取り戻そう」と言って励ました。

▲それぞれ将来の夢を発表。きららのアシスタントのかりんは特別ゲスト

▼デザイナーのボアンヌは、きららを新たなブランドの専属モデル候補にスカウトする

▶城を覆いつくしていた絶望の森が一掃されて、どんよりと垂れ込めた暗雲も消え失せた

第44話 湧き上がる想い！ みなみの本当のキモチ！

子どものころからの夢と 新たな夢の間で揺れる

最近、みなみの元気がない。心配したきららに海岸へ連れ出されたみなみは、自分が見る夢の話をする。海の生き物と楽しく過ごしていると、先に進めなくなって目が覚める。みなみは「海藤グループの一員になる夢」と「新たに芽生えた夢」の間で悩んでいるのだ。そこへ学園の座間先生の夢から生まれたゼツボーグを従えたシャットが現れる。プリキュアたちが立ち向かうが、夢に迷ってプリキュアの力が弱っているマーメイドは思うように動けない。大事なのは自分がどうしたいか。だが「夢は変わっていい」という仲間のアドバイスで、マーメイドの悩みは解消。ゼツボーグを浄化して寮に戻ったみなみが新しい夢を発表する。それは「海の生き物のお医者さん」だった。

◀座間先生は、アイドル・警察官・マンガ家の夢を経て今の教師という夢にたどり着いた

第45話 伝えたい想い！みなみの夢よ大海原へ！

家族と別の道を歩むみなみの決意に対して両親の反応は？

海洋生物の獣医師という夢を見つけたみなみだが、それを家族に言えずに悩む。両親の期待に応えられないのが申し訳ないと涙を流すみなみは、はるかの提案ですぐに報告に行くことにする。そこにメツボーグを従えたシャットが現れた。キュアマーメイドをホープキングダムへ瞬間移動させたシャットは、プリキュアをひとりずつ確実に倒すつもりなのだ。しかし、カナタの連絡で3人のプリキュアも駆けつけて、メッボーグを浄化する。キュアマーメイドが海の城を目覚めさせると、美しい大海原と青い虹が蘇った。人間界に戻ったみなみは、兄に連れられて両親のもとへ。海藤家で働けないことを謝るみなみだが、両親はやりたいものを見つけたことを喜んでくれるのだった。

▼はるかは「大事なことは早く伝えて、悩むのはその後にしましょう！」と、みなみを後押し

◀スーパーメンバーのクリスマス限定ユニットが「Joyful プリキュアクリスマス」を熱唱

▲◀両親も兄も、みなみのことを責めも怒りもせず、彼女に芽生えた新たな夢を歓迎した

第46話 美しい…!? さすらうシャットと雪の城！

ナルシストのシャットが絶望パワーで醜い怪物に

大雪で一面の銀世界になった校庭で雪だるまを作るはるかたちを見て、トワは雪でホープキングダム城を作ろうとする。それを学園のみんなが手伝って、立派な雪の城が完成。そこへ、ディスダークに帰れなくなったシャットが現れる。彼の攻撃で雪の城は半壊。シャットは、ロックとクローズに見下された怒りや恨み、そしてディスピアに見捨てられた悲しみで自暴自棄になっている。自分の絶望で怪物と化すシャットだが、彼を救いたいと願うプリキュアの決め技により元に戻る。彼が壊した雪の城も、ゆいの呼びかけで再び集まったみんなの手で修復された。その様子を見つめるシャットは、ミス・シャムールが差し出すマフラーを黙って首に巻き、おとなしく去っていった。

▼シャットはキュアスカーレットが差し出した手を払いのけ、黙ってその場をあとにした

▼海洋生物の獣医師をめざすというみなみは、海洋学者・北風あすかのブログを毎日チェック

第47話 花のように…！つよくやさしく美しく！

はるかが大好きな絵本の〝花のプリンセス〟に!?

花の城の異変を知らせるカナタのもとへ急行するはるかたち。謎の声に呼ばれて城へ入ったはるかは、花のプリンセスと呼ばれ、王子に歓迎される。それは、はるかを幻の世界に閉じ込めるディスピアの作戦。現実世界では、ストップとフリーズがメツボーグでプリキュアを襲う。タネからすぐ花が咲くことに違和感を覚え、幻の世界を脱出するはるか。自分がなりたいプリンセスは「大地に根付いて咲く花のように、つよく、やさしく、美しくあり続ける存在」と再確認した彼女は、メツボーグを浄化し、花の城を目覚めさせた。ホープキングダムの大地に草花が咲き乱れ、空には4つ目のピンク色の虹が蘇る。だが、ディスピアは「絶望は止められない」と言って姿を消した。

▲▶幻の世界のはるかは『花のプリンセス』の格好に。だがそこは、夢ではなく悪夢の世界

▶◀茨の城が消滅していく。居城を失ったディスピアが向かった先は、人間界だった……

第48話 迫る絶望…！絶体絶命のプリンセス！

みんなの絶望パワーでロッドが砕け散った！

人間界に来たディスピアが、ノーブル学園を茨で包み込む。プリキュアに変身したはるかたちに驚く学園のみんなには、ゆいが事情を説明した。プリキュアたちの前に、復活したロックが立ちはだかる。以前は野望に燃えていた彼が、今はディスピアの操り人形のようだ。クローズが学園のみんなを絶望の檻に閉じ込めて生み出した大量の絶望で、ロックがパワーアップ。その攻撃で、プリンセスロッドとスカーレットバイオリンが砕け散った。一方、自力で檻を脱け出したゆいの呼びかけで、みんなも脱出。絶望が止まり苦しむロックを助けたいと願うクロロ。シャットが「変わるぞ、私たちも。ディスピアの呪縛から抜け出すのみ」と呼びかけ、プリキュアがロックの心を浄化した。

▲プリキュアたちのプリンセスロッドとスカーレットバイオリンが、まるでガラス細工のように砕け散り、光の粒子となって降り注いだ

▶何度も絶望の檻に閉じ込められたゆいは、4度目にして自力での脱出に成功！

▲「ゴールドキー」を使って人々の夢を閉じ込めた絶望の扉を開放する究極のプリンセス

▼すべてのドレスアップキーが融合して生まれたキー。巨大な光の鍵となり、4人がステッキでさした敵に突進する

ゴールドキー

開け！夢への扉！
プリキュア・グラン・リベラシオン！

第49話 決戦ディスピア！グランプリンセス誕生！

みんなの夢を託されて夢の扉へ駆けあがれ！

クローズを取り込んだディスピアが真の姿を現した。プリキュアの攻撃は通用せず、4人は変身が解ける。絶望の扉に夢が吸い込まれ、夢と希望は潰えたかに見えた。しかし、アロマとパフ、そして学園のみんなが立ち上がる。彼らの想いとプリンセスロッドのかけらが結びつき、夢の結晶が生まれた。それをプリキュアに託すと、プリンセスパフュームが4つの扉を出現させる。みんなの後押しと、カナタとミス・シャムール、アロマとパフ、そしてシャットと浄化されたロックをまとったクロロの支援を受け、4人は扉へと続く虹の道を駆けあがる。扉の鍵を開けた4人は、ついにグランプリンセスに変身。4人が放つ巨大な鍵型の光弾に胸を貫かれ、ディスピアは浄化された。

◀クローズたちを体内に取り込み、茨の城と合体した真のディスピアは、まるで山のよう

第50話 はるかなる夢へ！Go！プリンセスプリキュア！

背中合わせの夢と絶望はどちらも人を育てる宝物

ディスピアの力を受け継いだクローズが戦いを挑んでくる。ひとりで立ち向かうキュアフローラは「夢と絶望の両方が自分を育ててくれた。だから両方ともなくしたくない」と言う。彼女の言い分を認めたクローズは去り、戦いは終わった。絶望の扉は開かれ、ホープキングダムの人々は元の姿に戻る。プリキュアは使命を終え、ドレスアップキーは眠りにつく。

学園の修了式。トワとパフ、アロマはホープキングダムへ帰り、きららはパリへと旅立つ。見送るはるか、みなみ、ゆいは、再会を信じて笑顔で別れるのだった。カナタにドレスアップキーを返したはるかは、涙をぬぐって歩き出した。そんな遥か彼方へ向かって走り続ける少女たちの物語は、1冊の絵本になった……。

▼はるかとカナタのエピソードは、きららやトワと別れた修了式のあとの回想シーン。ほかのエピソードは新学期以降の未来の点描だ

▼10年後の世界。少女が読む絵本『プリンセスと夢の鍵』は、ゆいの作品。未来のゆいが描いている絵は、この本の表紙イラストだ

▼キュアフローラが絶望の扉を開くと、世界は光であふれるのであった

Go!プリンセスプリキュアの映画での活躍をチェック!

ムービーガイド

映画でも笑顔の花を咲かせた『Go!プリンセスプリキュア』。彼女たちが活躍した映画を振り返ろう。

40人のプリキュアが歌とダンスを披露した新しい『プリキュアオールスターズ』!

2009年の『DX』から2014年の『NewStage3』まで6作が公開された『映画プリキュアオールスターズ』シリーズ。『NewStage3』のフィナーレを受けて新たに製作された『プリキュアオールスターズ』が本作である。シリーズ第1作『ふたりはプリキュア!』から『Go!プリンセスプリキュア』まで、総勢40人のプリキュアたちによる、妖精の国・ハルモニアでの活躍が描かれる。

プリキュアになりたてのはるか、みなみ、きららの元にも、ほかのプリキュアと同じようにハルモニアから招待状が届く。ハルモニアの守り神に歌とダンスを捧げる「春のカーニバル」が行われるというのだ。そのカーニバルは、妖精やプリキュアたちの歌とダンスで、順調に進んでいくが、開催期間中に妖精たちが行方不明になる。司会のオドレンとウタエンが怪しいとにらんだプリキュアたちだったが、彼らに変身アイテムを盗まれてしまい、変身できなくなってしまう……。

はるかたちは、絶望の淵に追い込まれながらも、歌の力を信じて本作の鍵となる曲「イマココカラ」を熱唱する……。プリキュアになったばかりで不安を抱えながらも、先輩たちのために頑張るフローラたちの姿からは、勇気がもらえる。そんな彼女らの活躍を、発売中のBlu-ray&DVDでチェックしてみよう。

▲妖精たちもカーニバルでキュートな歌を披露してくれる

©2015 映画プリキュアオールスターズSC 製作委員会
http://www.precure-allstars.com/2015/

● 2015年3月14日公開

■ STAFF　原作/東堂いづみ　監督/志水淳児　脚本/井上美緒　音楽/高梨康治　振付/真島茂樹
オリジナルキャラクターデザイン/稲上晃、香川久、馬越嘉彦、川村敏江、高橋晃、佐藤雅将、中谷友紀子
キャラクターデザイン・作画監督/青山充　美術監督/西田洸　CG監督/加藤康弘　色彩設計/澤田豊二
撮影監督/高橋賢司　製作担当/太田有紀　アニメーション制作/東映アニメーション
主題歌/モーニング娘。'15「イマココカラ」

■ CAST　春野はるか(キュアフローラ)/嶋村侑　海藤みなみ(キュアマーメイド)/浅野真澄
天ノ川きらら(キュアトゥインクル)/山村響　愛乃めぐみ(キュアラブリー)/中島愛
白雪ひめ(キュアプリンセス)/潘めぐみ　大森ゆうこ(キュアハニー)/北川里奈
氷川いおな(キュアフォーチュン)/戸松遥　オドレン/中田敦彦　ウタエン/藤森慎吾　ほか

▶王様に招待されて歌とダンスを楽しむのもプリンセスへの第一歩だと言うはるか。ハルモニアで同じプリキュアだという少女たちと出会い、ビックリしてしまう！

▲中央がオドレン、その左にいる帽子を被った男がウタエン。ふたりは、なんとハルモニアを国ごと盗もうと企んでいた

▼プリキュアたちの歌とダンスで生まれたキーを使い、フローラたちは、モードエレガントにチェンジする！

▲変身アイテムがなくてもあきらめない！　歌とダンスの力を信じたはるかたちの頑張りがプリキュアたちに希望を与え、みんながプリキュアに変身。悪事を企むオドレンとウタエンをこらしめるのだった

▼『プリキュアオールスターズ』恒例の、エンディングでのプリキュアたちによるダンス。彼女たちの表情からも、それぞれの個性がうかがえる、楽しいひと幕だ

▲妖精の国・ハルモニアは、かわいいお城があって明るい国。歌とダンスが大好きな守り神であるドラゴンのために、毎年春になるとカーニバルを開催するのだ

『Go！プリンセスプリキュア』の映画は、長編、中編、短編の３本立てで上映された。CG や作画など、それぞれ異なる製作スタイルを見比べてみるのも楽しい。

映画 Go！プリンセスプリキュア
PRINCESS PRECURE
Go Go!! 豪華３本立て!!!

プリキュアたちがパンプキン王国に希望を取り戻す！

▶王国の妖精・パン（左上）、プウ（左下）、キン（右下）と、パフ&アロマがミラクルプリンセスライトでプリキュアに声援を送る

パンプキン王国のたからもの

©2015 映画Go！プリンセスプリキュア製作委員会
http://www.precure-movie.com/

● 2015 年 10 月 31 日公開
■ STAFF　原作／東堂いづみ　監督／座古明史　脚本／秋之桜子
キャラクターデザイン・作画監督／香川久　美術監督／須和田真　製作担当／山崎尊宗
アニメーション制作／東映アニメーション　主題歌／ Every Little Thing「KIRA KIRA」
■ CAST　春野はるか（キュアフローラ）／嶋村侑　海藤みなみ（キュアマーメイド）／浅野真澄
天ノ川きらら（キュアトゥインクル）／山村響　紅城トワ（キュアスカーレット）／沢城みゆき
パフ／東山奈央　アロマ／古城門志帆　ほか

「プリキュア」シリーズの映画としては、初の試みとなる3本立てで構成された「Go！プリンセスプリキュア」の映画。そのうち、最も長い50分の長編エピソードが「パンプキン王国のたからもの」だ。

パンプキンプリンが名物である「パンプキンカフェ」に来ていたはるかたち。お目当てのプリンを前に大はしゃぎするものの、そこへゼツボーグが現れて、お店はパニックになってしまう。はるかたちはプリキュアに変身してゼツボーグを浄化するが、次の瞬間、なんとパンプキン王国に転送されていた。大臣のウォープから国のプリンセスを決める「プリンセス大会」に出てほしいと頼まれたはるかたちは、それぞれ予選に参加。しかし、王国の妖精たちの怪しい動きを察知し、国のお姫様・パンプルルがとらわれていることを知る。はるかたちは、なんとかパンプルルを助けようとするが……。

はるかたちは、無事にパンプルルを救い出すことができるのか。そして、人々を絶望に陥れようとするウォープ大臣の企みを打ち破れるのか。プリキュアだけでなく、「希望を失ってはいけない」とみんなを勇気づけるパンプルル姫の頑張りを、思わず応援したくなる作品だった。

▲特大のプリンパフェを前に、はるかの目の色が変わる！　その気になれば、はるかがひとりで全部食べることもできてしまいそう……

個性豊かなゲストキャラクター

本作には、プリキュアの味方となってくれるパンプルル姫のほか、パンプキン王国のキャラクターがゲストとして登場。ウォープの正体は巨大なカメレオンだった。

▲立派なプリンセスになるために頑張っているパンプキン王国のお姫様。塔に閉じ込められながらも、希望を失わずにいた

▲パンプキン王国の大臣だが、その正体は夢をゆがめ、絶望を集める闇のコレクター。プリキュアをコレクションにしようと企んでいた

▶お店にパフェゼツボーグが現れた！　はるかたち4人は力を合わせてゼツボーグを浄化するのだが……

▲ウォープ大臣は、王様やお后様の心から姫との思い出を消してしまっていた！　ふたりはお金もうけや宝石のことばかり考えるようになってしまった

▼妖精のパン、プウ、キンを追いかけているうちに、はるかは王国にある高い塔にたどり着く。そこにはパンプルル姫が閉じ込められていた

4人が力を合わせて戦う！

▲一度はウォープ大臣に捕まりながらも、4人は妖精の力も借りて大臣に立ち向かう

▲フローラたちの手でウォープを撃退！　パンプルル姫は塔から解放された。大好きな王様とお后様の元に駆け寄っていく

▲王様、お后様、パンプルル姫が涙の再会を果たした！　記憶を取り戻した王様とお后様は、かつてのようにやさしい心も取り戻した

▶パンプルル姫や妖精たちのミラクルプリンセスライトでの応援で、パンプキンキーが誕生！　フローラたちはそのキーを使って、さらに変身！

モードエレガント ハロウィン!!

昼を奪われたパンプキングダムを
プリキュアたちが救う！
プリキュアとレフィの
ワンダーナイト！
©2015 映画Go！プリンセスプリキュア製作委員会
http://www.precure-movie.com/
● 2015年10月31日公開
■ STAFF　原作／東堂いづみ　監督・キャラクターデザイン／宮本浩史
CGアニメーションスーパーバイザー／金井弘樹　美術監督／真庭英明
アニメーション制作／東映アニメーション
■ CAST　春野はるか（キュアフローラ）／嶋村侑　海藤みなみ（キュアマーメイド）／浅野真澄
天ノ川きらら（キュアトゥインクル）／山村響　紅城トワ（キュアスカーレット）／沢城みゆき
パフ／東山奈央　アロマ／古城門志帆　ほか
映画「プリキュアとレフィのワンダーナイト！」は20分の中編だ。「パンプキン王国のたからもの」に登場した王国の姫・パンプルルからもらった人形のレフィとプリキュアたちが大活躍を見せる！
ある日、人形だったレフィからの呼びかけに応えたはるかは、気がつくとパンプキングダムという別の世界にいた。パンプキングダムは、ナイトパンプキンによって夜だけの世界に変えられてしまっており、レフィはそんな世界を元に戻したいとフローラに助けを求めたのだ。
レフィが持つ「ミラクルプリンセスライト」をお城の鍵穴にさせば、この世界は元に戻るはず。しかし、フローラたちはかぼちゃのゼツボーグに追いかけられ、さらにマーメイドたちはナイトパンプキンによって傷つけられてしまう。それでもプリンセスプリキュアたちとレフィはくじけずに、何度も立ち上がる……。
全編3DCGで描かれたアニメーションは、TVシリーズとはまた違ったプリキュアたちの魅力を感じさせてくれる。両親をナイトパンプキンに捕らえられながらも、ひとりで頑張ってきたレフィをひたむきに応援するプリキュアたちの姿は、涙なしでは観られない。家族や仲間の大切さを存分に感じられる1作だ。
レフィ
（声／上垣ひなた）
パンプキングダムのプリンセス。国の歌姫でもあり、人々から人気を得ている。はるかたちの世界では人形の姿だった。
▼ナイトパンプキンの子分であるかぼちゃのゼツボーグ。レフィの歌に盛り上がってしまうお茶目なところもある
敵はカボチャ!?
ナイトパンプキン
（声／中尾隆聖）
パンプキングダムを自分のものにするべく、昼を奪った悪者。ミラクルプリンセスライトをレフィから取り上げようとしている。
▶部屋にいたはるかに、人形の姿をしていたレフィが語りかけてきた。突然の出来事に、はるかはビックリしてしまう！
▲人間の姿になったレフィから力を貸してほしいと頼まれて、フローラたちはお城をめざして歩みを進める
◀真っ暗な夜の世界になってしまったパンプキングダムにやってきたフローラ。予想外の出来事が続いて、驚くばかり
64

ムービーガイド

プリンセスが手を取り合って強敵に挑む！

▶プリンセスプリキュアとレフィは、どんな敵がやってこようともひるむことなく前に進んでいこうと頑張っていく

◀歌姫として国民たちに歌を披露するレフィ。国民たちはみんなレフィの歌が大好きで、歌を聴くだけで笑顔になれるのだ

▲ナイトパンプキンに奪われたミラクルプリンセスライトを、フローラとレフィの連携で取り戻す！

◀お城に到着したものの、玉座にはナイトパンプキンが座っていた。その強大な力によってマーメイドたちが倒されてしまう

▲セツボーグたちと追いかけっこをしながら、お城のてっぺんをめざしていくフローラたち

▲ナイトパンプキンを倒し、レフィとライトの力でパンプキングダムに昼の光が戻った。フローラとレフィの顔にも笑みが浮かぶ……

▲立ち上がったマーメイドたちも加わり、4人のプリキュアとレフィがそろってナイトパンプキンに立ち向かう

お化けの正体をフローラが確かめる！

▲物置の中にあった大きな鏡は、いつもはカーテンで覆われていた。この鏡を使って、お化けはいたずらをしたのだった

▶新しいカチューシャを早く着けてみたくて、フローラはひとりで物置へとやってきた

▲モノマネは得意だけど、変身は苦手なお化けたち。一番のチビお化けは、フローラのことが好きな様子

▲自分とは違った行動をする鏡の中のフローラに、フローラ本人も困惑。この不思議な現象はモノマネ好きのいたずらお化けの仕業だった

キュアフローラといたずらかがみ

新しいカチューシャを手に入れて大喜びしていたキュアフローラ。ところが、大きな鏡の前でポーズを取ってみたところ、鏡に写るフローラには、なんとカチューシャがなかった。鏡の中のフローラの正体は、いたずらお化け。フローラはお化けの正体を確かめようとするが……。

本作は5分間の短編で、セリフのないサイレントムービーとなっている。笑ったり怒ったりと豊かな表情を見せてくれる、CGキャラクターのフローラ。そのかわいさを、ぜひ映像でチェックしよう。

©2015 映画Go！プリンセスプリキュア製作委員会

http://www.precure-movie.com/

● 2015年10月31日公開

■ STAFF　原作／東堂いづみ　監督／貝澤幸男　CG演出／日向学　CGディレクター／中沢大樹　アニメーション制作／東映アニメーション

■ CAST　春野はるか（キュアフローラ）／嶋村侑　海藤みなみ（キュアマーメイド）／浅野真澄　天ノ川きらら（キュアトゥインクル）／山村響　紅城トワ（キュアスカーレット）／沢城みゆき　パフ／東山奈央　アロマ／古城門志帆　ほか

2016年3月19日公開!!

映画プリキュアオールスターズ みんなで歌う♪奇跡の魔法！

「プリキュア」シリーズの映画において、記念すべき20作目となるのが本作である。歌と魔法の世界でプリキュア44人が大活躍する！

最新の『プリキュアオールスターズ』は、『プリキュア』シリーズの映画では初めてとなるミュージカル仕立て！ 第1作『ふたりはプリキュア！』から最新作『魔法つかいプリキュア！』まで、総勢44人のプリキュアたちが、この映画のために作られた新曲7曲を含む全9曲の楽曲を、スクリーンで披露してくれる。

『魔法つかいプリキュア！』のみらい＆リコに街で出会ったはるかたち。しかも、リコが魔法を使ったからビックリ。そのとき、突然はるかを闇が包み込み、倒したはずの敵・ディスピアが出現する。はるかは、みらいたちと共にプリキュアに変身して戦うが、なぜかディスピアは消えてしまう。そして新たに姿を現したのは、魔女・ソルシエールと、その手下のトラウーマであった。ソルシエールは、ある魔法を完成させるために必要な〈プリキュアの涙〉を狙っていたのだ。

ソルシエールの力により、フローラたちと、みらい＆リコは離ればなれの世界に飛ばされてしまう。そんななか、先輩プリキュアたちが力を振り絞って、みらい＆リコを助けようとするのだった。

『Go！プリンセスプリキュア』から『魔法つかいプリキュア！』へ、バトンをつなぐ意味合いもある『プリキュアオールスターズ』シリーズ最新作。先輩として立派な姿を見せてくれる、はるかたちプリンセスプリキュアの勇姿と次世代の活躍を、大スクリーンで確認しよう。

44人のプリキュアによるバトルミュージカルが開幕！

▲プリキュアだけでなく、各シリーズのすべての妖精たちが集まるのも『プリキュアオールスターズ』の見どころのひとつと言える

▶プリキュアたちは、それぞれ自分の決め技を使い、ほかのシリーズのプリキュアたちとも協力し合って敵と戦っていく

©2016 映画プリキュアオールスターズ STMM 製作委員会
http://www.precure-allstars.com/

● 2016年3月19日公開
■ STAFF　原作／東堂いづみ　監督／土田豊　脚本／村山功
ミュージカルプロデュース・作詞／森雪之丞　音楽／高木洋
作曲／小六禮次郎、さかいゆう、高取ヒデアキ　振付／西田一生
オリジナルキャラクターデザイン／稲上晃、香川久、馬越嘉彦、川村敏江、高橋晃、佐藤雅将、中谷友紀子、宮本絵美子
キャラクターデザイン・作画監督／青山充　美術監督／渡辺佳人
CGディレクター／中西信樹、小林真理
色彩設計／澤田豊二　撮影監督／高橋賢司　製作担当／大町義則
アニメーション制作／東映アニメーション
主題歌／プリキュアオールスターズ「みんながいるから☆プリキュアオールスタ
■ CAST　朝日奈みらい（キュアミラクル）／高橋李依
リコ（キュアマジカル）／堀江由衣　春野はるか（キュアフローラ）／嶋村侑
海藤みなみ（キュアマーメイド）／浅野真澄
天ノ川きらら（キュアトゥインクル）／山村響
紅城トワ（キュアスカーレット）／沢城みゆき　ほか

ムービーガイド

▼リコがいきなり街で魔法を使ってしまい、魔法つかいだということがはるかたちにバレてしまう？

敵も歌って踊る！

トラウーマ（声／山本耕史）

ソルシエールの手下で、プリキュアを捕らえ、〈プリキュアの涙〉を手に入れようと企む魔法の伝導師。冷静そうに見えるが……。

ソルシエール（声／新妻聖子）

プリキュアたちの記憶を探って、かつての敵を蘇らせようとする。彼女が完成させようとしている魔法には、どんな力があるのか。

44人のプリキュアのパワーを見よ！

▲プリンセスプリキュアの敵であるディスピアとも、また戦わなくてはいけなくなる……!?

◀プリキュアたちは、それぞれ檻に閉じ込められてしまい、どうすることもできずにいたが……

▼妖精たちはミラクルステッキライトを手に、プリキュアたちを応援。その頼もしいエールがプリキュアたちに力を与えるのだ

妖精たちも頑張る！

プリンセスプリキュアの活躍は？

みらい＆リコが初めて出会う先輩プリキュアとして登場して、みらいたちを援護しつつ戦うようだ。みらい、リコ、モフルン、パフ、アロマと一緒に、新曲「あなたがいるから」も歌う。

▲ソルシエールの力に対抗するべく、プリキュアたちは全員で力を合わせる。ソルシエールを倒すことはできるのか？

若林豪 プロデューサーインタビュー

PROFILE
5月9日生まれ。東京都出身。主なプロデューサー担当作品は、『聖闘士星矢Ω』『手裏剣戦隊ニンニンジャー』など。

音楽もアクションも両方楽しんでほしい

——本作は、シリーズ初のミュージカルで、さらに新曲が7曲もあるというところが挑戦的ですね。

今回は、歌によって物語が進んだり、キャラクターの心情を描いたりする、王道のミュージカル要素を盛り込みたいと考えました。そのためには、まずストーリーと登場人物にリンクした新曲が必要だったんです。ミュージカルアニメを作る場合、歌が先にできていて、それに合わせて絵を作らなければいけませんが、通常のスケジュールでは、歌を先行して製作するのは困難です。そして製作にあたっては、スタッフの中にミュージカル経験者がいなければならないと考えていました。

このふたつの課題を解決するために、去年携わった特撮作品の製作手法を取り入れることにしました。特撮作品では、監督のほかにアクションシーンと特撮シーンを担当する専門の監督がいるんです。今回は、ミュージカルシーンの専門家、そしてミュージカルプロデュース・作詞として森雪之丞さんに立っていただき、本編の物語と同時に、別のラインで歌の製作も進めていくようにしました。

——お話としては、本作は何をテーマにしようと考えられましたか？

プリキュア44人の見せ場を作るのが『オールスターズ』ではありますが、今、TVでみなさんが応援してくださっている『魔法つかいプリキュア！』の視点から描いた物語になっています。彼女たちと先輩プリキュアとの出会いの喜び、そして自分たちの未熟さを知ったうえで、自分にできることを考える、というのを描きたいと話し合いました。もうひとつは、過去の記憶の話ですね。敵のソルシエールはプリキュアたちの「苦しんだ過去の記憶」を利用する能力を持っています。そして、ソルシエール自身も辛い過去を抱えています。それとどう向き合っていくのか……というのもポイントです。

——ソルシエールとその部下のトラウーマだけが歌う楽曲があったり、ソルシエールがキュアミラクル、キュアマジカルと歌うなど、敵にも見せ場がたくさんありそうですね。

歌いながらお芝居をするので、ゲストキャストはミュージカル経験豊富な新妻聖子さんと、山本耕史さんにお願いしました。プリキュアと敵の歌の違い、コントラストも楽しんでいただけると思います。ミュージカルシーンは、CGのものもあれば、人の動きをモーションキャプチャーしたCGを参考に作画したシーンもあります。場面によって見合った技法を使うようにしました。そう話すと小難しい感じですが、幼い観客のみなさんを第一に考えて映像を作っていますので、楽しんでもらいたいですね。

——本作では、昨年の映画にはなかったミラクルライトも復活しました。

ミラクルステッキライトは、観客のみなさんにミュージカルシーンでぜひ振ってほしくて、復活させました。ライトを振ることができるシーンも複数回用意しています。

——シリーズ20作目の映画ということで、まさに「オールスター」にふさわしい出来になりそうですね。

お休みしていたキュアエコーも登場して、プリキュアが全員そろいます。クライマックスのシーンは音楽とアクションが融合した、見応えも聴き応えも十分な出来になりましたので、ぜひ観ていただきたいですね。

イラストギャラリー 2

●初出：Febri Vol.30（一迅社刊）　原画／中谷友紀子

●初出：アニメージュ 2015年12月号増刊 Ｇｏ！プリンセスプリキュア特別増刊号（徳間書店刊）　原画／香川久

●初出：「Ｇｏ！プリンセスプリキュア」提供バックイラスト1

●初出：「Ｇｏ！プリンセスプリキュア
提供バックイラスト

●初出：「Ｇｏ！プリンセスプリキュア」
提供バックイラスト3

●初出：「Ｇｏ！プリンセスプリキュア」
提供バックイラスト4

スタッフが製作の裏側を語り尽くす!

スタッフインタビュー1

シリーズディレクター 田中裕太

キャラクターデザイン 中谷友紀子

プロデューサー 神木優

Profile
【たなか・ゆうた】
7月8日生まれ。三重県出身。アニメ演出家。主なアニメの担当作品は、『ドキドキ！プリキュア』『マジンボーン』（演出）など。

Profile
【なかたに・ゆきこ】
10月30日生まれ。愛知県出身。アニメーター。スタジオオガッツ所属。主なアニメの担当作品は、『ワンピース』（作画監督）など。

Profile
【かみのき・ゆう】
8月9日生まれ。兵庫県出身。主なアニメの担当作品は、『美少女戦士セーラームーンCrystal』（プロデューサー）、『スマイルプリキュア!』（アソシエイトプロデューサー）など。

人生を生き抜く力を身につけてほしい（田中）

カラーとシルエットにこだわったプリキュア

——本作における各スタッフの担当は、どのような形で決まったのでしょうか?

神木　企画の初期の段階から私と柴田宏明プロデューサーとで動いていて、まず田中裕太さんにSDをお願いしました。その段階で『プリンセス』というモチーフです」というお話はさせていただいていましたね。

田中　そうですね。シリーズ構成の田中仁さんが決まる前に、プロデューサー陣と僕とでまずは打ち合わせを重ねて、最初から指定のあったキーとパフュームを基に、作品のテーマやキャラクターを考え始めました。キャラクターの初期設定が大まかに固まり始めたところで、例年と同様にキャラクターデザインのコンペを始めました。コンペの作品が出そろったところで協議をして、デザインを中谷さんにお願いすることに決定しました。

——中谷さんは、コンペ用のイラストをどのように製作されたのでしょうか?

中谷　じつは「ドキドキ！プリキュア」のコンペにも出していて、そのときは残念ながら決まらなかったのですが、そのときに使えなかったデザインラインを今回にも取り入れて作りました。最初にフローラを描きましたが、当初「ふたりはプリキュア!」くらいの頭身で描いていました。その後、もう少し頭身をあげてほしいというオーダーがあって、実際にオンエアされた頭身に変更しました。フローラに関しては、衣装以外は大きな修正はほとんどなかったと思います。

田中　フローラの衣装は、試行錯誤を重ねて、結局元に戻った感じだよね。

中谷　ドレスは何パターンも描きました。

田中　いきなり「これ!」って決めるよりは、いろいろな可能性を探りたかったのです。

神木　衣装はコンペの段階で、5パターンくらい出してもらっていましたよね。

田中　髪形も何パターンかあったと思う。

中谷　決まったイラストのイメージが強すぎて、ほかの記憶がないですね（笑）。

——最初の段階ではフローラ以外に描かれたキャラクターもいましたか?

中谷　オーダーは、フローラとマーメイドだけで、ふたりのデザインが決まってからトゥインクルを作り始めました。

——最初のキャラクターデザインの段階から、たくさんのスタッフの方が集まって意見を出しているのですね。フローラのデザインのポイントは、どこですか?

中谷　フローラは主人公であり、プリンセスにもなる存在なので、直感的に西洋風の衣装に金髪だろうなと思いました。ヘアスタイルは、プリンセスっぽさがはっきりとわかったほうがいいかなと思って、ロングでウェーブのかかったものにして。ちょっと髪の量を盛っているのは、西洋の貴族をイメージしているんです。キャラクターのシルエットも、わかりやすくなるように考えました。

神木　ドレスに関しては、頭具連動も想定して2ウエイにしたかったんですね。パワーアップしたときに、上の部分だけは兼用できるようにしたいという話をして、そういうドレスのギミックをお願いしつつ、シルエット、キャラクターらしさを見つつ作っていただいた記憶があります。

——髪にグラデーション（色の演出）があるのも印象的ですね。

中谷　グラデーションはコンペの段階からやりたくて。コンペの段階では色のないイラストを出しているのですが、イラストの脇に「グラデーションにしたい」と書いていました。

「プリンセス」らしさにこだわってデザインしました（中谷）

——フローラは前髪にメッシュが入っているのもポイントですか？

中谷　そうですね。メッシュも最初からやりたかったんです。前髪が全部同じ色だと、デザインが重くなるかなと思っていましたし、メッシュを入れれば華やかさが感じられるかなと思って。これは絵的にも成功したと思っています。

——マーメイドのデザインに関しては？

中谷　衣装のしっぽのような部分は変化を入れてほしいと言われましたね。これはマーメイドだけではないのですが、プリキュアに変身した際は、スカートの後ろに布が垂れるようにという指示がありました。マーメイドは人魚がモチーフなので、おへそが出ていますし、ピンクのパールや貝殻などは、そのモチーフに引っ張られている部分が大きいですね。

田中　今年は花、海、星というモチーフを最初に決めたので、そこからキャラクターのイメージを作ったところがあると思います。

神木　しばらく経ってから、中谷さんに「髪は水なんです」と聞いて、すごく驚きました！

中谷　私は最初から水のつもりだったんですが、神木さんはご存じなかったんですよね。グラデーションはここでも入れたくて、海の中のような色にしてもらって。髪にかけるハイライトも、かなり特殊な感じになりましたね。

田中　マーメイドといえば、前髪で悩んでいましたよね。

中谷　前髪は、当初はパッツンにしてメッシュを入れるような感じに描いていたら、編み込みのデザインもほしいと言われて。実際に描いて提出したら、「編み込みのほうがかわいいです」とお返事をいただいて、この形になりました。マーメイドが一番、試行錯誤が多かったかな。

——トゥインクルに関しては、それほど悩まなかった感じですか？

中谷　トゥインクルは、フローラ、マーメイドが決まってから作り始めたので、そのバランスを見ればよかったこともあり、イメージがしやすかったんです。

まずフローラ、マーメイドとシルエットが被らないようにツインテールにしました。それ以外だと、露出がポイントかな。歴代のプリキュアのデザインを見て、被らないようにということを念頭に置いていたので、肩が結構露出しているんです。ここまで肩を出しているキャラクターがいなかったので、じゃあやってみようと。モチーフは星なので、イヤリングなどのアクセサリーは作りやすいんですが、ほかのパーツをどう配置するかは悩みました。

——スカートのとがった部分から、星っぽさを感じました。

中谷　スカートは、真上から見たら星に見えるように工夫しましたね。

——ブーツも、どのキャラクターも被らないようにされているのですね。

中谷　ブーツの丈に関してはそうですね。

神木　アクションで踏ん張るからということでヒールを低めにしているシリーズもあるのですが、今回は「プリンセス」がモチーフなので、ヒールは高めにしてもらいました。

——スカーレットはいかがでしたか？

中谷　スカーレットは、登場があとからだったので、本編の作業が始まってから考えたんです。袖は最初からヒラヒラしたものがほしいなと思っていたのですが、それ以外の部分で結構悩んだかな。

神木　「フローラが西洋風だからスカーレットはオリエンタルなお姫様にしたい」と中谷さんがおっしゃっていたことが印象に残っていますね。スカーレットに関しては、「主人公を食うぐらいの強いキャラクターで」とお願いしたのですが、実際にあがってきたイラストを見て納得しました。

中谷　炎で、不死鳥で、朱色だろうから東洋的な感じになったかな？　それ以外は、ブーツとスカートがアシンメトリー（非対称）などところがポイントです。

田中　スカーレットは、着ぐるみになったとき、すごく印象的なキャラクターになりましたよね。動いたときに袖がふわってなって、すごく優雅に見えるんです。立体映えするキャラクターなんだなと感じました。

中谷　ヘアスタイルは一番難航しました。前髪はセンターで分けようと思っていたのですが、後ろの髪をどうするか。ほかの3人のヘアスタイルにボリュームがあったので、それにも負けないようにしつつ、お姫様らしい縦ロールをここで使ってみて。わりと計算して作ったキャラクターです。

田中　スカーレットも髪にメッシュを入れようとしていたんですが、どこに入れても、どうにもしっくりこなくて。結局、入れない形になりました。その代わりに前髪全体の色を後ろとは大きく変えて単調にならないようにしているんですが、頭頂部からのグラデーションでうまく馴染ませています。よく見ると結構後ろの髪と色が違っているんですよ。

神木　耳の後ろの羽と王冠にもこだわっていましたよね？

田中　そうです。なんというか、王族らしいパーツがほしかったんですね。それ

と追加戦士としての特別感も。彼女自身が本物のプリンセスなので、プリンセスを目指している3人との差別化を図りたかったんです。本物のプリンセスらしい、特別なゴージャスさを出したくて装飾を追加してもらいました。

——スカーレットといえば、アニメではトワイライトの姿での登場が先ですが、デザインの作業はどちらが先でしたか?

中谷　スカーレットのほうが先ですが、トワイライトはOP映像に登場させると言われて、急ぎでデザインを作った記憶がありますね。

田中　ほかの3人の変身前の設定も決まったところで、スカーレットの製作作業に入りましたね。

——トワイライトのデザインのポイントは、どんなところでしょう?

中谷　トワイライトは、スカーレットありきで作りました。最初は、トワイライトの髪形をスカーレットに採用したかったのですが、いろいろな絡みがあってNGが出たので、じゃあトワイライトに活かそうということで、この髪形になりました。なんで蝶にしたんだっけ……?

田中　トワイライトを作るときに、彼女の細かい設定などのヒントがなかったから、「何かありませんか?」って聞かれた覚えがありますね。僕のほうから「蝶はどうだろう」と提案しました。カナタの衣装の肩の部分を蝶っぽいデザインにしたので、カナタとの共通性を持たせたいと思ったんです。

神木　アイシャドーを入れる場所も、いろいろ試しましたよね。

田中　色をつけてから細かいパーツで悩んで調整を重ねたことが、今年は多かったですね。スカーレットのスカートの裾や袖のラインも最初のデザインでは1本だけだったし、マーメイドのモードエレガントの白いラインもあとから追加しました。実際に色を置いてみたら、何か物たりないような気がしたんですよ。その物たりなさがどうしたら解消するかを、その場でよく話し合っていました。

神木　はるかたちの制服の襟のラインもそうでしたよね。線しか入れていないですが、イメージが変わりますよね。

——先ほどメッシュという話もありましたが、今回キャラクターの髪形が一色ではない部分が多いですよね。

中谷　今回はかなり差し色を多く使っていますね。

田中　それは、柴田プロデューサーの希望も大きかったんじゃないかな。色決めはこだわったぶん、決定するまでにかなり時間がかかりましたね。

神木　フローラのスカートは、裏地の色がなかなか決まらなかったんですよね。

田中　単純に表地の影の色にしたら綺麗に見えなかったんですよ。ですから、実際の影色と裏地の色は変えました。髪のグラデーションの部分も、幅をどのくらいにするのかなどを撮影の方に協力してもらって実験を重ねました。どこからグラデーションを入れるのか、どのくらいぼかすのかで印象が全然違ってくるので。

制服の着こなしでも性格がわかる!?

——変身前のデザインに関しては、どのように作っていかれましたか?

中谷　変身後を全部作ってから、変身前を作りました。みなみだけちょっと例外になるんですが、誰がどのキャラクターに変身するのかをわかりやすくしたかったので、パーツをなるべく残して、あえて変化をさせないようにしようとは決めていました。ガラッと変わってしまうと、大人でもどのキャラクターがどれに変身したのかわからなくなってしまうので、子どもの視点を意識しました。

——きららの制服のリボンやスカートにアレンジが加わっているのも印象的です。

神木　ほかのスタッフから、「制服にアレンジを加えるのは中谷さんと『スマイルプリキュア!』などのキャラクターデザインをされた川村敏江さんだけだよね」と言われて、そこで初めて気がつきました。当たり前のように描いてきていただいているけれど、そのアレンジがキャラクターの"らしさ"を引き立てていて素敵ですね。

——着こなしがそれぞれ違うところにも個性が出ていますよね。制服のソックスの選び方からも、性格がうかがえます。

神木　トワのソックスは「かわいい!」のひと言でしたね。清楚な感じというか、白ソックスで折り返しありで、お嬢様らしさが出ているなと。

田中　でも、白ソックスってたぶん学校指定のものじゃないんだよね。ほかの生徒もはいていないし(笑)。ある意味、トワらしいといえばトワらしいのかもしれないけど。

音楽モチーフで作られた敵キャラ

——敵キャラクターのデザインについては、どのように決められたのですか?

田中　メインの敵キャラクターは、敵と味方とのバランスを考えて3人に決まりました。そこから連想して三銃士になった感じですね。デザインのモチーフはいろいろ考えた結果として、音楽になったんじゃないかな。最初は番長キャラなんていう案もありましたね(笑)。クローズの「~だぜ」という語尾はその名残です。キャラクターの語尾に関しては、柴田プロデューサーの、わかりやすさがほしいという要素があって、それぞれ決めた記憶があります。

中谷　音楽モチーフに落ち着いたのは、たぶん私の趣味ですね(笑)。クローズのデザインを作ったときは、ゼツボーグを生み出す錠前ありきのデザインだったんですよ。南京錠からシド・ヴィシャス(イギリスのパンクロッカー)を連想して。それでOKが出たので、次にシャットを作りました。シャットは「バラを口にくわえているような、美青年でナルシスト」というようなオーダーをいただいたので、それっぽい感じに。女装をして

いるようなイメージですね。

田中　衣装はフェミニンなんだけど、中身は男だよっていう話はしたよね。僕はどちらかというと騎士っぽい感じをイメージしていました。ですから、キャストも声の低い人にしたいなと思っていて。ロックは難航した？　僕のほうでは全然イメージがなかったんだけど。

中谷　「生意気な子どもで」っていうヒントはもらったんですよね。

田中　それだけだったから、フードみたいな感じは想定していなくて、デザインができあがってきたときは驚きました。

中谷　ちょうど、フードの部分にキャラクターがデザインされたパジャマみたいなものを見て、これがいいんじゃないかって思ったんですよね。

神木　ロックの正体はフードっていうのも、中谷さんの絵ありきなんですよね。

田中　デザインが出てきてから決めたんですよね。ただ、フードの中身については最初の段階では決めていなかったかな。

――ディスピアの設定は、三銃士を作られてからでしたか？

中谷　そうでしたね。ディスピアはわかりやすく「魔女」というモチーフがあったのですが、逆に難しかったです。田中SDからは「目元はマスクで隠したい」というオーダーがあったのですが、難航した結果、シルエットから作ったんじゃないかな。角とか刺々しいイメージで装飾をつけて。

田中　最初はほかのスタッフから「顔つきが怖すぎる」と言われて、少しマイルドにしてもらった気がします。

中谷　あとからキャストが榊原良子さんだと聞いて、「うわあ！」って（笑）。

田中　ディスピアは、年間を通して画面の後方に座っていることが多かったのですが、榊原さんの声があったから、ラスボス感が最後まで薄れなかったですね。座ってしゃべっているだけなのに、すごく存在感があって。とてもありがたいキャスティングでした。

――31話からは新幹部のストップとフリーズも登場しました。

中谷　SDからはダフト・パンク（フランスのエレクトロデュオ）でと言われたんです。世界観と合わないかなとも思ったのですが、開き直って臨みましたね（笑）。ダフト・パンクがモチーフだから、顔をマスクで隠しているんです。

田中　僕も新幹部のデザインに関してはモチーフが思いつかなくて、双子のふたりってオーダーしたんだよね。もともと敵にあった音楽のモチーフで双子のふたりって誰がいるだろうと考えて、ダフト・パンクに行き着いたんです。

神木　クローズよりも目立たないキャラクターというのも大事でしたからね。

田中　だから、顔を隠すというのはいいアイディアかなと思ったのですが、それが悩ませる原因になってしまったようで。

中谷　表情が出せないから、デザインが大変だったんです。悩みに悩んで宇宙服みたいなデザインにしました。

田中　片方を女性にしたのは、中谷さんの案でした。ダフト・パンクっていうモチーフを閃いたときは、本人たちが男性ですから、ストップとフリーズも両方男性のつもりだったんですよ。でも、中谷さんが「片方を女性にしていいですか？」って言ってきて。

――だから、ストップの衣装はスカート風なんですね。このふたりに関しては、毎回のポーズもインパクトがありました。

田中　ふたりに特徴らしい特徴がなかったので、何か印象に残るポイントがほしかったんです。そこでシュールギャグというか、真面目系ギャグというか、会話とは無関係にいちいち変なポーズを取ってみたら面白いかなと。それも最初は探り探りだったんですが、各話の演出担当の方たちがうまいこと味付けをしてくれて。

神木　みんな面白いポーズの概念が違うから、各話によって統一されていないんですよ（笑）。

田中　そこはあえてバラバラなほうが面白いかなと思って（笑）。

描きやすいキャラ苦手なキャラ

――カナタ王子に関しては、どのようにデザインされていったのですか？

中谷　資料を見ながら王子さまについて考えていて。最初は、『ロード・オブ・ザ・リング』のレゴラスのような、エルフ風のデザインを考えました。ただ、柴田Pに前髪を作って今どきなイケメンにしてほしいと言われて。ファンタジーに寄りすぎないように注意しましたね。

田中　ファンタジー要素はカナタの色に残しました。

神木　そうそう。カナタの肌色が少し違うのは、ファンタスティックな異国情緒感の名残なんですよね。

――カナタの衣装に関しては、いかがでしたか？

中谷　衣装は、それほど悩みませんでした。マントを着けるとそれだけで王子っぽくなったので（笑）。カナタのデザインのキモは髪の2色の塗り分けかな。

神木　はるかたちの髪を塗り分けたように塗り分けるべきか、という話はありましたよね。

中谷　でも、私、カナタを描くのがじつは苦手なんですよ。

田中　カナタは難しいと思いますよ。こんなにまつ毛の多い男性キャラクターもあまりいませんし。

――では、一番描きやすいキャラクターは？

中谷　アロマです（笑）。

神木　人間じゃないんですね（笑）。そういえば、以前アロマ役の古城門（志帆）さんが、中谷さんに「アロマのことを語ってほしい」と言っていて。中谷さんが「描きやすいよ」って言ったら、複雑そうな顔をしていたのは覚えていますね。「それ、喜んでいいんですか？」って。

――妖精は玩具のデザインをアニメに落とし込む作業が主ですか？

中谷　そうですね。アロマとパフ以外であれば、ミス・シャムールはかなり私の趣味が入っています。設定に関しては、お任せだったのでどうしようかと考えて、犬（パフ）、鳥（アロマ）、というモチーフできたので、ならば猫がいいかなと。

――人間に変身するという設定は最初からあったのですか？

中谷　たとえばバレエのレッスンなど、さすがに妖精体型のままでは難しいことも多いだろうなという話があって、当初から人間に変身する設定はありました。

田中　最初はもう少し出番が少ない予定だったのですが、印象的なキャラクターになったせいか、出番が増えましたね。

――クロロは、まさかのロックの"中身"ということで驚きました。

田中　ロックはもともと中身が別のキャラクターであるだろうとぼんやり考えてはいたんですが、はっきりと決め込んではいませんでした。30話でロックを退場させるとき、改めてその後の展開を考えたうえで、別の中身が必要になって作ったキャラクターがクロロですね。その際に、クロロが持つキャラクターとしての役割も同時に考えました。

中谷　デザインは悩まなかったな。なんで猫にしたんだっけ……。

神木　私、犬だと思ってました……。

中谷　え、今!?（笑）

田中　シャムールと対になるキャラクターだから、猫だったんじゃないかな。弟子とはいかないまでも、セットになるキャラクターだと想定していました。クロロは、ロイヤルフェアリーではないので、ほかの妖精と比べるとちょっと高貴ではない、庶民っぽい感じを狙って作ってもらったんです。そこもかわいいキャラクターとして定着してくれましたね。

――ゆいに関しては？

中谷　ゆいはわかりやすいデザインにしました。一発でこのキャラクターに決まりました。SDからの眼鏡の指示がすごくうるさかったですね（笑）。本当は眼鏡のフレームは一本線で描いたほうが作画が楽なんですが、フチを作ってくれと言われて。三つ編みなのは文学少女っぽさを出したかったからです。

田中　愛されてよかったね。

中谷　出番がこんなに多いと思っていなかったので、表情のパターンが少ないんですよ。もうちょっと作ってあげればよかったなとは思っています。

――中谷さんは全体を通して、とくにお気に入りの衣装はありましたか？

中谷　水着ですね。オーダーはとくになかったので、自分で好きな水着を描きましたね。

田中　女性の目線で作ってほしかったんです。僕が水着案をたくさん提案するのもどうかなと思いまして（笑）。

神木　どの子の水着の衣装もかわいかったですよね。

中谷　今思うと、ゆいの水着はちょっと地味だったかなと思いますね。

神木　ゆいに派手さを求めますか（笑）。

――本作では、あらゆる場面でレースのモチーフが使用されていて、華やかな感じがありましたね。

田中　プリンセスがモチーフだったので、きちんと女の子に向けた映像を作りたいという思いがあって考えた結果、出てきたアイディアでした。画面上でも女の子に向けて、キャッチーな絵作りがしたかったんです。そこで、年間通しての共通ルールとして、半分実験でやってみたらハマった感じですね。レースはキャラクターごとに作りました。丸いデザインのレースが変身前用と変身後用でそれぞれ4人ぶん×2パターン、それから決め技時などで使っていた帯レースもそれぞれ4人ぶん。フローラだけは技の花別に、さらにもう3種類あります。そのほか、ゲストキャラクターなどに使える汎用レースが2種類ありますね。提供バックのときに回っていたレースはその一種です。それと、唯一敵側のものとしてトワイライト用の黒いレースがありました。そしてグラン・プランタンのドレスのときに背中に付くリボンのレースも4人ぶん。これで全部じゃないでしょうか。

プリキュア3人のキャラクターバランス

――今回、キャラクター設定に関して、いわゆる〝癒し〟キャラクターとして設定されることが多い黄色のプリキュアキャラクターがつり目で、これまでとは印象が異なる感じがしました。

神木　仁さんには最初に、主人公が「普通の女の子」になると思うので、ほかのふたりは「優等生代表」「ギャル代表」のように、全然違うタイプにしてほしいと話していたのを覚えています。

田中　正統派の主人公であるはるかに対して、みなみはライバル的な立ち位置なんですよね。そして、もうひとりはどうしようかと考えたときに、〝変化球〟を入れたいとも考えて。みなみとは違う意味で、はるかの一歩先を行くキャラクターにしたいなと思って、ちょっととがったキャラクターになりました。

神木　はるか以外はすでにみんなプリンセスと呼ばれてもおかしくないようにしようという話もありましたね。学園のプリンセスであるみなみ、モデル界のプリンセスのきらら、そして本物のプリンセ

ゆいの描いたイラスト

プリキュアたちを見守る役目を担ってきたゆいが、作中で描いたイラストを紹介。

観た人のドレスアップキーのような存在になっていたらうれしい（神木）

スのトワ。そこに、普通の子であるはるかを入れたら、彼女たちはどう変わっていくのかを見たかった。

田中　じつは、主人公のはるかが一番スペックが低いところから物語が始まるんですよね（笑）。ですから、みなみときららは、はるかが追いかけるべき存在として設定したんです。どっちもはるかにとってはあこがれの対象だったんです。

はるかはとにかくがむしゃらに頑張る姿が印象に残るように描きました。スペックは低いけど、決しておバカキャラではない。ふたりを追いかけているはるかも、じつはすごいものを持っていて、だからこそそんなはるかを「この子やるじゃん」ってみなみときららが認めていくという関係性をきちんと描けたらいいなと。1クール目はそういう話が多かったかなと思います。あこがれに向かって素直に一直線に努力できるのが、はるかの主人公としての能力なんです。

振り返ると、本作は隙のあるキャラクターがあんまりいませんでしたね。仲間になってからのトワが一番隙だらけだったかな。すごく世間知らずだったので。

——今回、シリーズ構成の田中仁さんが、作中の舞台を全寮制にしたいと提案されたのですよね?

神木　そうですね。みんな全寮制の学校に行ったことがないから、資料を集めていたのですが、中谷さんが寮に通っていたんですよね。

中谷　全寮制ではなかったのですが、寮のある高校だったんですよ。

神木　洗濯や食事はどうするのかなどを、それはすごく調べました。

田中　上級生が下級生を教えるような学校もあるらしいんですよね。知らない文化だったので、それを調べるところから始まりましたね。

——全体の物語構成は、どのように決められたのでしょうか?

神木　鍵を使うことは当初から決まっていたんですよ。鍵をどうやって作品の中に落とし込もうかということになって、「開く」のがプリキュア側で、「閉じる」のを敵側にしようということになって。未来を切り開くプリキュアと、それを閉じ込めようとする敵という図式でわかりやすくしようという話をしました。

田中　「プリンセス」というのはモチーフでしかないなと僕は思っていたんです。ですから、話し合いの中で1年かけて表現していくものとして「夢」を設定しました。敵役に関しては、神木さんがおっしゃったように、閉ざすもの。「希望」の反対として、「絶望」を司るものというイメージで作りましたね。

——ディスピア以外に、裏ボス的なキャラクターに関しては考えられなかったのでしょうか?

田中　ラスボスは最初から最後までディスピアのつもりで設定しました。結果的に最後の対決はフローラとクローズにはなりましたが、ラスボスという位置づけはディスピアで変わっていません。

——フローラたちの味方となるホープキングダムの人々については、どのように設定を作られたのでしょうか?

神木　「主人公はプリンセスをめざす女の子」という設定は仁さんが最初から話していたんですけど、それがピンとこないという話をしていて。王子さまという存在が、プリンセスになる夢の後押しになってくれたらいいなと。絵本の存在に関しても、プリンセスをめざすということがどういうことなのかを具体的に表現しようとしたアイディアでした。

田中　普段は近くにいないけど、心情的に支えてくれる王子さまや、あしながおじさんのような人がいたらいいんじゃないかという話になって。だったら、主人公が「プリンセス」なんだから「王子さま」だろうということで、カナタは王子さまになりました。

まだまだ先の展開が未定だったので、1話の製作は、とにかくシチュエーションを大事に考えました。幼いころに出会った人から何か大切なものをもらうことが、はるかのスタートライン。あのシーンはのちのち何回も使うことになりましたが、当初は使い回すことは考えていなくて、とにかく女の子たちが惹きつけられるようなドラマチックさを優先して作っていた気がします。

——敵キャラクターが頑張っている様子も憎めない感じになりました。

田中　絶望しているはずなのに頑張っているという不思議な存在になりました。

神木　三銃士は、3人一緒にいるけれど仲よくなくて、それぞれに別のことを考えているキャラクターでしたよね。ロックはひとりで動くタイプだし、クローズはフローラへの恨みやライバル意識が強い。シャットは、最後までどうなるかわからなくてハラハラしました。

田中　シャットは流浪のキャラクターになりましたね（笑）。敵キャラクターはなるべくなれ合わせないようにしたんです。本来は最後には倒されるべき存在なので、視聴者があまり感情移入してしまわないようにと。

同時に、敵側はコミカルになりすぎないように注意していました。ディスピアは最後まで怖かったし、クローズは多少コミカルなところがあったけど、そちらのほうへは振り切りすぎないように。一度倒れて復活してからは、よりシリアス感が増したので、結果的にシャットだけちょっと異質になってしまいましたが。

——生徒の中では、ゆいの存在が際立っていたように思います。

田中　ゆいはプリキュアとは違う立ち位置にいて変身はしないけど、プリキュアを助けてくれる重要なキャラクターなんです。ですから、個性が埋没しないように、ていねいに押し出していったら、すごく強いキャラクターになりましたね。

最後のほうで、ゆいが檻を自らの力で破るような活躍をしてくれたのは、最初は自分でも想像していなくて。キャラクターが育つってこういうことなんだなと実感しました。

——もともとプリキュアに変身する予定はなかったんですか?

田中　ありません。彼女はプリキュアの側にいて、彼女たちを見守るキャラクターでした。もちろん多少は、もうちょっと特別なことがあってもいいかなとも思ったことはありました。ですが、一般人だということが、ゆいの何よりのアイデンティティーなので、それを壊すのはゆいに対して一番やってはいけないことだなと。特別な力を持ってしまったら、それじゃただのプリキュアです。あえて特別感は出さないようにしつつ、ゆいはゆいのままで、どう活躍させるかを考えていきました。

各話の脚本家の方も後半になって、ゆいの使い方がよりわかってきた感じがしました。とくに34話が印象深いです。プリキュアは戦いに行かなければならないけど、ゆいは現場に残って別の役割を持つことができるという、ゆいの立ち位置をうまく利用したシナリオ作りが、後半になってこなれてきたなと。

4人のプリキュア役はバランスを見て決めた

――キャストについてもうかがいたいのですが、本作のプリキュア役のキャストは何が決め手になったのでしょうか？

田中　はるかはキャラクターコンセプトが庶民からプリンセスになるということだったので、こなれたベテランの声よりは、ある種のたどたどしさというか、初々しさを表現できる声がほしかったんです。みなみは逆にお姉さんタイプだから、はるかとは逆の性質である落ち着いた芝居が、きららは単に綺麗な声とは少し違う、ちょっと変わった声質がほしいなと思っていました。

――スカーレットに関しては？

田中　スカーレットは、最初の3人よりはあとでオーディションを行うつもりだったんですが、もろもろの都合があって、急遽3人と同じタイミングでオーディションをしなければいけなくなりました。急に決まったので、キャラクターのデザインもありませんでした。

それもあってスカーレット役はバリエーションを探るために、とにかくいろいろな声のタイプを持つキャストの方を呼んでいただきましたね。スカーレットと言いながら、オーディションの半分くらいはトワイライト寄りのセリフだったと思います。沢城（みゆき）さんは、キャラクターデザインがない状態でやってもらったにもかかわらず、不思議と「ああ、トワイライトだ」と思える圧倒的な雰囲気があったので、彼女に決まりました。

神木　悪い感じと強い感じの両方があって、艶っぽさもあって。

――はるか役に嶋村侑さんを選んだポイントは、どこでしたか？

田中　条件を満たすキャストがある程度出そろってきたところで、いかに各人が持つはるかのイメージと合致しているかというところを話し合った結果でしょうか。今年は、とくに悩んだときは女性スタッフの意見を聞くことを重視していたんですが、最後は女性が聞いて心地いい声というポイントで決めた気がします。

――みなみやきららに関しても、同様に決めていかれたのですか？

田中　みなみは、じつはきららよりあとに決めたんです。はるかときららのふたりを決めてから、そのふたりと均等になるように浅野さんを選びました。浅野（真澄）さんのお姉さんっぽさか、役者としての年齢やキャリアから、アフレコ現場でもバランスが取れそうだなと感じて。

神木　きららに関しては、いろいろなパターンがありましたよね。オーディションでも、キャストの方のきららというキャラクターの捉え方が、わりとバラバラだった気がします。

田中　きららのオーディションのときのセリフに、ちょっとキツめのセリフを入れておいたんですね。ですから、あまりかわいい感じではないだろうなと。でも、キャラクターはかわいいですから、オーディションではイラストに引っ張られて演じる方もたくさんいましたね。

山村（響）さんに決めた理由は、オーディションのセリフの中に「はるかが2回も入ってるじゃん、変な名前！」みたいな、4話に似たセリフがあったのですが、その言い方がただひとり、自分で想定していたものと完璧に一緒だったんです。とはいえ、僕ひとりで決められるわけではないので、ほかのスタッフの意見も聞きつつですが、僕はその段階で山村さんしかないと思っていました。

神木　きららはとがったキャラクターでもありながら、愛されるキャラクターでもなければなりません。そのあたりも選考する際に意識していました。

今は「サバサバした子」と言われても納得できるのですが、セリフを一部抜き出しただけだと、冷たいキャラクターに聞こえてしまうところもあるんですよね。

田中　オーディションでは、それぞれのスタッフの視点が異なることも勉強になりました。ミキサーの川崎公敬さんは、1年間でキャストがどう成長していきそうか、なんてことも想定していて。そういった視点は僕にはなかったので、とても新鮮でした。

変身と決め技にまつわる田中SDのこだわり

――変身シーンや決め技に関しては、どのようなテーマがあったのですか？

田中　従来のシリーズとどう差別化を図るか考えた結果、変身シーンのイメージ空間をただの空間でなく、舞踏会場みたいにしてみようかと。最初はイメージ空間の中に透明な舞踏会場が浮かんでいるような感じにして、はるかたちが変身を完了したあとに、それぞれのモチーフがあふれて、そこに実体の舞踏会場が現れる。キャラ以外にもエフェクトや背景に情報量を増やして、いかにプリンセスらしいゴージャス感が出せるかを考えました。

中谷　実景があるのがよかったですね。地に足が着いている感じがして。

田中　変身シーンに関しては、ワクワク感ってどこからくるんだろうということをすごく考えましたね。自分がかつて感じたワクワク感の源流をたどって、ロボットアニメの合体バンクとかを延々観て研究するなどしていました。花や水や星が下から吹き上がるなかでカーテシー（おじぎ）をやり、最後にそれぞれの決めポーズを取るんですが、じつはその前に変身は完了しているので、あのシーンは本来いらないんです。

神木　「あのシーン、大好きなんですよ」って私が言ったら、「俺も」って言っていましたよね（笑）。

田中　うん（笑）。好きなんですけど、変身の構成要素としてはいらないんです。でも、その余計なもののなかにこそワクワク感、ロマンがあるんですよ。

――決め技は田中SDが決められたとうかがいました。

田中　各方面からいろいろな案は出されましたが、どうもしっくりこなくて、結局ほとんど一気に決めました。わかりやすさとかっこよさが優先なんですけど、プリンセスなので、その中におしゃれさも入れたくて。

神木　フランス語っぽい雰囲気がいいっておっしゃっていましたよね。

田中　フローラの技と合体技はフランス語縛りにしましたね。本当は全員フランス語縛りにしたかったんですけど、それが意外と難しくて。フランス語は、かっこいい単語とそうじゃない単語の差が激しかったこともあって、マーメイドたちは英語もありということにしました。あとは覚えやすさですね。たとえ意味はわからなくても、「エクラ・エスポワール」とか「グラン・プランタン」とか韻を踏むと叫びやすいかなと。「トルビヨン」とかも本当は「トゥルビヨン」なんですが、発音しづらいからと変更しました。

――名乗りもエレガントな感じで。

神木　変身後の名乗りに関しては、「ふたりはプリキュア！」のような「とっととお家に帰りなさい！」みたいな決めゼリフがほしいよねという話になりました。

田中　変身名乗りとは別のところで、敵に対する見得切りのセリフがほしいと思っていて。それで考えて出てきたのが「お

覚悟はよろしくて！」でした。「お覚悟」は最初大丈夫かなと思っていたんですけど、やってみたら意外と普通に受け入れられました。それぞれの名乗りはキャラクター設定を作るときに合わせて作りました。マーメイドの「澄み渡る」だけがなかなか出てこなかった記憶があります。

——ところで、1年のシリーズの中で、水着回があったのは印象的でした。

田中　海に行くのに泳がないのは変だなと、素朴な疑問をずっと感じていたんです。個人的には、泳がないのであれば海に行く必要はないなと考えていて。でも、本作はマーメイドというキャラクターがいて海とも縁が深かったし、であれば夏にはやはり当然海に行く話が持ち上がります。海に行くならば普通に海で泳ぐのが自然だろうと。これまで「プリキュア」が避け続けてきた過剰な自主規制を打開したいという思いがありました。

神木　「プリキュア」は視聴者がお子さんですから、たとえば敵であっても顔面は殴らないとか血は出さないとか、それなりのルールはあるんです。ただ、水着はセクシーに見えすぎた場合、作品として見せたい意図とズレが出てしまうことがあるので、慎重に扱うものだったんですね。ただ、その配慮の結果が逆に不自然に感じるのでは、ということは議論になっていました。それに合わせて、今年は一度、これまでのシリーズで受け継いでいるものを再検討しましょう、という話も出ていて。それが全面に出たのが水着の回だったんです。

——水着って、女の子にとってあこがれる衣装のひとつでもありますよね。普段とは違ったフリルや、かわいい色のものもたくさんありますし。

神木　そうですね。ですから水着の話は、かわいく楽しそうに描けてよかったと思います。中谷さんのデザインした水着もかわいくて。浴衣があって水着があってドレスがあって〝お着替え感〟が本作らしかったかなと。

田中　「プリキュア」シリーズは、女児アニメの概念に捉われないものとして始まったにもかかわらず、長くやっているうちに「プリキュア」のほうが〝女児アニメのスタンダード〟と見なされるようになっていて、いつしかその内容に道徳的な側面まで期待されるようになりました。それはとてもありがたいし、名誉なことでもあるんですが、それに萎縮して、これまで無意識にすごく表現の幅を狭めていたことがありました。水着はまさにそのひとつの象徴だったんです。僕は個人的に、「プリキュア」シリーズはいささかこれまでのシリーズの慣例に凝り固まっている節があると思っていました。もし本作で少しでもそれを打破できれば、本作だけでなく以降のシリーズでも、もっと表現の幅を広げられて、これまで避けてきた表現や、もっと新しい表現も可能となるかもしれない。これはシリーズの再検討をするチャレンジとして、とても価値があるはずだ、と。あの話数の裏には、そんな思いが強くあったのです。

——本作はOP映像も少しずつ変わっていきましたよね？

田中　たとえば前の話数でキャラクターが増えたときに、次の話数のOP映像にそのキャラクターが増え、本編に合わせて変化していくオープング演出が個人的に好きなことと、自分なりのひそかな視聴率対策です（笑）。アバンはもちろんですけど、OP映像も毎週見逃してほしくなくて。ちょっとした間違い探しみたいな感じで観てもらえればと思っていました。

神木　後期のED映像は4つのパターンを作ったのですが、それもOPの影響はありましたよ。

田中　4人変われば、少なくともとりあえず最初の4週は見てくれるはず。そういう意味でも、いい案だと思います。EDのテロップの色も合わせて変えていたのはナイスだなと思いましたね。

——テロップの書体もよかったですね。

田中　書体はこだわりました。じつは、当社の場合、作品ごとに使えるテロップ用の書体というのがあるのですが、これまで「プリキュア」で使用していた書体の中には、どうしてもプリンセスの雰囲気に合うものがなくて。書体は作品の雰囲気作りに絶対欠かせないので、新たに他作品のものまで含めて探し直したんです。そうしたら、じつはたっぷり豊富に種類があったんですよ（笑）。水着と同じく、これもただ、これまでの慣例に従っていただけだったんだなと感じました。

OPなどは、やはりテロップ込みで画面のデザインをしたいですし、今はそれが当たり前になっていますよね。キャラクターがテロップの前にくることがあるのもそういう思いがあるからで、子どもはテロップなんて興味ないんだから、だったらせめてなるべく画面と一体化してキャラクターのジャマをしないでくれ、ということです。

抽象的な「夢」が本作のポイント

——最後まで、はるかの夢はプリンセスになることで、具体的な職業は描かれませんでしたね。

田中　彼女の将来に、最後まで特定の職業を据えなかったのは意図的なことです。もちろん途中、何か明確な将来の目標を定めたほうがいいのでは、というようなことは検討しました。ですが、何かめざすものをほかに設定すると、この作品における「プリンセス」が、イコールそれであると思われてしまう可能性があり、その誤解を避けたかったんです。あくまでもはるかの夢は「プリンセス」なんだと貫きました。でも、それがはるかのめざす道ですから、それでいいし、そうでなくてはいけないんです。

中谷　私は、その抽象性があったからこそ、本作はとてもいい作品になったと思います。物語は仁さんを含め計算して作られている部分があり、荒唐無稽さはあまり感じられなくて。その抽象的な部分を、はるかの夢が担ったんじゃないかな。

田中　見ている人が、「夢」を追いかけるときに重ねられる人物がはるかなので、あまり具体的だと他人として見ちゃうんですよね。抽象的だからこそ、自分に重ねられる部分はあるのかな。

神木　「プリンセス」という存在は、王子さまと結婚したらなれるというのが現実的なのですが、かなり時間をかけて「プリキュア」らしい話に落とし込んだのを覚えています。なおかつ、最終的にグランプリンセスになれたのは、誰が見てもあの人はプリンセスだよねって思えるくらいに成長を描くことができたからだろうなと。ゆいというキャラクターはプリンセスを客観的に見る、いわゆる「民」という役割を負っているキャラクターでもあるんです。そして、ゆいだけではなくて、視聴者もはるかを見て「プリンセスにふさわしくなった」と思えるようになっている。それができたことで、今回の物語は成功したかなと思います。

田中　ゆいは民の代表であり、本作のヒロインです。プリキュアはヒーローなので。

——はるかの成長は、最後にドレスアップキーを返したというシーンにすべて表れていたように思います。

神木　何か頑張らなければいけないと思ったときに、モノにすがりたくなることはあると思います。はるかにとって、それはドレスアップキーであり、ドレスアップキーはプリキュアになる力まで与えてくれました。それを返すということは彼女にとって、まさに絶望だったと思うんです。でも、涙をぬぐって前に進むことができる。そういう強い女の子を1年かけて描けたこと、彼女がそう行動することを違和感なく描けたことこそが、本作の成果だったと思っています。

——それではインタビューの最後に、1年通してみての、みなさんの感想をお聞かせください。

中谷　はるかの夢が1話からずっとブレなかったのがすごかったですね。そして周りのキャラクターが超現実的で。42話、43話のきららの話は、結構シビアな終わり方もしていましたからね。リアルに考えたら、ああなるのが正しいんですが、

なあなあにしないところがよかったなとは思っています。

田中　終盤にきららとみなみ、それぞれに2話を使ってお当番回が作れたのはよかったですね。当初、みなみは36話と44話の分割前後編のつもりだったんですが、44話を作っているときに1話じゃ内容が収まらなさそうだったので、じゃあさらにもう2話に分けてちゃんと最後まで描きき ろう、と決めました。当時は最終話までの話数の分割にまだ余裕があったからこそできた構成でしたね。みなみときららは42話から45話まででしっかり描いたぶん、終盤の出番が少し控えめになりました（笑）。

作りながら考えていたのは、結局「夢」とは生きる力だな、ということでした。今、世の中はとても厳しかったり、また物騒だったりしています。この先、生きるのがとてもつらくなるときや、夢や希望なんて考えている余裕がなくなるときだってやってくるかもしれない。申し訳ないけど、今を生きる子どもたちは僕自身が子どもだったときほど能天気に未来を考えていられないかもしれない……そんな時代ではないかと思うんです。でもだからといって死ぬわけにはいかないから、なんとかして生きていくしかないじゃないですか。だったらせめて、誇り高く、気高く生きてほしい。自分をしっかり持って生きていれば、楽しいことだってたくさん見えてくる。そうすれば世の中案外悪いものではないんじゃないかと、そんなふうに僕は思うんです。そのために自分を高めていってほしい、そういう心を育ててほしい。つらいことはあるけど、でもちゃんと周りを見れば一緒に頑張れる仲間だってたくさんいる。本編ではるかたちが行っていたプリンセスレッスンは、単なるマナー講座ではなく、まさしくそういう心と力を身につける修行でした。生きる力を磨いて、つよく、やさしく、美しく自分の人生を精いっぱい生き抜いてねという、本作を観てくれた女の子たちへのささやかな想いです。僕自身がそんな立派な人間じゃないから、余計にそう願っています（笑）。

神木　仁さんが「生きる活力」ってよくおっしゃっていて、周りから「おじさんっぽい」ってツッコまれていましたが、そういうことですよね。

田中　「プリンセス」とは生き方、「夢」は明日への力。そういうところに落ち着いたかなと思います。

ここが変わった！オープニングチェック！

田中SDこだわりのOP映像の変更点をご紹介。
映像で見比べてみよう。

◀▼13話では描かれていたトワイライトの仮面が、14話のOP映像ではなくなっていることが見てとれる

話数	変更部分
2	ゆい追加
3	みなみ追加
4	せいら&あやか&れいこ追加
5	きらら追加
7	ミス・シャムール追加
8	ゆうき追加
10	シュウ&ナオト追加
11	白金追加
13	らんこ追加、ロッドとドレス追加
14	トワイライトの仮面を外す
22	カナタを消す、はるかの表情修正
23	トワ追加
24	ゆめ追加

話数	変更部分
26	OPスタート時のレースを4人のものに変更、光の球17個に変更、トワ追加、はるか&みなみ&きらら新規カットに分割、スカーレットのドレスアップキー追加、トワ&シャムール追加、みなみ&きらら新規カットに分割、クローズを青年ロックに変更、ロックをストップ&フリーズのシルエットに変更、構える4人追加、スカーレット追加、フローラ&マーメイド&トゥインクルのドレスを変更、背中合わせのフローラ&スカーレット追加&ワイプの炎を赤色に変更、フローラの表情変更&横並びの絵にスカーレット追加、スカーレットのドレスアップキー追加など
27	パフ&アロマ新衣装に変更、パフ&アロマの変身シーン追加
28	ゆうきの親衛隊3名追加
32	小森はなえ追加、青年ロックを新生クローズに変更、ストップ&フリーズ顔見せ、新生クローズ追加、ストップ&フリーズ追加、シャット追加
33	キミマロ追加
34	クロロ追加
36	記憶喪失のカナタに変更、はるかの表情変更
37	あすか&つかさ&ますみ追加
38	りこ&ケンタ追加
40	記憶喪失のカナタを元のカナタに変更、フローラの背に流れる茨のざわめきを止める
41	王&王妃追加
43	かりん追加
50	はるかをグランプリンセスに変更、クローズの目を光らせる

シリーズ構成

田中仁

運命を切り開く少女たちの1年間を描ききることができた

みんなそれぞれ違う夢があっていい

——本作にシリーズ構成として参加することになった経緯を教えてください。

『ワンピース』でご一緒していた柴田宏明プロデューサーに『ドキドキ！プリキュア』の各話の脚本家として呼んでいただいてから、『プリキュア』と縁ができまして。『ハピネスチャージプリキュア！』でも各話の脚本を担当させていただき、3年目となる本作ではシリーズ構成としてお声がけいただきました。

——シリーズ構成の話が来たときには、モチーフが「プリンセス」というのは決まっていたとうかがいました。

決まっていましたね。でも「プリンセス」という要素だけでは物語は作れないので、1年のシリーズでどんなものを描いていくかを田中裕太SDやプロデューサーの方々と相談して、「夢」をテーマにすることになりました。

『プリキュア』シリーズは、3歳くらいの女児を視聴者として想定しているので、大きなテーマは「友情」「愛」「夢」など、わかりやすいもののほうがいいんです。その中でも、僕は「夢」が一番描きやすいと感じました。僕自身も、紆余曲折がありながらもアニメの脚本を書きたいという夢をずっと持ち続けていましたし、目標や生き方というものについて考えることもあったので、描くならこれしかないなと。本作のベースを作るためのディスカッションには、かなり時間をかけたのですが、テーマについてはすんなり決まったように記憶しています。

——プリキュア4人の詳細な「夢」に関しては、どのように決めたのですか？

主人公のはるかに関しては、彼女自身を、本作を観てくれる子どもたちに近づけたかったので、あえて具体的な夢は設定しませんでした。「プリンセスになりたい」という夢は大人からすると曖昧なものですが、3、4歳の子どもが抱く夢としては普通ですよね。とはいえ、はるかは中学生なので、物語が始まる時点では、自分の夢を人に言うのは恥ずかしいと思っています。

今回参加していただいた脚本家のみなさんに、はるかの夢を説明するときは悩みました。とても概念的なので、最初はうまく言葉にできなかったんです。

ちなみに今回、脚本を書く人間の中に男は僕ひとりいればいいだろうと考えまして、ほかは全員女性にお願いしました。女性ならではの感覚で指摘をもらうことも多く、とても助けていただきました。

——「プリンセスになる」＝「王子さまと結ばれる」と考える方も多そうです。

普通はそう思いますよね。はるかの夢を説明するときも、「玉の輿に乗るってことなの？」という質問がありまして、それを「一番の目的」にはしたくないんだけど、じゃあなんなんだと……。実際は「子どもがヒーローになりたいというようなあこがれの気持ち」に近いと思いあたり、そこから「はるかは子どものころに読んだ『花のプリンセス』の童話にあこがれていて、そのプリンセスになりたいと思っている」という設定が固まって、みんなの中で意思統一ができました。曖昧な夢の概念を本編であそこまで描けたのは、最初にちゃんと話し合えたからかもしれないですね。

——みなみに関しては、夢が変わっていったのが印象的でした。

本作ではいろいろな夢の形を描きたかったですし、全員がずっと一貫した夢を持ち続けるというのもリアリティーに欠けるかなと思ったので。途中で変わってもいいんだという夢の形を、みなみに担ってもらいました。

——逆に、きららは物語のスタートの時点で「モデルになる」という夢をかなえているんですよね？

はるかは「プリンセスになる」という小さなころからの夢に向かっている子ですが、夢というのはひとつかなえたからといって終わるわけではない。実際はその先も、まだ道は続いているということを担ったのがきららです。きららの夢は「母親のようなトップモデルになること」という、はるかと比べると具体的なものですけど、具体的だからこそ、大変な苦難もあるということを描くためのキャラクターでもありました。

——物語の途中から仲間となるトワに関しては、どのようにキャラクターが決まっていったのでしょうか？

トワのキャラクター性に関しては、もろもろの打ち合わせを重ねて、2クールのお話の流れが見えてきたところで決めました。現実の世界でも、夢を持ち続けられるかどうかは環境に左右されることがありますよね。トワはまさにそれを体現した存在。彼女はグランプリンセスになりたいという夢を持っていましたが、バイオリンの演奏がうまくできずにイライラしていたところを、ディスピアにつけ込まれてしまう。たったひとつの選択を間違った結果、悪の道に進んでしまっただけなんです。王族としての責任感が強いので、トワに戻ったあとも自分を責めていましたが、ノーブル学園という環境で、はるかたちからいろいろな影響を受けて、プリキュアになる自分を受け入れ、再び夢を追うことができるようになりました。

——『プリキュア』シリーズのメインキャラクターは、子どもたちでも読めるようにと名前がひらがなで表記されていますが、実際には漢字表記も決められている場合があります。本作では？

本作でも漢字表記は考えられています。はるかに関しては、僕が考えたのは「遥」。人生の先や未来、目標への道のりを示す「遥か彼方」というイメージでつけたつもりです。ですから、対となる王子の名前は「カナタ」なんです。トワの名前は田中SDが考えました。「遥か彼方」の先にあるのは「永遠(とわ)」だろうというところからだと思います。田中SDは、はるかはフローラであり、花のプリンセスということもあって、「春花」という漢字も考えているみたいです。みなみは、

Profile

【たなか・じん】

9月20日生まれ。東京都出身。脚本家。『ドキドキ！プリキュア』『ハピネスチャージプリキュア！』に参加後、本作でシリーズ構成を初担当。2016年4月放送スタート予定の『あんハピ♪』のシリーズ構成も務める。

マーメイドをイメージさせる「美波」です。きららは、星つながりとかわいさ重視で決めたので、漢字表記については考えていませんでしたね。

――決め技を決めたのも、みなさんで？

決め技は田中SDが考えられたと思います。「お覚悟はよろしくて！」というセリフに関しては、打ち合わせの中で決まりました。学園は全寮制ですし、先輩後輩の関係性から宝塚歌劇団っぽさも感じられるんじゃないかということで、それを意識した言い回しにしました。「ごきげんよう」も、そこからですね。

寮生活で心の交流を描きたかった

――本作の舞台となるノーブル学園が全寮制というのは、今までのシリーズにはない新しい試みでしたね。

これは僕から提案しました。「プリキュア」シリーズは1年間の放送なので時間はたっぷりあると思われがちですが、変身シーンや戦いのシーンを入れていくと、ドラマを描く時間があまり取れないんです。僕としては、はるかたちの人生をきっちり描きたいと思っていましたし、キャラクターの心の交流も描きたかった。でも、シリーズの持ち味であるプリキュアの要素は削りたくない。短い時間の中ですべてを描くにはどうしたらいいかと考えた結果、全寮制にしようと思いついたんです。

――全寮制にすることで、どんなメリットがありましたか？

たとえば友達に会いに行くのに移動する過程を描かなくてすみますし、寮に入ることを許してくれる親というところから、家族の大らかさ、愛情の深さが伝わるだろうと。また、はるかたちと同年代の生徒たちがたくさんいることで、多くの「夢」を描きやすくなりました。

そのほかに全寮制にしたかった理由は、僕が人間の側ではるかの夢をバカにする存在を描きたかったというのもあります。ゆうき君のことですね。男の子の夢も描きたかったですし、ノーブル学園が全寮制でありながら男女共学なのは、そんな理由からでもあります。

――学校の生徒といえば、ゆいはなぜプリキュアにならないのだろうという、ファンからの疑問もあったようですね。

ゆいは、最終話でプリキュアたちの活躍を絵本に描く存在として決めていたので、プリキュアになってはいけなかったんです。でも、描くためにはなるべくプリキュアに寄り添わなくてはいけないから、早々にプリキュアの正体を知り、常に側にいることになりました。

また、プリキュアたちがグランプリンセスになるためには、自分たちの力だけではなく、周りの人々の力も必要だという設定も早い段階から考えていて、ゆいはその橋渡し役でもありました。ですから、彼女はプリキュアではなく、生徒たちの側にいてくれないといけない存在だったんです。

――ゆいは、ディスダークに夢を封じられる回数も多かったですが、そのたびに夢が少しずつ変わっているのが印象に残りました。

それが、ゆいの成長でもあります。彼女について物語を考えたとき、最後までプリキュアに頼りっぱなしにはならないだろうなとも考えたんです。おそらく、最後は自分で檻を破るだろうと。であれば、何回か檻に閉じ込められて少しずつ成長を見せるのも手なんじゃないかなと思いました。

――はるかたちの家族は、登場回数は少なかったですが、出てくるたびにインパクトがありましたね。

はるかの父親の、はるかへの溺愛っぷりもすごかったですね（笑）。春野家や海藤家の職業に関してはだいたい決めていましたが、細かくはその登場回の脚本を担当された成田良美さんが考えてくださいました。きららの家族については、最初はもう少しシビアな設定も考えていたのですが、今回の作品のカラーに合わないだろうということでボツになりました。

予想外の変化をとげた敵キャラクター

――物語としては、敵であるディスダークと妖精、そしてカナタの存在も欠かせませんでした。

主人公たちが夢を追い求める存在ですから、その敵は夢を否定し、絶望を与える存在だろうということで、ディスダークの三銃士を設定しました。当初、勧善懲悪ものとして、敵はきちんと倒す方向で考えていましたし、あまり敵側の描写をする予定はありませんでした。なぜなら敵について細かく描いていくと、視聴者だけでなく、スタッフも感情移入するからです……。本作で一番に描くべきなのは主人公たちの心の交流と成長ですから、敵サイドに関しては「最後まで描ける尺があるならやるけど、尺がなくて中途半端になるならやめるべき」だと考えていました。ですから、クローズも最初は11話で退場して、その後登場する予定はありませんでした。

――それが再登場することになったのはなぜですか？

理由は、いくつかあります。

じつは11話の脚本を書き始める前からプロデューサーに、クローズを復活できないかと打診を受けていました。

初めのほうは、悪の華として見事に散ったクローズが復活したら構成が崩れてしまうと思っていたのですが、過去の放送を観ながら、「もし復活したらどうなるのか？　本当に物語は崩れるのか」とだんだん考えるようになりました。

そのころに11話の放送を観たんです。映像もクローズ役の真殿光昭さんの演技もすごかった。さらに、フローラが倒したクローズに対して「ごきげんよう」と言ったときの表情が、とても複雑に見えまして……。このふたりの物語の続きを書けるかもしれないと感じました。そこからは一気にラストまでの展開が浮かびまして。ただ復活させるだけじゃなく、最終話はふたりで一騎打ちをして、夢と絶望の関係に答えを見つける。そこまでやるなら、彼を復活させるべきだという結論に至りました。今にして思うと、一番頑なだった僕が、思いきり敵に感情移入してしまったわけです。

――シャットやロックも個性的なキャラクターでしたね。

シャットもロックも、クローズが退場したことで感情が表に出てきて、運命が変わりましたね。クローズが退場したままであれば、次はシャットが倒され、ロックが倒され、ラスボスはディスピアで終わったと思います。

シャットは、優秀な長男であるクローズ、三男のロックに挟まれて、ちょっと不憫なキャラクターになりましたが、プリキュアや人間の成長を感じるという意味においては大きな役目を果たしてくれたと思います。

ロックのフード部分が本体というのは当初から決まっていたのですが、クローズが復活したのにロックだけ退場させたらさびしいという話になりまして。それなら取り憑かれているのが妖精ということにして、ロックの話も続けていけないかということになりました。

――今回は、妖精たちも成長する存在として描かれましたね。

「プリキュア」シリーズにおいて、妖精は「かわいくて面白い部分を担う存在だ」とプロデューサーからも言われていたので、にぎやかでかわいいキャラクターになるようにしました。最初はドジだったのが、頑張って成長していく姿も描けてよかったです。

――そして、はるかをある意味引っかき回しているのがカナタの存在です。

カナタはもともと、はるかにさまざまな影響を与える存在として考えていました。物語の構成を考えているときに、は

るかは成長するために一度大きな絶望をするだろうと田中SDとも話していました。はるかが絶望することといえば「夢を否定されること」なのですが、それができるのは誰かといったら、それはもうカナタしかいないだろうと。当初は、カナタがディスピアの側に堕ちてブラックプリンスになる案もありましたが、その前にトワがブラックプリンセスになることが決まったので、それはなくなりました。ではどうするかと考えて、カナタを記憶喪失にしてはどうだろうと。記憶を失ったカナタには夢の大切さがわからないので、38話でフローラに「プリンセスになんてなるな!」と言えてしまう。夢を支えてくれた存在から夢を否定されることの衝撃は大きいだろうということで、こういった流れになりました。

カナタ自身は、1話ではるかと出会った時点で、トワが行方不明になっていて心に傷を負っているんです。ただ、トワのようにまっすぐで大きな夢を持つはるかと出会って、その存在が彼の希望になった。だからこそ、ホープキングダムの人々が絶望にとらわれたなかでも、カナタだけは絶望と戦い続けることができたんだと思います。

プリキュアになることは夢への過程でしかない

——最終話で、はるかがドレスアップキーを返してしまったのは意外でした。

僕は、はるかたちにとってプリキュアは、精神的に成長するための過程でしかないと思っているんです。1話ではるかが受け取ったドレスアップキーは、夢を育てるために必要なものであり、その役目を終えたら返すものだと考えていました。いつまでもドレスアップキーに頼らなくてはいけないのなら、それは成長ではないだろうと。

——最終話のCパートでは、大人になったように見えるはるかの姿も描かれていましたが、彼女がカナタと再会できたかどうかはわからないままでしたね。

これは、18話で『花のプリンセス』の原作者である望月ゆめ先生がはるかに伝えたのと同じで、最初から視聴者に委ねるつもりでした。グランプリンセスになったといっても、はるかの夢はまだまだこれから。彼女の人生や未来は続くわけですから、そこは観ている人たちに想像していただけたらと思います。

——『花のプリンセス』の絵本と見事にリンクしたわけですね。

『花のプリンセス』のストーリーは僕が考えたのですが、まだ最終話まで物語がどうなるかわからない段階で作ったので、鳥や茨や魔女など、いろいろな場面で本編とリンクできそうな要素を散りばめました。話の流れは本編と違いますが、絵本とはるかの現実が同じになるはずはないですし、終わってみればいい感じになったかと思います。

——1年間にわたるシリーズ構成の仕事を振り返ってみての感想は?

放送はあっという間でしたが、作業としては大変なこともありました。とくに放送前までは初めてのシリーズ構成ということもあって、プレッシャーを感じ続けて、ヒゲが円形脱毛症になりました。今はもう治っていますけど。

ただ、シリーズ構成という立場だからこそできたことも多く、本作で描くべきことは描ききれたと思っています。

本作は田中SDをはじめとするスタッフやキャストのみなさんはもちろんのこと、これまでの「プリキュア」シリーズの脚本で大変お世話になった成田良美さん、高橋ナツコさんに加え、お互いにプロになる前からの知り合いだった香村純子さん、東映アニメーション所属時代の同期ライターである伊藤睦美さんとご一緒できたのも大きかったです。

僕が悩んだときも、必要なものを察知して書いてくださったり、提案してくださったりして、本当に助かりました。

僕は、子どもが元気に育つためには、保護者の存在が不可欠だと思っています。トワが環境によって一度は悪い方向に行ってしまったように、環境が子どもの夢を閉ざしてしまうこともある。本作にはそんな想いをちょっぴり込めたりもしましたが、優先順位としては低めで、とにかく観ていただいた方がお話を楽しんで、はるかたちを好きになってもらえたのなら、それが一番です。

本作を応援していただき、ありがとうございました。それでは、ごきげんよう。

絵本『花のプリンセス』を公開!

田中さんがストーリーを作った『花のプリンセス』のイラストを紹介！
本編で、はるかが語ったストーリーもチェック。

お花に囲まれてお城で育ったプリンセスは、とってもやさしくて、みんなに愛されていたの

彼女が笑うとどんなところでもお花が咲いて、みんなが笑顔になったんだよ

ところが……人気者のプリンセスにやきもちを焼いた鳥さんが、

隣の国の王子さまに会いに行く途中のプリンセスにウソをついて恐ろしい魔女の住む森へ連れて行ってしまったの

でも彼女は魔女を恐れず、ウソをついた鳥さんのことも絶対に責めなかった……

そのやさしさに鳥さんは、自分の行いを反省して、プリンセスを助け出したんだ

そして「ひどいことをしてごめんなさい」って、泣きながら何度もあやまったんだよ

鳥さんがプリンセスと同じ笑顔になると、魔女の怖い森は綺麗なお花畑になったの

プリンセスは、許したの

「助けてくれてありがとう、鳥さんも笑って」って、笑顔で許したんだよ

そしてプリンセスは鳥さんたちと仲よく旅を続けたんだ

スタッフインタビュー3

劇場フルCG中編監督 EDディレクター
宮本浩史

Profile

【みやもと・ひろし】
4月16日生まれ。兵庫県出身。本作では、後期のエンディングディレクターを務める。『映画Go!プリンセスプリキュアGo!Go!!豪華3本立て!!! プリキュアとレフィのワンダーナイト!』監督、キャラクターデザイン、絵コンテ、キャラクタースーパーバイザー、アニメーション担当。

TVでも映画でも、新しい表現に挑戦できた

生き生きとした表情を作れるようになった

――宮本さんは、本作では後期のEDディレクターを担当されていますが、前作の『ハピネスチャージプリキュア!』と比べて、製作面での変化などはありましたか?

本作では、表情の製作システムを大きく変えました。今までは目や口のパーツをそれぞれ組み合わせたときに、全体の表情が崩れてしまうこともあったのですが、本作ではいろいろなパーツを組み合わせても崩れない設計ができるようになりました。その結果、生き生きとした表情芝居ができるようになりました。

――エンディングのダンスシーンは、モーションキャプチャーですか?

今回、ソロのダンスシーンだけはモーションキャプチャーではなく、アニメーターが手で芝居をつけました。神木優プロデューサーから「キャラクターの心情を描く、ミュージカルのようなものをめざしてほしい」というオーダーがあって。モーションキャプチャーは、動きをリアルに描くことは得意ですが、キャラクターの心情は表現しにくいんです。ですから動きを参考にして、アニメーターが手作業で動きをつけました。

――本作のキャラクターをCGにする際には、どんな苦労がありましたか?

CGはウェーブのかかった髪を表現することで、あまり得意ではありません。そんな髪が何本にも重なっていたフローラは、動かすのが大変でしたね。一方で、マーメイドは髪のうねりもゆるかったですし、ひとまとまりになっているので、動かしやすかったです。

映画では3DCGでの物語製作に挑戦!

――宮本さんは、『映画Go!プリンセスプリキュア Go!Go!!豪華3本立て!!! プリキュアとレフィのワンダーナイト!』も手がけられていますが、こちらはアニメの絵柄に近いセルルックのCGではなく、フル3DCGですね。

TVシリーズは本編の絵柄があってのものなので、決め技のシーンなどもその絵から違和感がないようにすることが目標なんです。ですから、セルルックを使ったほうがいい。でも、映画は今回3本立てで、それぞれのCGも区別したいということもあり、僕が担当した『プリキュアとレフィのワンダーナイト!』ではフルCGで製作しました。

――映画におけるCGの特徴は?

絵の線の入り抜き（線の描き始めと描き終わり）を強調した形になっています。これまでのCGは線が細めだったので、あまり入り抜きを感じさせることができなかったのですが、映画では線を太めにしたので、入り抜きを強調して見せることができました。また、質感やハイライト表現などがかなり違います。金属のかぼちゃに写っている光は、HDRI（ハイダイナミックレンジイメージ）という、深い輝度情報を持つことが可能な画像を配置しています。ナイトパンプキンとレフィは、実写の光源情報を基に光を当てていく「イメージベースドライティング」という技術とセルルックの技術を組み合わせて、イラストっぽいのに、実写的なリッチさもあるようなCGにしました。さらに、肌の透過を表現できる技術があるのですが、今回それをキャラクターのほうで導入して、実写映画に近いことをやりました。

――映画はCGではありますが、アニメチックな動き方もしますね。

今回は、すべてのシーンで1秒間に24コマを使っているのではなく、1秒間に8コマや12コマなど、あえて間引いたシーンもあります。24コマを使うと動きがぬるぬるしすぎて気持ち悪いと感じる場合もあるので。そのシーンで最も効果的なコマの使い方を模索しました。

――映画のキャラクターをモデリングする際に気をつけられたことは?

僕は中谷さんのキャラクターがすごく好きなので、それを壊さないように。基本的にキャラクターが持っているコンセプトや、土台になっている部分はトレースして崩さないようにしつつ、表情をCG的に強調していく方向を探っていきました。

――レフィは映画のオリジナルキャラクターですが、デザインで注意したことは、どんな点でしょうか?

動かしやすいキャラクターにしようと

スタッフインタビュー4

CGディレクター

小林真理

Profile

【こばやし・まり】
8月5日生まれ。神奈川県出身。本作では、16話からのCGディレクターを担当。主な担当作品は、『魔法つかいプリキュア！』（CGディレクター）など。

CGならではの質感を活かすこともできました

——小林さんは、本作の16話以降のCGディレクターとして参加されていますね。

本編ですと、スカーレットの決め技のバンクや、4人の合体技のCGを担当しています。バンクや合体技というのは、手描きでやる場合でも上手なアニメーターが担当する部分なので、それをCGでやるのは難しくもありましたが、やりがいもありました。

——スカーレットを描くにあたり、苦労した点を教えてください。

スカーレットは髪と肩のパーツが難しかったですね。スカーレットの変身バンクの最後に、炎の弾がぶつかって、熱風の中で「ごきげんよう」と言うカットがあるのですが、絵コンテでは髪が上に向かってなびいているんです。でも、CGは髪をひとつのパーツとして作っているので、細かく1本1本動かすことができない。結果、髪のパーツをまるごとひっくり返してなびかせました。シルエットでそう見せないといけないので。

——4人の合体技では、どんな工夫をされているのですか？

「エクラ・エスポワール」のバンクは、それまで個々のバンクでは裾が伸びたりモチーフがついたりするくらいだったドレスが、4人そろってウエディングドレスみたいなデザインに変わるんです。ウエディングドレスは女の子のあこがれですから、CGとしても気合いを入れてやろうということになりました。作画でも特効などを入れることはできますが、服に質感処理を入れられるのはCGの強みなので、頑張ってサテンのような質感にしたり、リボンをシルクのようなツヤっとしたものにしたり、工夫しましたね。

——本作のCGで、ほかに工夫されたことはありますか？

ドレスアップキーやパフュームの質感にこだわりました。最初は、観ている子どもたちも、自分の持っているものと見紛うほどにリアルなものがTVに写っているほうがうれしいのではないかなと思いまして、すごくリアルなものを作ったんですよ。でも、本編のキャラクターが持つと違和感が出てしまって。そこで、アニメっぽいものも作り、最終的にはその中間に落ち着きました。例年、CG部の作業というのは最終話の制作前には終わっているのですが、今年は田中SDが最終話に登場するキーもCGで作りたいとおっしゃったこともあって、最後まで携わらせていただきました。

——小林さんは、『映画プリキュアオールスターズ みんなで歌う♪奇跡の魔法！』における、総勢44人のダンスシーンも担当されているそうですね。

ダンスシーンの見どころは、これまでCGで踊ったことのないキュアエコーが登場するところです。44人いるだけの華やかさはあるので、ぜひチェックしてみてください。

——『魔法つかいプリキュア！』でも、CGディレクターをされていますが、今後CGで挑戦してみたいことは？

『ハピネスチャージプリキュア！』のバンクは40秒くらいだったと思います。本作はそれぞれ90秒くらいに伸びましたので、経験は着実に現場の力になっていると思っています。『Go！プリンセスプリキュア』での経験も活かして、いずれはキャラクターから背景まで、すべてCGで作った作品を手がけてみたいですね。

考えましたね。せっかくのオリジナルキャラクターですから、CGに向かない部分に四苦八苦するよりも、動かしてより魅力的に見せられる、動いて栄えるフォルムを考えました。それは敵であるナイトパンプキンに関しても同様です。

たとえば、フローラのような髪形は、斜めから観たときに前髪を描くのが、とても大変なんです。作画だと角度に合わせて髪を描くことは普通ですが、CGで同じように見せようとすると、動きに合わせて前髪の位置をズラしていかないといけないんです。ですから、レフィの髪形は、パーツをズラさなくてもいいようなデザインにしました。

——かぼちゃぜツボーグは、どことなくかわいさがあります。

かぼちゃぜツボーグは、当初は衛兵役だったのですが、鷲尾天プロデューサーから「ゼツボーグにしたい」という案が出まして。であれば、かわいいほうがいいだろうということで、デフォルメキャラクターにさせていただきました。

——変身前の姿で登場したのは、はるかだけでしたね。

僕が変身前のはるかの姿が好きで（笑）、どうしても映画に出したくて、勝手にモデリングをしてしまいました。変身前のはるかとフローラは、素体と呼ばれる元の部分は同じなのですが、フローラの頭身ではるかを作ると、顔が小さく見えすぎてしまうんです。これは、髪形や衣装によるところが大きいですね。ですから、実際には頭はフローラのときの1.2倍くらいあるんじゃないかな。

——今後、CGを作っていくにあたり、どんなことに挑戦したいですか？

現状に満足すると成長は止まってしまうと思うので、作品を作るたびに新しい挑戦は続けていくつもりです。実写のようなリアルな案件では新しい表現をやっているので、そこで得た知識を『プリキュア』シリーズやアニメでも使えるようにしたいです。

キャストインタビュー 1

本作のキャラクターを演じたキャストたちが本作への愛と想いを語る!

嶋村侑

キュアフローラ✿春野はるか

Profile

【しまむら・ゆう】
4月18日生まれ。東京都出身。主なアニメの出演作品は、『ガンダム Gのレコンギスタ』アイーダ・スルガン役、『進撃の巨人』アニ・レオンハート役など。

合格したことが信じられなかった

——『プリキュア』シリーズは、メインのプリキュア役をオーディションで決めますが、嶋村さんは最初からフローラ／はるか役を受けられたのですか？

最初にお話をいただいたときは、マーメイド／みなみ役でしたね。オーディション時に見せてもらったイラストに私服姿はなくて、全員変身後の姿で。私はその中でも、マーメイドに惹かれました。モードエレガント時のマーメイドラインの大人っぽいスカートと、まるで水槽のような青い髪がとっても素敵で！「ああ……この御髪をステキなアクアリウムにしたい！」と思いました。でも、実際にはマーメイドを受けたあとに「フローラを読んでみてください」と言われて、「私の『プリキュア』は終わった……」と。

——その段階でフローラについて、どんな印象を受けたかは覚えていますか？

さすがピンクの子は王道のかわいさだなと思いました。でも、自分としてはまさか受けることになると思っていなかったので、フローラのことは正直あまり覚えていなくて、私自身がかなり混乱していたことをよく覚えています。あの日のことで印象に残っているのは、マーメイドを受けてからフローラを受けるまでの時間に水を買おうとしたところ、小銭を持っていなくて、見かねたほかの事務所のマネージャーの方が助けてくれたこととか、ドアが開かなくて焦ったこととか（笑）。

——フローラのセリフを読んだことも、あまり覚えていない？

そうですね。「一生懸命やった」ということしか……。私としては水を飲んで落ち着いたつもりだったのですが、「どれ？この子？　私が？　私が？　はぁ、緊張しちゃって……」と思ったことが全部口から出ていたみたいで、いまだにスタッフの方にからかわれるくらいです。あとからうかがった話だと、その慌てぶりが「はるかっぽい」と思っていただけた部分もあるようなのですが、大人としては恥ずかしいかぎりです……。

——そんなにも慌てていたのであれば、合格の連絡が来たときは驚いたのでは？

事務所のスタッフから電話で連絡をいただいたのですが、第一声が「はるかちゃん、おめでとう」だったんです。まず、「誰ですか？」って聞き返しました（笑）。ちょっと間を置いて、『プリキュア』の話だなと理解はしたのですが、つい「みなみじゃないんですか？」って言ってしまって。すごく怒られました。

——はるか役は座長のポジションですから、スタッフの方も喜びより疑問が先に来るとは思わなかったでしょうね（笑）。

フローラとはるかを心から尊敬しています

はるかを演じたくなかったというわけではなくて、じつは自分が座長ポジションにいるのが想像できなかったんです。それに、本当に私はマーメイドが好きなんですよ。みなみさんにひと目ぼれしたのは、はるかと一緒ですから、はるかと同じように「あの人素敵だな。あの人みたいになりたいな」という気持ちをオーディションのときから自然と持てたので、結果オーライということにしてください（笑）。

まぁですから……連絡をいただいてからも、アニメのアフレコ前にあるおもちゃの音声収録までは、この合格は間違いなんじゃないかと不安に思っていました。間違いかもしれないけど、呼ばれたから一応行ってみるか……みたいな気分でスタジオに行ったのを覚えています。

——その不安が消えたのはいつですか？

最初のおもちゃの収録のときに、プリキュア4人がそろったのですが、みんなの声を聞いて、「このバランスなら私で合っているのかも」と思いました。スタッフの方からも、とくに「間違えて嶋村さんを呼んじゃいました」とも言われなかったので、私で合っているんだと。収録後、ほかのキャストのみなさんも、自分と同じように不安に思っていたのだと知って、ちょっと安心した記憶はあります。その後、プロモーションの関係で『ハピネスチャージプリキュア！』のキャストの方と一緒に収録をする機会もあって。キュアラブリー役の中島愛さんとは一緒に食事に行ったりもしたので、そのころにはさすがに不安も払拭できていました。

——『プリキュア』は11年も続く人気シリーズですが、出演するにあたりプレッシャーなどはありましたか？

実際はプレッシャーがあるんですけど、私がそれに気づくよりも先に、周囲の方が「プレッシャーがあるんじゃないのか」と気にしていたみたいで、よく気づかって声をかけてくださったんです。私は声をかけられたことで、逆に「プレッシャーを感じている場合じゃない、決まったんだからやるしかない」という気分になりました。プレッシャーがあってもなくても、1年間やらなければならないことには変わりはありませんからね。

はるかは自分の夢をしっかり持っている子

——フローラ／はるかに対しては、最初どのような印象を持ちましたか？

最初はとにかく一生懸命で元気のいい子だなと。オーディションのときは、「将来プリンセスになりたい女の子」という設定しかうかがっていなかったので、「プリンセス？　夢見がちなのかしら」くらいに、軽く捉えていましたね。ただ、「絵本の『花のプリンセス』みたいな」というセリフを見て「セルフイメージが強いんだな」と思いました。「セルフイメージ」という言葉は当たらずとも遠からずでしたが、実際に向き合ってみると、私が考えていた以上に、はるかは彼女なりのしっかりとした「プリンセス像」を持っていました。そして、それをめざして頑張るから「プリンセスになりたい」という端的な言葉で自分の夢を表現できるんです。なんて素敵な子なんだろうと思うようになりました。

——迷ったり悩んだりしながらも、「プリンセスになりたい」という思いは貫き通す、芯の強い子でもありましたね。

でも、じつは1話では、ノーブル学園で出会ったゆいちゃんに対して「プリンセスになりたい」という夢を言えない子だったんですよね。それは子どものころに夢をからかわれたからでもあるのですが、自分に自信がない子でもあった。ずっとプリンセスになる夢はあきらめずに

持っていたわけですから、芯の強さはあったと思うけど、発揮できなかったんですよね。それが、プリキュアに変身する力を得たことで、自信を持つことができるようになったのだと思っています。

――1話でゆいは「絵本作家になりたい」という夢をはるかに伝えられている一方で、はるかは言えなかったんですよね。

いろいろな人の考えを認めて受け入れる包容力を初期の段階から発揮してしまっているので忘れられがちですが、はるかは本当に普通の子なんですよ!

――そんなフローラ／はるかとご自身とで、似ているところはありますか?

はるかに対してとくに強く共感を持ったのは37話で『ロミオとジュリエット』の演劇をする話。はるかがジュリエットの演じ方に悩みますが、「まっすぐにやろう!」と決意する姿です。私もはるかを演じるにあたり、不安に思ったり悩んだりもしましたが、この役のために自分に何ができるのか考えたとき、「まっすぐやろう!」と決意して1話の収録に臨みました。ただ、共感はできるのですが、自分自身と似ているところがあるかと言われると困りますね。正直フローラ／はるかも含めて、自分とキャラクターが似ていると思ったことは、これまでほとんどないんです。もちろん、自分の中にまったくないものが出せるとは思いませんし、ありがたいことにスタッフの方から似ていると言ってもらったこともあるので、何かしらあるとは思うのですが……。むしろ私は、はるかを尊敬しています。

――どういったところに尊敬の念を?

「プリンセスになりたい」という夢を含めて、自分がこうなりたい、こうしたいと思う気持ちをずっと強く持っていられるところ。それから、相手のことを受け入れられる度量の大きさ。そこが個人的にはるかを「ナイト(騎士)」と呼んで、素敵だなと思っているゆえんです。自分がやるのではなくて、一緒に手を取り合ってやろうというところも素敵だし、はるかには人を惹きつける力がすごくあると思います。すでにモデルとして活躍しているきららちゃんに「私の100%を200%にすればいいだけだよ。はるはるとなら簡単に120%いけたんだし」と思わせることができるのも、はるかならではかな。

――みなみにも、「バレエを教えてください!」と、ぶつかりにいける子でしたね。

あこがれのあまり、後先考えずに突っ込んでいっちゃっていましたね(笑)。でも、それをなんとなく許せる勢いみたいなものが、はるかにはあるのかな。カリスマ性とは少し違うと思いますが、人を惹きつける力があるんだと思います。

――それでいて、できないことをできるって言っちゃうところもある。

7話のテニスの回はすごかったですね(笑)。あそこは、はるかの素が一番出ていた回なんじゃないかな。なんでテニスの経験もないのにやるって言ったのかと思えば、「プリンセスっぽかったから」ですからね。気がつけば、「打倒ゆうき君」とか言っていて、目的が変わっているだろうと(笑)。それでいて、特訓をしてちゃんとできるようになろうと頑張る姿は素敵でした。8話でドレスを作っているときには、徹夜続きでしんどくなっているのにもかかわらず、きららちゃんやみなみさんの応援もしっかりと受け止められている。自分が切羽詰まっているときって、つい周囲に当たり散らしてしまうこともあると思うんです。でも、それをせずに周りがちゃんと見えているところは素敵でしたね。私は全50話で描かれた、はるかの出てくるシーンはすべて好きです。

『プリキュア』は人生の宝物

――アフレコで、印象的だった出来事は?

私、アフレコで浅野(真澄)さんに突き飛ばされたんですよ!(笑) みんなで声をそろえて決め技の名前を言うシーンがあるのですが、私が古い技名を言ってしまったことがあったんです。そのとき、「せっかく合っていたのに!」(心の声)って隣に立っていた浅野さんに、本番中にもかかわらず思いっきり突き飛ばされて、面白いくらいに綺麗によろけてしまいました。浅野さんご自身は、突き飛ばしたことですっきりしたのか、すぐにマイク前に戻っていかれたのですが。

――アフレコは、その場でやり直しにはならなかったんですか?

『プリキュア』のアフレコって、基本的には途中で失敗しても最後までやるんです。そのときはさすがにミキサーの方も止めようか迷ったみたいなんですけど、私も止めちゃいけないと思ってすぐに戻ったので、じゃあ最後までいこうかとなったみたいですね。とはいえ、誰かが大笑いをしてしまえば止めざるを得なくなってしまいますから、周りのみなさんも、私自身も、本番中にそんなことが起こったのが面白いとは思いつつも、止めてはいけないと笑いをこらえるのに必死になっていました。本作のアフレコでは、4人そろっての決め技などはフローラにみなさんが合わせてくださる形でやっているのですが、その肝心な私がとちったので、浅野さんも思わず手が出ちゃったんでしょうね。申し訳ありませんでした。

――その後はもちろん録り直しですよね。

そもそもセリフが間違っていますから、当然録り直しです。その後、浅野さんから何か言われたかな……。衝撃的すぎて、正直アフレコが終わってから何があったのかは全然覚えていません(笑)。それ以外の思い出だと……(山村)響ちゃんとパフ役のなおちゃん(東山奈央)とアロマ役のコッキー(古城門志帆)がよく歌って、軽く踊っていました。あと、予告のナレーション収録のとき、いただいた台本がすごく和風な書体になっていたことがあって。しかも、響ちゃんが閃いてしまったらしく、雅さを感じさせるような口調で読み始めちゃったんですよ。私もそれに乗っかっていったのですが、響ちゃんの読み方があまりにも雰囲気がありすぎて、すごく面白かったですね。半年くらい響ちゃんとはその話題でよく笑っていた気がします。浅野さんからは「同じ話題でよく半年も笑っていられるね」ってあきれられましたが。

――1年間、フローラ／はるかを演じてきた嶋村さんにとって、今「プリキュアとは」と聞かれたら?

私の人生においては、宝物になると思います。個人的には、すごく勉強になることも多かったですね。

――では最後に、これまで『Go!プリンセスプリキュア』を応援してくださったファンへメッセージをお願いします。

1年間、私たちのことを見守って、応援してくださって、本当にありがとうございました。みなさんの応援があったからこそ、フローラたちはグランプリンセスになれたのだと思っています。また、はるかたちの夢はまだ始まったばかりですが、きっとこれからはみなさんからいただいた勇気を胸に、いろいろなことを成しとげていってくれるんだと思います。『Go!プリンセスプリキュア』はもちろん、次の『魔法つかいプリキュア!』、そしてさらにその次、次の次……と百代先まで、『Go!プリンセスプリキュア』にもいただいた勇気を分けていただき、『プリキュア』というタイトルをさらに成長させていっていただけたらと思います。これからも末永くお力をお貸しください。ありがとうございました。

私たちがリラックスして自然にいられたのは、浅野さんのおかげです。浅野さんは飾らなくて知的で、とてもユーモアがあって、たくさん相談にも乗ってくれて、私は本当に浅野さんを頼りにしていました。あこがれのますみん、収録が終わってしまって、おしゃべりをする機会が減ることがさびしいよぉ。またマイブームを教えてくださいね。ありがとうございました。

響ちゃんとは、このメンバーの中でご飯を食べた回数が一番多い気がします。プリキュアのイベントも一緒に楽しんだね。響ちゃんは感激やさんで、映画館でもサンシャインや遊園地のイベントの観覧に行ったときも、目をキラキラさせたりウルウルさせたりしていて。響ちゃんが隣で心を震わせていてくれたから、私も恥ずかしがらずに素直に楽しめたよ。ちゅっ。

沢城さんは、私がマイク前で失敗したときには「そういうこともあるよ」ってよくフォローしてくれて、背中を押してもらったこともありました。プリキュア体操、ふたりで残って踊りましたね。あのとき楽しんで踊りきっている沢城さんの笑顔が、とても美しかったことを覚えています。どんなに忙しくても状況に左右されずに、まっすぐ取り組む姿勢を見習いたいな。しっかりされている印象だったけど、かわいらしいところもたくさん見せてくれてありがとう。大好き。

キャストインタビュー2

浅野真澄

キュアマーメイド ✿ 海藤みなみ

Profile

【あさの・ますみ】
8月25日生まれ。秋田県出身。主なアニメの出演作品は、「一騎当千」孫策伯符役、「ハヤテのごとく！」朝風理沙役など。

『プリキュア』の経験は今後の活動のエンジンになってくれる

過去のシリーズを全部チェックした

──まずは、オンエアが終わった現在の感想を教えてください。

学校を卒業したみたいな気持ちですね。『プリキュア』シリーズはアフレコが1年間ありましたし、ミュージカルなどの声だけ出演するものもあり、アフレコする回数はとても多かった印象です。

──オーディションでは、マーメイド／みなみ役を受けられたのですか？

最初はスカーレットを受けました。でも、スカーレットのあとに「マーメイドもやってみてください」って言われて。そのときはまず、「スカーレットはハマっていなかったんだ、ダメだったんだなぁ」という気持ちが先に立ちましたね。

──マーメイド／みなみを演じるときは、どのように臨んだのでしょうか？

『Go!プリンセスプリキュア』のキャラクターは、全体的に等身が高い印象があって。みなみは中学生ではあるもののイラストだけなら大人っぽく見えたので、どのくらい大人っぽく演じていいものかを考えました。素に近い感じでやると、大人すぎる気もするし、でもほかのキャラクターはかわいい感じだから、大人っぽい子がいてもいいのかなとも思って。結局、考えるのはやめて、そのときの気持ちで臨みました。その段階では受かる気がまったくしませんでしたけど。

──合格したという連絡が届いたときは、いかがでしたか？

事務所のデスクの方が電話をかけてきてくれたのですが、まず「ダメでした」って言われたんです。だから、「わかりました」って答えたのに「ですが、マーメイドで決まりました」って言われて。落差がすごすぎて、頭が真っ白になりましたね（笑）。ちょうど電話をもらったときが、『ドキドキ！プリキュア』で相田マナちゃんを演じていた、なばちゃん（生天目仁美）と一緒に仕事をした直後だったんですね。本来、プリキュア役に決まったことはほかの人に言ってはいけないんですが、許可をいただいて、なばちゃんとだけ『プリキュア』の話をするようになりました。

──生天目さんとは、どんなお話をされたのですか？

『プリキュア』シリーズのスタッフの方の雰囲気や、スタッフの方が作品をすごく大切にしていらっしゃることなどですね。なばちゃんは「プリキュア役は、そのときすごくプリキュアを必要としている人に決まる気がする」と言っていて。その熱い想いを聞いて、私ももっと過去の『プリキュア』シリーズについて知っておいたほうがいい気がして、過去のシリーズを全部観直したんです。

じつは、『プリキュア』シリーズは自分とは縁がない作品だと思っていて。観るとやってみたくなってしまうので、ちょっと距離を置いていたんです。でも、実際に観てみると、本当にどの作品も面白くて。各シリーズで登場するキャラクターの性格も家族構成も世界観も異なりますから、ひとつも同じものがない。たとえば文化祭のエピソードひとつとっても、キャラクターが違えばまったく違うお話になるんだなと、改めて人気のシリーズであることを再確認した感じでしたね。

──とくに、どのシリーズが印象に残りましたか？

どれもテーマが異なるので一番は決められませんが、『ふたりはプリキュア！』のなぎさ&ほのかの友情の描かれ方が好きでした。お互いに興味がなかったのにプリキュアになって一緒に行動するようになり、ケンカやすれ違いを重ねながらも絆が生まれて。決め技を唱えるときに手をつなぐのも素敵でしたね。

夢の変化もみなみの成長の証

──マーメイド／みなみを演じるにあたって、心がけていたことは？

はるかたちよりはひとつ年上で、落ち着いたお姉さんキャラクターであることを忘れないようにしました。中学生くらいのときって、1歳の差が結構大きく感じられるので、ちゃんと年上に感じられるように。ただ、最初のころは私だけ大人になりすぎているんじゃないかと不安もありました。でも、あまり探り探りやっていると周りも不安になってしまうので、スタッフの方から指示がないかぎりは、考え込みすぎずに自分で決めた演じ方を続けました。みなみは、最初のころは先輩然としていて堅い感じでしたが、シナリオの中でお化けが苦手とか、世間知らずな面があるということをていねいに描いてくださっていたので、演じるうえで彼女の変化に疑問を持つことはなかったです。よく（嶋村）侑ちゃんや（山村）響ちゃんとは、キャラクター的に「おいしい」とか「おいしくない」という話をしていたんですよ。ピンクはメインなので存在自体が「おいしい」。だから、私たちもキャラクターの目立つ「おいしい」回がほしいよねって。9話のお化けの回はみなみ的にはおいしかったと思います。

──みなみは、プリキュアの中では唯一、夢が変化したキャラクターでした。

最初は両親の会社を継ぐことが夢だったのが、36話であすか先生と出会ってからは海のお医者さんになりたいと思うようになって。はるかやきららのように子どものころからの夢をかなえようと頑張る姿も素敵ですが、やりたかったことが変わって、それを追いかけていこうとするみなみの姿は、子どもたちに共感してもらえる部分も大きかったのではないかなと思います。リアルに考えると、それまでいいなと思っていたものよりも素敵に見えるものが出てくるのは当然ですし、それも成長ですからね。葛藤や変化を、みなみを通して観ていただけたらうれしいですね。

──そんなマーメイド／みなみとご自身とで似ているところはありますか？

あるかなぁ……？ 周りから見たら似ているところはあるのかなと思っていたのですが、1月に行われたイベントの「キャラと本人（キャスト）が最も似ているのは誰？」というアンケートコーナーで、ほかの3人は誰も私とみなみが似てい

るって書いてくれなかったんですよ(笑)。だから、似ていないのかもしれない。唯一似ているところがあるとしたら、プリキュアを演じたキャストの中で一番年上というところかな。

——最年長だと"まとめ役"になるようなこともありましたか?

うちの代に関しては、まとめ役は侑ちゃんでしたね。SNSでの連絡もマメで、ちょっとした相談ごともみんなに意見を聞いてまとめてくれるんですよ。彼女自身はまとめようと意識していたわけではないと思いますが、みんなが何を考えて、何を求めているのかを常に気にしてくれていたように思います。

『プリキュア』役は"うつる"もの?

——1年間のエピソードで、とくに印象的だったものはありますか?

最終話の、はるかとカナタのお別れのシーンです。はるかが笑顔だったんですよね。演じている私たちでさえ、1年間追いかけてきたカナタとの別れはさびしいなと思っているのに、はるかはカナタには泣き顔を見せない。その強さに感激しました。でも、カナタの姿が見えなくなってから大泣きしてしまう。カナタの前では頑張って笑顔でいようとする姿が、すごく好きでした。

——先ほど「おいしいキャラクター」というお話もありましたが、みなみも見せ場は多かったですよね。

25話の、はるかの家に泊まりに行くエピソードが好きでした。スーツケースの中にメロンを大量に入れて運ぶ世間知らずな面も楽しかったのですが、悩みを抱えるトワに対して「なんでもないわっていう言葉、私もよく使ってしまうわ」って語りかけるんです。これが1話や2話のころのみなみだったら、絶対に言えなかったと思うんですよ。それがこうして人に弱いところを見せられるくらいに成長したんだなと感じさせてくれました。それでいて、そのあとの45話では「なんでもないわ」って言っちゃう。それを見て周りの人たちも「強がっているときに言うセリフだ」とわかる。みなみの転機となるシーンでもあったと思うので、印象に残っています。

——アフレコ時の思い出は?

たくさんありますが、最初のころは決め技の掛け声がそろわなくて苦労しましたね。なばちゃんは、「うちは最初から息が合っていたよ」って言っていたのですが、うちは本当に合わなくて(笑)。いつだったか、侑ちゃんが「田中裕太SDが『そろそろみんなの声が合うとうれしいな』って言っていたよ」って伝言をしてくれて、さすがにちょっとプレッシャーを感じました(笑)。うちの代は、必要なときは手を差し伸べ合うという関係ができていて、すごく居心地がよかったです。仲はいいんですけど、変に近すぎないという適切な距離感がありました。

——「プリキュア」は1年にわたりアフレコがあるので、誕生日のお祝いなどもよくあるとうかがっています。浅野さんのお誕生日のときは、いかがでしたか?

私の誕生日のときには風呂敷とドライフルーツをもらったんですよ。でも、本来は誕生日の人に黙ってサプライズを仕掛けるのに、ちょうど私にサプライズをしようという日のアフレコで、侑ちゃんがドライフルーツを食べていたんです。プレゼントを買いに行ったのが侑ちゃんで、そのときに一緒に買ってきたらしいんですが、サプライズ前にプレゼントする相手の前でプレゼントするものを食べるという(笑)。ほかのキャストの方たちは、きっと驚いていたでしょうね。

——ところで、浅野さんはほかのキャストの方に「プリキュア」は「うつる」とおっしゃっていたそうですね。

言いましたね(笑)。たとえば、「ハートキャッチプリキュア!」(2010年)で主人公の花咲つぼみを演じた水樹奈々ちゃんとずっとラジオをやっている福圓美里ちゃんが、『スマイルプリキュア!』(2012年)で星空みゆきを演じたように、関係の深い人が直後や何年かあとにプリキュアになったりするんじゃないかなって思っているんです。

——たしかに、『魔法つかいプリキュア!』の朝日奈みらい役の高橋李依さん、リコ役の堀江由衣さんとは、浅野さんも交流が深いですよね。

ふたりがプリキュア役に選ばれたというのは、気がつけば耳に入っていました。それぞれに「おめでとう」と連絡をして、きっとすごく素敵な1年になると思うとも伝えました。なばちゃんからは、じつは「自分たちの代でプリキュアが終わっちゃったらどうしようという不安もあった」とも聞いていて、私自身も物語が進むに従ってそういう気持ちはあったんです。だから、先輩からもらったバトンを、よく知っているふたりに渡せるというのは、すごくうれしかったです。

——高橋さんは声優デビュー3年目の大役ですからプレッシャーも大きそうです。

「プリキュア」に関しては、新人でやるときもプレッシャーだとは思いますが、それなりにキャリアを積んでからやるのも、また違ったプレッシャーがある気がします。でも、間違いなく自分の糧になる経験はできたと思っています。

——そんな浅野さんにとって「プリキュア」とは……?

味わったことがない思いを、たくさん経験させてもらえた作品です。私、魚肉ソーセージになるのが夢だったんですよ。

——魚肉ソーセージ?

ソーセージそのものになりたいわけじゃなくて(笑)、ソーセージになるくらいに子どもたちの身近な存在になれるキャラクターを演じたいと思っていたんです。それが気がつけば、ソーセージどころか焼き海苔になったりパンツになったり、トイレットペーパーになったり……。子どもたちが身近に置いておきたいと思えるキャラクターになれたのが本当にうれしかった。自分の演じたキャラクターが着ぐるみになったのもたぶん初めてだったと思うのですが、着ぐるみの方ってステージを降りても裏で私たちに手を振って、プリキュアとして接してくれるんです。そのプロ意識にも感激しました。それから、文字も書けないくらいの幼い子どもたちが描いてくれたイラストも見せていただいて。本当に初めての経験をたくさんさせていただきました。この先、何かの拍子に仕事に関して自信がなくなることがあっても、きっとこの経験を思い出せば、心の栄養になって、エンジンにもなると思います。

——では最後に、本作のファンの方へ、メッセージをお願いします。

1年間、「プリキュア」へのみなさんの愛情を感じながら演じられたことが、幸せな思い出として残っています。本当に感謝の気持ちしかありません。これから何代「プリキュア」が続いても、私たちのことを忘れずに、大切に思っていてくれたらうれしいです。私もこれから、この先の「プリキュア」シリーズを応援しつつ、みなみや作品のことを大事にしたいと思います。

浅野真澄からプリキュアのみんなへ

嶋村侑さま

侑ちゃんは、結構サバサバした性格で、自分の感情にウソがないので付き合いやすかったです。大阪で行われたショーを観に行ったり、誰かの誕生日にはみんなでプレゼントを買ったりできたのも、侑ちゃんが進んで行動してくれたおかげだと思っています。とてもいいリーダーでした。お互いに"戦友"という気持ちをずっと持ち続けていると思うので、これからもよろしくね。

山村響さま

響ちゃんは、感情がやわらかくて、よく泣いていた印象があります(笑)。ショーを観に行ったときも、会場に入っただけで泣き出して。自分があまり泣かないタイプなので、すごく新鮮でした。よく笑ってよく泣いて、ちょっとしたことにもリアクションをしてくれて、とても和みました。そのやわらかな感情を大切にして、また別の現場で会ったときには、いいリアクションをしてください。

沢城みゆきさま

みゆきちゃんがアフレコに参加するようになってからは、スタジオが遠かったこともあって、収録後はよく車で送ってもらいました。今まではあまり話したことはなかったけど、車中で話すうちに共感できるところが見つけられたり、違う考え方だからこそ刺激を受けることもあったりして、毎回収録がとても楽しみでした。途中から事務所の後輩にもなったし、「Go!プリンセスプリキュア」を通して仲よくなれてうれしかったです。

キャストインタビュー3

山村響

キュアトゥインクル ✿ 天ノ川きらら

Profile

【やまむら・ひびく】
2月10日生まれ。福岡県出身。主なアニメの出演作品は、『終わりのセラフ』阿朱羅丸役、『蒼き鋼のアルペジオ-アルス・ノヴァ-』ハルナ役など。

『プリキュア』は私のドレスアップキーです

黄色いプリキュアは「無理」だと思っていた

――アフレコが終了して1か月ほど（取材時）になりますが、今の感想は？

1年間あったからこそ勉強になったことがたくさんあったので、「1年間しっかりやったな」という気持ちがありますが、やはり振り返ると「あっという間だな」という思いもあります。短かったようで長かったような、長かったようで短かったような1年でしたね。

――どういったところが、とくに勉強になりましたか？

キャラクターとの向き合い方かな。ほかのキャストのみなさんがお芝居に対してどう取り組むのかを見て、今まで以上にキャラクターを深く知りたいと思ったし、キャラクターと深く付き合っていきたいとも思えたんです。とにかく『きらら、トゥインクルとしてこの空間にいることが大事なんだ」と、キャラクターを主軸にアフレコを考えるようになりました。

――オーディションでは、トゥインクル／きらら役を受けられたのですか？

本オーディションの前に、テープオーディションがあって、その段階ではトゥインクルとスカーレットを演じさせていただきました。本オーディションは、スカーレット役でとうかがっていたのですが、スタジオで「フローラをお願いします」と言われて。ビックリしましたが、ど真ん中のキャラクターですから頑張ろうと思って臨んで、そうしたら次に「トゥインクルを」と。じつは、最初のテープオーディションでも「黄色は無理」だと思っていたので、「来ちゃった……」とドギマギしました。

――トゥインクルではなくて、黄色のプリキュアキャラクターを担当するのが無理だと思っていたのですか？

そうですね。これまでのシリーズを観ていて、黄色のプリキュアはピンクとは違ったキュートさがあると思っていたんです。自分の声に、そのキュートさは絶対に合わないなと考えていたんです。

――トゥインクル／きららは、歴代の黄色と比べると雰囲気が違いますが、それでも合わないと思われましたか？

イラストを見たときは、一番私の好みでいいなと思いましたが、やっぱり私の声とは違うなと感じて。オーディションでも、フローラをやりきったあとにやって、いろいろと演技についても指示をいただきました。「もっとだるくやってください」とか（笑）。そのときはテンパっていたこともあって、自分としては正直うまくできなかったと思っていたので、トゥインクルになることは絶対ないだろうなと思っていました。

――それが、トゥインクル／きららでオーディションに合格して……。

結果が待ちきれずに、自分からマネージャーに連絡しちゃいました。そうしたら、マネージャーも言うタイミングをうかがっていらしく、「じつは……きらら役で決まりました」と切り出してくれて。その瞬間は「え?」と（笑）。合う合わないは個人的な感覚なので、驚いたあとはすぐに納得して、うれしいなと思いましたね。作品の打ち上げのときに、田中裕太SDが「俺の中で一番思い描いてくれた声を出したのが山村さんだったから決めた」とおっしゃってくださったことは、忘れることのできない幸せな思い出です。

――演じるうえで、プレッシャーを感じることはありませんでしたか？

プレッシャーよりも、喜びのほうが大きかったです。私も女児向けのアニメを観て育ちましたし、このお仕事をしているからには、いつかはプリキュアになれたらとも思っていたので。ただ、1年間という長丁場は経験がなかったので、生半可な気持ちではダメだというのは感じていました。だからといってどうしたらいいのかがわからなくて、結局真摯に向き合ってやっていくしかないなと思いながら、必死に走り続けた感じです

4人の中できららが一番大人だと思う

――トゥインクル／きららには、どんな印象を持ちましたか？

オーディションのときに言われた、「元気な女の子じゃなく、大人っぽくだるい」という感じがそのまま表れたキャラクターだなと。アフレコが始まってみると、彼女は中学生にしてモデルの仕事もしていて、その部分では大人なので、しっかりした子だなと感じました。イラストだけ見ると、つり目なので高飛車なのかなとも思ったのですが、じつは高飛車な性格でも背伸びしているわけでもない。ただ、等身大で生きている子なんだと。

――大人の中で仕事をしているせいか、同級生よりは大人びて見えますよね。

小さいころから仕事をしていて、ある程度自分の身の回りのことは自分でやっていたんでしょうね。だからこそクラスの中で異質というか、浮いて見られていた。でも、はるかたちと出会って、一緒に過ごしてくれる友達の大切さを知ったんじゃないかな。今までも友達はいたと思うけど、はるかたちと交流するようになって、自分の感情をオープンにできるようになって。よりかわいらしくなって、素敵になりましたね。もちろん、はるかたちと知り合っても、自分の夢をかなえることが一番大事なものであることに変わりはないのですが、夢をかなえることと同じくらい、はるかたちを大切にしたいと思えるようになったことは、すごい成長だと思います。

――最初はプリキュアに変身して敵まで倒したのに、「プリキュアにならない」って言い切っちゃうような子でしたからね。

そのころのきららのままだったら、42話で悩まずにニューヨーク行きを選んだと思うんですよ。はるかたちと出会ったからこそ一度は夢をあきらめてしまうことにはなったものの、後悔はしていない。そして、はるかたちとの出会いがあったからこそ、また夢に向かって走り出すことができた。その大きなドラマをラスト近くで描いていただけたのが、うれしかったです。

――トワが仲間になってからは、ノーブル学園の寮で同室ということもあって、彼女の面倒もすごく見ていましたよね。

出会って間もないころのトワに対して見捨てたりはせず、ちゃんと最後まで面倒を見てあげているんですよね。じつは、きららは個人的には4人の中では一番大人なんじゃないかなと思います。

——きららは、名セリフをたくさん言っていたようにも感じます。

4話でクローズさんから「たいした夢じゃねえだろ」って言われたのに対して「たいした夢だよ!」って間髪入れずに言い返したところがすごかったですね。まだ12歳なのに、自分の夢に対してあれだけの自信がある。馬鹿にされても言い返せるだけの自信がある。大人でも、あそこまで言い切れる人ってなかなかいないんじゃないかな。あの回のアフレコはすごく気持ちがよかったです。天を指さすきららの姿も、なんて美しいんだろうって感激しました。

——そんなトゥインクル／きららに共感できるところはありますか?

すごくたくさんありました。私も小学生のときから声優になりたいと思っていて、養成所に通うようになって、中学生のころには舞台の仕事やラジオCMなどもさせていただいていたんです。きららほど大きなお仕事をしていたわけではないですが、境遇はちょっと似ているなって思っていて。そんな経歴があるから、ひとりでいるほうが気楽だと思っていた気持ちもわかります。

42話でも、後輩のかりんちゃんを助けるために自分の夢をかなえなかったというのは衝撃的でした。ただ、42話に至るまでにきららの心情をていねいに描いてくださっていたので、きららだったらそうするだろうと納得もできました。

あとは、トゥインクル／きらら役に決まる直前に前髪を作ったんですね。そうしたら、「髪形がそっくりだね」と言われるようになりました(笑)。私の浴衣を着た写真と同じポーズ、同じ表情で、アニメーターの方がきららを描いてくださったことがあって、とてもうれしかったです。

『プリキュア』には大きな縁を感じる

——ほかにお気に入りのエピソードは?

48話のシャットさんの「私たちが落ちぶれている間に、プリキュアどころか、妖精も、人間も、どんどん変わっていく! 私たちも変わるぞ!」というセリフが好きです。これを、プリキュアでも改心した敵でもなく、まだ揺れている立場にいるシャットさんが言ったことが、すごく心に響きました。

——アフレコ時に、とくに思い出深かったことはありますか?

1話のときは、きららのセリフがひと言しかなかったにもかかわらず、ものすごく緊張していたことを覚えています。ほかのキャストの方が先輩ばかりだったので、仲よくなれるかな、なれなかったらどうしようかなって、心配ばかりしていましたね。(嶋村)侑さんがこまめに話しかけてくださったり、みんなの疑問をまとめてスタッフの方に聞いてくださったりしていたので、その姿を見て安心して、早い段階で不安は払拭できていたと思います。

アフレコ現場では、アロマ役のこっきー(古城門志帆)がムードメーカー的な存在でした。マイク前で少し慌ててしまったりしても、こっきーだと「しょうがないな」ってみんながほっこりしちゃう感じ。それが「うらやましい」って、いつもこっきーに言うんですけど「なんで響ちゃんが私をうらやましがるの」って怒られます(笑)。アロマは鳥じゃないんですが、現場ではスタッフの方からも「鳥さん」って言われていて。そう言われるたびに、こっきーが「鳥じゃないですー!」って訂正している姿が面白かったですね。

——最終話が近づくに従って、さびしさは感じましたか?

頭の中で、もう次のオーディションが始まったのかなとか、次のプリキュアが決まったのかなとか妄想していた時期が一番さびしかったかな。でも(浅野)真澄さんとも、「私たちのときみたいに、まだ誰にも言えないけど「うれしい!」って思っている人がいるんだろうね」って話していて。そのうれしさはすごくわかるので、次のシリーズが発表されたときは、もうそれほどさびしくはなかったです。

——ほかに何か、この1年で印象的だった出来事はありますか?

"はるはる"に縁があったなぁ……と。『Go!プリンセスプリキュア』では私がはるかちゃんのことを「はるはる」と呼んでいましたが、別の作品では私が「ハルハル」と呼ばれる側だったんです。しかも、その作品で共演している渕上舞ちゃんは、『ドキドキ!プリキュア』にキュアロゼッタ／四葉ありす役で出演していて。彼女も黄色役だったので、ますます縁を感じましたね。ちなみに、スタッフの方が狙ったわけではなくて、まったくの偶然だということは、声を大にして言いたいです(笑)。真澄さんが「プリキュアはうつる」とおっしゃっていたので、もしかしたら私も舞ちゃんからうつったのかもしれないですね。

あと、キャラクターソングのレコーディングが難しかった。キャラクターソングを歌うことは好きなのですが、聴いてくれる子どもたちに私個人が透けてほしくなくて。トゥインクル／きららが歌っているんだということに、とてもこだわりました。まず、きららとして歌詞を音読してからレコーディングに臨んだり……結構やり直しもお願いしましたね。

——そんな山村さんにとって『プリキュア』とは?

ずっと行きたかった場所で、さらにそこから見たことのない景色を見せてくれたもの。絶望の檻に閉ざされかけていた私を助けてくれた、ドレスアップキーのような存在です。プロデューサーの神木優さんが「この作品が観てくださるみなさんにとってドレスアップキーのような存在になってくれたらうれしい」とおっしゃっていたのですが、まさに私にとっても夢への扉を開けてくれる鍵となってくれました。『Go!プリンセスプリキュア』のオーディションを受けた当時は、なかなか新しい役が決まらないことが増えていた時期だったんです。この先、声優を続けていけるかわからないと思っていました。個人で行っている音楽活動で、「なんでオーディションに受からないんだ!」という気持ちを込めて歌も作ったくらい(笑)。その直後にトゥインクル／きらら役が決まって、本当に救われた思いがしたんです。だから、きららに恥ずかしくないように、もっともっと頑張っていきたいですね。

——では、最後に『Go!プリンセスプリキュア』を応援してくれたファンへ、メッセージをお願いします。

最後まで応援してくださってありがとうございます。みなさんの応援があったからこそ、最後まで走り抜けることができたと思っています。私はきららからたくさんのパワーをもらい、あきらめそうになっても、もうちょっと頑張ろうと思えるようになったので、みなさんの中でも『Go!プリンセスプリキュア』がそういう存在になってくれたらうれしいです。作中から心に響くセリフを見つけて、それを自分のキーワードにして、これからもずっと『Go!プリンセスプリキュア』を愛してくれたらうれしいです。

山村響からプリキュアのみんなへ

浅野真澄さま

侑さんが手をつないで歩けるお姉ちゃんなら、真澄さんは困ったことがあれば、なんでも相談できる凄腕のお姉さんという感じでした。たまに切り込んでくるように面白いことを言ってくださるのが大好きで(笑)、大人としてもあこがれています。ほかの作品でお会いしたことはないけど、いつかまた一緒の作品に出られるように頑張ります。これからもずっとずっとよろしくお願いします。

嶋村侑さま

じつは、最初に会ったときは「ちょっと怖い」と思っていました(笑)。でも、侑さんは分け隔てがなくて、積極的に連絡もしてくださって。洋服をいただいたり、手をつないで歩いたりもしましたね。私はひとりっ子なのですが、まるでお姉ちゃんを持ったような気分になりました。かわいがってくださってありがとうございました。これからも、もっと仲よくなりたいです。

沢城みゆきさま

みゆきさんのお名前は、子どものころからいろいろな作品で見てきました。私とは年齢もそれほど変わらないのに、とても落ち着いていらっしゃって最初は少し怖かったです(笑)。でも、周囲のことをよく見てくださっていて、お芝居への取り組み方は、私にとってとても刺激になりました。いつも凛とされている一方で、少しお茶目でマイペースなところもあって、本当にお姫さまみたいな方だなと思っています。好きです。あんまり言うと引かれちゃうかもしれないけど(笑)、大好きです。

キャストインタビュー 4

沢城みゆき

キュアスカーレット ✿ 紅城トワ ✿ トワイライト

Profile
【さわしろ・みゆき】
6月2日生まれ。東京都出
主なアニメの出演作品は、「
たの☆プリンスさまっ♪」シ
ーズ・七海春歌役、「デュラ
ラ!!」シリーズ セルティ・ス
ゥルルソン役など。

『プリキュア』はみんなの力を振り絞って作られたシリーズ

いつも、その日の100%で演じた

――まず、1年間の出演が終わっての感想を教えてください。

トワイライト、トワ、そしてキュアスカーレットは、1話ごとにはっきりと変化や成長が見えるキャラクターだったので、時間が風のように過ぎていった感じはなかったですね。常に、一歩一歩進んでいった感じがして、体感としては長かったです。でも、振り返るとあっという間だったようにも感じています。

――オーディションから、スカーレット／トワ役として参加したのですか？

スカーレットとして呼んでいただきました。ただ、オーディションの段階では、スカーレットのデザインはできていなくて。しかも、どちらかというとトワイライトのセリフのほうが多かったんですよ。最後のほうに、プリキュアっぽいセリフがあったくらいで。設定も細かい部分がなかったためか、先入観なくセリフを読むことができました。オーディションのときは、もうちょっと大人っぽくとか、もう少しやさしくとか、細かい指示をいただいて演じました。ただ、そのあとにさらに「トゥインクルも」と言われて。「星「マーメイドを読んでほしい」と言われ、のついている子ですよね」と、オーディション原稿を持つ手が震えていたことをよく覚えています（笑）。

――なぜ、そこまで驚かれたのですか？

これまで15年間声優をやってきて、こういうタイプのキャラクターを担当したことがほとんどないというだけなんです（笑）。だって星がついているんですよ!? それを私に!?と（笑）。私は、トゥインクル／きららをすごくいい子だと思っているんです。人より選ばれている子でありながら、嫌みな感じがない。そんなキャラクターを出しきれる自信がなかったんですね。あまりにも震えていたせいか、ほかの事務所のマネージャーの方に「大丈夫ですよ、沢城さんならできます」って心配されましたね（笑）。これまでオーディションでは、ヒロインを受けて、こっちのほうが合っているかもということで、ほかの役もやらせていただくことはあったんですが、『Go!プリンセスプリキュア』のオーディションは、悪役からヒロインに近づいていくという、斬新なオーディションになりました。

――そして、スカーレット役に決まったわけですが、そのときの感想は？

事務所から「『プリキュア』に決まりました」と一報をいただいたときは、前述のような理由もあって、まず「トゥインクルじゃないですよね？」って確認しました（笑）。思い返せば失礼なかぎりですよね。その後、「スカーレットです」と言われてホッとして、それからうれしさを噛みしめることができました。

――おもちゃの音声収録時に、スカーレットの性格は決まっていましたか？

この段階でも、詳しい設定はまだ決まっていなかったと思います。ですから、収録がある日にできる「私の100%のスカーレット」を演じた感覚です。のちのち、途中参戦のプリキュアのキャストの方は、毎回そのときの100%で演じているとうかがったので、それでいいんだなと。とにかく、おもちゃの収録は破れかぶれ感が強かったように思います（笑）。「深紅の炎のプリンセス」というセリフからも、凛とした雰囲気があるのはわかっていたのですが、（嶋村）侑ちゃんが演じるフローラが、本当にまっすぐに思いを貫くような、剣のようなキャラクターだったので「それ以上に凛とするにはどうしたらいいんだろうか!?」と試行錯誤しました。

――実際、アニメのアフレコに入ってからは、役にどうアプローチしましたか？

毎回、アフレコの前に田中裕太SDと神木優プロデューサーが、その日のストーリーについてどういう意図で作りたいかとか、何を見せたいかをディレクションしてくださるんです。ですから私は、おふたりが指し示してくださる道をただ進むだけ、という気持ちで臨みました。特別に自分からこうしようとは考えませんでしたね。唯一、ディスピアとトワイライト、ディスダークの力関係だけは確認したかな。トワイライトは「お母様」と呼んではいるけれど、じつは母親すらも見下しているのかどうかと。そうしたら「ディスピアは絶対であり、自分がいて、その下にディスダークの3人がいる」と教えていただいたので、お母様に対しては絶対的な陶酔をし、ほかの3人は目に入っていないかのように演じました。

トワイライトに一番共感できる

――トワイライト、トワ、そしてスカーレットは、作中でとくに成長がわかるキャラクターだったかと思います。

最初はミステリアスな印象でしたが、ひとつひとつ仮面の奥が見えていくような仕掛けがされていた感じですね。

とくにトワになってからは、彼女が新しいことを知り、成長していくステップが台本の中でしっかりと描かれていたので、演じやすいキャラクターでした。

――トワイライトがトワになり、スカーレットになって、キャラクターの印象に変化はありましたか？

じつは、あまりないんです。彼女は、どの立ち位置にいても一貫して彼女らしさがあったように思います。生まれ持っての責任感の強さであったり、ちょっと人よりエンジンが大きいので何かと「過ぎて」しまうことだったり。トワイライトのときは、人を憎みすぎるし、トワになってからは自分がやってきたことに責任を感じすぎてしまう。そして、スカーレットになればなったで、変わらなきゃって思いすぎる。その「すぎて」しまうことこそが、彼女の芯なのだろうなとは感じていました。ただ、その「すぎる」部分を声に乗せるのが難しくて……。

――アフレコ中に、ほかの3人のプリキュアを演じるキャストの方より、マイクから離れることが多かったそうですね。

トワのときの大人しい話し方と、スカーレットになって凛とした声を出すときとで、声の圧が違いすぎてしまって、ミ

キサーの川崎公敬さんから「もう少し後ろに下がってください」と言われたことがありましたね。しかも、それがよりによって4人で決め技を言うシーンだったんです。チームワークを乱すことになってしまい、今でも恐縮してしまいます。

トワはとくにステップを踏んで成長した子なので、彼女に対してどんどん親身になってしまって。本来はもう少し理性的に引いたところから見る必要があるのに、私とトワの境目がどんどんなくなってきてしまっていたんですね。普段であれば、一度注意されたら次の叫びでは音量を下げようと自分で判断できるのですが、思い入れが強すぎてそれができなくて。高校生のころに同じような失敗をしていたことを思い出しました。

——でも、トワの成長や頑張りを見ていると、感情移入したくなりますよね。

トワは、長女の私からすると、ずるい……というか、うらやましいところがいっぱいあるんです。甘え上手というか、困ったなぁと思っていると、手を差し伸べてくれる人が必ずいるという。でも、できないことはたくさんあっても、基本はできるようになろうとする意気込みがあるから憎めない。浅野（真澄）さんからは、「そういう立ち位置がおいしい」とよく言われました（笑）。

——たしかに、最初から「できない」とあきらめているわけではない。

「できますわ！」って言ってできないのがトワなんですよ（笑）。頑張る気はあるから、怒るに怒れない。そこもずるいですよね。でも、トワになってからはトワのお世話をしてくれるきららの株がすごく上がったので、きららが大好きな私からすると、よくやった！と（笑）。個人的にとってもきららをリスペクトしているので、その魅力がより伝わってよかったなと。

——そんなトワイライト／トワ／スカーレットに共感できる部分はありますか？

ここぞというときに抜けているところかな……。誰かと言われたら、トワイライトに一番共感できる部分が多かったですね。私、子どものころから『恐竜戦隊ジュウレンジャー』（1992年〜1993年）で魔女バンドーラを演じられた曽我町子さんのような悪役になりたいと思ってこの仕事を始めたんです。なので、最初は敵としてプリキュアに立ち向かうというスタート地点が一番燃えていたかもしれません（笑）。けれど結果的には絶望の力には限界があって、希望の力にはかなわないことを、身をもって体感しました。

すべてを伝えきることができたと思う

——全50話の中で、とくにお気に入りのエピソードがあれば教えてください。

まず、20話のはるかがカナタの馬に乗せてもらう話。私が見てきた男子の中で、お兄様に勝る方はいらっしゃいません（笑）。それから、48話のシャットがディスダークに反旗を翻す話。「プリキュアどころか、妖精も人間共もどんどん変わっていく！　変わるぞ！　私たちも」というセリフが、シリーズを通して私に一番響きました。最終話で、フローラがひとりでクローズに向かっていったシーンは、最初に台本を読んだときにはなんてさびしいシーンなのだろうと思いました。4人で戦ってきたのに！と。でも、「夢」というのは最終的には「個」がかなえるものなのだと考えれば、納得のシーンでもありました。

——スカーレットのお当番回で、印象的なエピソードはありましたか？

22話のキュアスカーレットにもう一回なると決意するシーンです。「私はこの罪を抱いたまま、もう一度グランプリンセスをめざす！」というセリフは忘れられません。40話のトワとカナタがバイオリンを演奏してひとつの曲ができあがる話は、アフレコのときに完成前の映像を流してくれたんです。そこで響ちゃんが大泣きしたことを覚えています（笑）。響ちゃんはよく泣くので、オンエアを観ていても、きっと今ごろ泣いているんだろうなって、よく思っていました。

——アフレコ時の思い出は？

トワイライトのときに、ディスピア役の榊原良子さんの隣に座らせていただけたことです。隣で彼女のお芝居のお話や考えを聞くことができたことは、本当に尊い時間だったと思っています。榊原さんはほかのキャストにとってもあこがれの方だったのですが、娘役という立場をフルに利用させていただきました（笑）。

まだ新人だったころ「スタジオでは先輩の隣に座りなさい」と教わったんです。わざわざ席を立って教えに行くほどじゃない小さなことでも、隣に座っていれば言ってもらいやすいからと。スカーレットになったタイミングでプリキュア役のキャストの方が集まる席に移ったのですが、ちょっと残念でしたね（笑）。

——次のシリーズの予告が入るようになって、さびしさは感じましたか？

侑ちゃんが「予告が入るようになると、さびしくなるらしいですよ」って言っていたのですが、私は平気でした。だって、私たちは今期の『プリキュア』で金メダルを取っているから、ほかの子たちが金メダルを取っていても「おめでとう」と祝福するだけですし。これ以上子どもたちに伝え残したことはないと思っているくらいのシリーズだったので、とても満たされています。願わくば、もっと多くの人に『Ｇｏ！プリンセスプリキュア』も観ていただけたらというくらいですね。

——そんな沢城さんにとって『プリキュア』とは？

多くのスタッフの方、キャストの方、みんなが力の限りを尽くしてできているシリーズだなと。『プリキュア』というシリーズは、なんの保証もなくスタートするんですよね。ものすごく売れている原作があって、それをアニメ化しているわけじゃない。オーディションのときには、まだスカーレットのキャラ絵がないくらいの（笑）、日進月歩的な作り方で、1年間全員で少しずつ進めていくんです。それなのに、ちゃんとこんなにも最高の最終話を迎えられる不思議。打ち上げの席でミキサーの川崎さんに「こんなにうまくいくことってあるんですね」と言ったら、「何もないからじゃないですか」と言われて。そうか、何もない真っ白なところからみんなが力を合わせて、最高のものを作ろうとしてきたからこそ、素晴らしいものができるんだなと、そのときにも感じて。みんなの力を振り絞って作られたんだなと。女の子が主役の作品ではありますが、とても「男前」な作品であると感じています。

——それでは最後に、『Ｇｏ！プリンセスプリキュア』のファンにメッセージをお願いします。

私は途中からの参加でしたが、あたたかく迎え入れていただけていたらいいなと思いながらアフレコを進めていました。きっとこの本を手に取ってくださった方は、私よりずっと『プリキュア』の先輩で、これまでのシリーズも応援してくださった方が多いかと思います。これからは私も『プリキュア』のいちファンとして、みなさんと併走していきたいと思いますので、今後は仲間として、どうぞよろしくお願いします。

沢城みゆきからプリキュアのみんなへ

嶋村侑さま

1年間どうもありがとうございました。侑ちゃんはすごくパワーのある人で、だからこそひとりにしちゃいけないと思って、同じ場所に行けるようにアフレコに取り組んだつもりです。私は『プリキュア』シリーズがあと100年続いても、キュアフローラが歴代のピンクの中で一番素敵だと、すでに確信しています（笑）。侑ちゃんがリーダーの『プリキュア』に参加できて幸せでした。

浅野真澄さま

浅野さんとは、みなみとトワの関係性以上に、プライベートでの関係が深くなったように思います。アフレコスタジオでは席が隣同士でしたし、一緒にスタジオから車で帰ったことも多く、公私にわたってたくさんの話をさせていただくことができました。『プリキュア』のシリーズを離れても、たまに構っていただけたらうれしいです。でも私は、株はやりません（笑）。

山村響さま

響ちゃんは私より年下だったので、付き合いづらかったり、たくさん気づかわせていたりしたらごめんねと伝えたいかな。私はタイムリミットが差し迫っていると、用件だけをコンパクトに言うだけになってしまうことがあって。オブラートにくるんで物事を伝えられるタイプでもないので、キツく聞こえたこともあったんじゃないかな（苦笑）。気づかいやさんの響ちゃんに助けられた場面がたくさんありました。ありがとうね。よかったら、これからも仲よくしてください。

Special Message
スペシャルメッセージ

プリキュアたちを支えた妖精やカナタ、ゆい、
そしてプリキュアの敵となったディスダーク。
それぞれのキャラクターを演じた声優陣からのメッセージをご紹介。

妖精のみなさん＆カナタ＆ゆいへのQ

① 『プリキュア』への出演が決まったときの感想　② キャラクターの印象　③ 役作りで気をつけたこと　④ 印象的だったセリフやエピソード　⑤ 今、プリキュアの4人に声をかけるとしたら？　⑥ 最終話まで終わっての感想　⑦ ファンへのメッセージ

東山奈央（とうやまなお）
パフ役

① 本当に夢のようだと思いました！　家族や周りの人が喜んでくれたのもうれしかったです。私にとって子どものころに観ていたアニメは宝物だったので、そんな思い出作りのお手伝いができるのかもと思うとワクワクしました。

② パフは何もかもがかわいくて、ひと目惚れでした！　ドジっ子だけど頑張りやさんですし、あんなに小さいのに敵に体当たりしていく勇敢なところも魅力的です。メイド見習いとして一生懸命なパフでしたが、いつも雑巾が絞れなくてびしょびしょなところが最高にかわいかったですね(笑)。

③ 子どもたちから「パフは私がお世話してあげなきゃ！　髪を結んであげなきゃ！」と思ってもらえるように、とにかくかわいく演じられるように意識していました。田中SDからは「成長していくプリキュアを見守る立場として、1年間を通して変わらない存在でい続けてほしい」と最初にうかがっていました。

④ トワとカナタのバイオリンの音色が重なって初めてひとつの曲になったシーン、はるかが絶望したときに、髪飾りはお母さんが作ってくれたものだとわかったシーン、最後のほうは変身シーンを観るだけで泣きそうでした。「エクラ・エスポワール」が一番好きです!!

⑤ 「いつもみんなの夢を守ってくれて、ありがとパフ～！ パフも立派なメイドさんになって、みんなの夢がかなうよう、お兄ちゃんと一緒にお手伝いがしたいパフ！ プリキュア、だぁいすきパフ♥」

⑥ 最終話が近づくほど名残惜しくなっていきました。でも台本を読んだらこれ以上はないほど素晴らしいストーリーで、すごく納得してしまって……さびしさはなくなりました。むしろ素敵なラストを迎えられてよかった……『プリキュア』に関われて、この気持ちを知ることできてよかった……と思いました。

⑦ 心に響く言葉がたくさんつまっていて、みんな夢に向かってまっすぐで……私もいっぱい勇気をもらいました。もし道に迷いそうなときは、また1話から観直したいと思える人生の宝物です。1年間、応援してくださって本当にありがとうございました！！

新谷真弓（しんたにまゆみ）
ミス・シャムール役

① お子様向けの作品にほとんど出たことがなかったので驚きましたが、「あの『プリキュア』に!?」と、とてもうれしかったです。

② 猫ちゃんだし、気まぐれでシニカルなキャラクターなのかなと最初は思いました。そしたらすごく真っ当な先生で、これはロイヤルティーチャー責任重大だぞ、とちょっぴり焦りましたね(笑)。

③ やはり、シニカルにならないこと、意地悪にならないことが課題で、あとはお子様が観てロイヤルレッスンが楽しそうだと思ってもらえるよう心がけました。後半にかけてはプリキュアだけでなく、クロロやシャットさんまで包み込む母性のようなものを出せればと(笑)。

④ シャットさんと対峙したとき、「身だしなみの乱れは心の乱れ！　言いわけはノ～ン!!」と正論で一刀両断しておいてからの「何か悩みがあるのじゃなくて？」とカウンセリングに移行する流れはお見事すぎて普段からマネしたいんですが、そんな機会がなかなかありません……。アフレコ現場ではディスダーク組の方の仲よしっぷりと、古城門ちゃんのネタキャラっぷりが微笑ましかったです。

⑤ 「トレビアン！　よく頑張ったわね、マイプリンセ～ス！　合格スタンプ100個あげちゃうわン♪」

⑥ 改めて、これはプリキュア＝女の子たちの成長物語だったんだなと思うと同時に、みんなの頑張りを見守る立場でいられたことが、とても光栄でした。最終話前の、グランプリンセスへの道を(物理的に)駆けあがるプリキュアに、「お行きなさい、マイプリンセス！」と声をかける場面では、こっちのほうが泣いちゃいそうでした。

⑦ 1年間、応援ありがとうございました!!　プリキュアたちのサポートをするなかで、シャムールも変わっていたり、成長できていたりしたらうれしいなと思います♪　CD『Go！プリンセスプリキュア ボーカルベスト』に収録される、シャムール＆クロロが歌う「レッスンスタート!!」は、エクセレントな名曲なので、ぜひぜひ聴いてね～ン♪

立花慎之介（たちばなしんのすけ）
カナタ役

① 女子のあこがれの作品に王子として出演できると聞き、とてもビックリしたと同時にうれしかったです。

② 「とてもやさしい王子さま」というのが第一印象です。ですが、途中から記憶をなくして人間界で放浪の身でいるときは、ちょっと悲しい人という感じでしたね。とはいえ最後の最後までプリキュアを影で支え守り抜く、とても頼もしい王子だったと思います。

③ 田中SDからは「『常にやさしい王子さま』を意識してください」と、初めに言われたので、そのように演じたら「色気が多すぎます」と言われました(笑)。

④ カナタ王子としては、物語中盤ではるかに「プリンセスになるな！」という言葉を浴びせるお話が、とても印象的でした。アフレコ現場では、シャット役の日野君がやたらとカナタのことを「お兄様」と呼んで、トワイライトとの既成事実を作ろうとしていたことが、とても心に残っています(笑)。

⑤ 「数々の困難を一緒に乗り越えた見えない絆は、何よりも強くお互いを結びつけているんだ。だから臆せず自分の道を進みなさい☆」

⑥ 1話1話、ちゃんと根底に伝えたいテーマがあって、それをひとつひとつ乗り越えながら成長していくプリキュアやほかのキャラクターたちが、とてもかっこよく見えた作品でした。

⑦ 敵であるはずのディスダークたちを憎めない『プリキュア』作品というのはなかなかないんじゃないかなと思います。それに最終話といっても、この先をいろいろと想像する余地のある終わり方だったと思いますので、その後の彼女たちや彼らの行く末も想像して楽しんでもらえると、とてもうれしいです。

古城門志帆（こきどしほ）
アロマ役

① いろんな感情が波のように押し寄せてきて、冷静になって最初に思ったことは「夢かな!?」でした。今思うと、出演が決まって報告を受けた日はずっとふわふわしていて、冷静じゃなかったような気がします。

② 彼の第一印象は「きゃー！ かわいい鳥!!」ですね。その後、彼はインコと言われると怒り出す性格だと知りました(笑)。基本的な印象は回を重ねても変わっていません。一生懸命で、でも空回りしちゃったりして。ただ夢ヶ浜に来てから視野が広がり、お兄ちゃんらしくなっていったように思います。

③ パフをパステルカラーとたとえるなら、アロマはビビッドカラーであるように努めました。兄妹そろって出ることが多いので、パフとアロマふたりそろってのでこぼこ兄妹感が出せたらいいな、と。田中SDからも「アロマはお兄ちゃんらしく、そしてピーチクパーチクうるさくいてね」とディレクションをしていただきました。本人は「インコじゃないロマ！」と怒り出すと思いますが、現場ではわりと鳥扱いでしたね(笑)。

④ 15話の、アロマの執事回です！　彼の中で視野が広くなるきっかけとなった話数なのですが、このアフレコの最中、まるで自分のことを言われているかのようにリンクする感覚があって、とても印象に残っています。自分に一生懸命になりすぎて見えなくなってしまっているものはないか。それを自分自身にも問いかけられた15話は、アロマにとっても私にとっても印象的な話数です。アフレコ現場はいつも笑顔と差し入れのお菓子の絶えない、あたたかい現場でした。まず本番テイクを録る前にみなさんと一度映像を観ながら読み合わせをするのですが、ちょっとツッコミどころがあると誰かしらが口を開いてそのシーンの感想を言ったりして、現場の方々が笑いに包まれて。家族団らんのような現場でした。

⑤ 「最初はどうなることやらと思ったけど……。僕は4人が素敵なグランプリンセスになれるって誰よりも早く気づいていたロマ♪　僕とパフがついていて、なれないなんてこと絶対ないんだロマ♪」と。きっとひと言ふた言多いんです、アロマは(笑)。

⑥ 1年分のたくさんの思い出があります。どの思い出の一片にも、この作品に関わるたくさんの方々の笑顔があるんです。それほどに笑顔のあふれている現場でした。マイク前って緊張して萎縮してしまうこともあるのですが、振り向けば周りのキャストの方、ガラスの向こう側にいらっしゃるスタッフのみなさんがあたたかく見守ってくださっていました。『Go！プリンセスプリキュア』と一緒だな、と。ひとりひとりの頑張りを、夢を、みんなで支えようと応援してくれる現場。作品にも似た収録現場の空気感は『Go！プリンセスプリキュア』ならではだと思います。そんなあたたかな作品に携わるメンバーのひとりとして、現場にいさせていただけたことに感謝と誇りを感じずにはいられません……！

⑦ 私自身、この作品にたくさんの夢をいただきました。夢に向かって頑張ること、みんなの夢を応援すること、夢に関わることがこんなにも人を輝かせるのなら、私は夢を追い続け、そしてたくさんの人の夢を応援できる人間になりたいと思いました。この作品が自分の夢に対する思いを再確認するきっかけになっていただけたらうれしいです。1年間『Go！プリンセスプリキュア』を、そしてみんなの夢を応援してくださりありがとうございます。応援してくれる人がいるから頑張れる！　夢はひとりでかなえるものじゃないから！　本当に本当にありがとうございました！

佳村はるか（よしむらはるか）
七瀬ゆい役

① 『プリキュア』シリーズが大好きで、お仕事で関わることができるよう頑張ろう！ と思いつつも今年もダメだった……と思っていたときにマネージャーの方から連絡をいただき、うれしくてうれしくて道端で涙しました(笑)。でもファンとしてではなく、気持ちを切り替えて取り組もうと思いました。

② おとなしくかわいい子で、はるかちゃんの横で微笑み、癒しを与える存在だと思っていました。1話のアフレコで田中SDに「ゆいはヒロインです、プリキュアはヒーローです」と言っていただきまして、そのときに「ゆいちゃんはこれからプリキュアに守られていくんだなぁ」と思っていたので、まさかあんなにも強く成長するとは思ってもみなかったです！

③ 田中SDからは「ゆいは強いよ、だってプリキュアの力がないのに戦うんだよ？　もしかしたら一番強いかもね」と言っていただき、ゆいちゃん自身は精一杯自分ができることを頑張っているだけだけど、周りから見たらそうなのか！　と中盤から思い、後半からは強くなりたい！　というゆいちゃんの気持ちがハッキリとしてきたので、ゆいちゃんの強い意志を出したい！　と努めました。

④ ゆいちゃんは、ずっとみんなの一番近くで傷ついても立ち上がるプリキュアの力になりたくて「プリキュアになれたらいいのに」と考えたことがありましたが、そうじゃないからこそ自分の戦いをすることを決意し、みんなに力を送り、そして最後には本当に夢をかなえた。ゆいちゃん！ すごい！ ですっ！ 本当にっ。

⑤ 「ずっと夢を守ってくれてありがとう。みんなに勇気をもらったから、これからは自分で絶望と戦っていくね。何度絶望しても立ち上がって絶対に夢をかなえるね。みんなの物語を伝えるからね！」と、ゆいちゃんは言いたいのではないかと思います。

⑥ 大好きな『プリキュア』に出演するという夢がかない、本当に本当に夢のような1年間でした。スタッフの方、役者の方、みんなが大切に作り上げた作品に参加できてうれしかったです。『Go！プリンセスプリキュア』のすべてに、本当にありがとうございました。

⑦ 『Go！プリンセスプリキュア』は、大好きな大好きな作品です。「ここが好き！」や「このお話が大好き」というのはみなさん違うと思いますが、本当に本当に素敵な宝物がつまっています。プリキュアだけではなく妖精、ディスダーク、みんなが大切なことを気づかせてくれます。

ディスダークのみなさんへのQ

①『プリキュア』への出演が決まったときの感想　②キャラクターの印象
③役作りで気をつけたこと　④印象的だったセリフやエピソード
⑤最終話まで終わっての感想　⑥ファンへのメッセージ

真殿光昭（まどの みつあき）

クローズ役

① うれしかったんですけど、当初は11話で死ぬと聞いていたので、正直なところ「なんだ、最後までいないんだ～」という気持ちもありました。だから生き返らせていただいて感謝ですね。

② 第一印象は変なパンク野郎だなと。しかし話数が進むにつれ、役に対する愛情が増していき、今では自分の演じてきた役の中でも愛着を感じる役のひとつになっています。

③ 最初、田中SDから「小物で演ってください」という指示があったのでチンピラを意識して巻き舌で演っていたんですが、演じていくにつれ熱が入っていき、パワー全開で演っている自分がいました。それだけこの作品が僕の中で面白かった。演じがいがあったということだと思います。

④ クローズが死闘を演じ、そして散る11話が、やはり一番印象に残っています。オンエアを観たときの作画の素晴らしさに興奮し、あまりのすごさに感動しました。アフレコ現場には車で行っていたんです。甲斐田ゆきさんも車で来ていて、待ち合わせをしたわけでもないのになぜか駐車場で偶然一緒になることが多かったんですよね、不思議と。一緒に近くのコンビニでコーヒーを買ってスタジオに入っていましたね。直接アフレコと関係ないんですけど。アフレコ前の軽いエピソードでした。

⑤ とにかく、戦いのシーンのクオリティーが高いですよね！　こんなに素晴らしい作画になるには、たくさんのスタッフの方々の並々ならぬ努力なくしては成り立たない。そんな素敵なスタッフたちと仕事ができたことが、とてもうれしいし、感謝です。

⑥ この作品には子どもだけでなく、大人が観てもたくさんのメッセージが受け取れると思います。そのメッセージをたくさん受け取ってください。そして何より、観て楽しんでいただけていれば、これ幸いです！

甲斐田ゆき（かいだ ゆき）

ロック／クロロ役

①「『プリキュア』！『プリキュア』！　敵役♪　敵役♪　男の子♥　男の子♥」。トリプルでうれしかったです。

② オリジナル作品ということもあり、先の作戦がまったく立てられませんでした（笑）。ことに中盤以降は登場回の台本をいただくたびにアングリで……。ただ、いろいろな顔を見せてくれるごとに、演じるうえではキャラクターに肉がついてくるような安心感も生まれました。

③ 当初は「クールなお子ちゃま」がキーワードでした。形が変わったりしたときにはテストで提案をしてみて判断を仰いだのですが、ダメもとで何かトライしてみると採用して活かしていただけたり……器の大きな現場でした。

④「僕が王なんだ――！」。追いつめられて、クールな仮面をはがされて本音が出たような。「……高邁な目的ではなく『自分』推しのお子ちゃまだったのかい？　優秀なのに……。僕さびしかったんか？　認められたいんか？　でも、やり方、それ違くないか？」と愛しく切なくなりつつ、ロックというキャラクターが理解できて腑に落ちた回でした。

⑤ パフ、アロマちゃんたちはもちろん、ゆいちゃんや学校のみなさん、ディスダーク三銃士までも関わる人たちがみんな成長をとげました。そう考えると、最初からはるかちゃん……みなみ、きらら……トワ様はひとつ棚をつけられていましたが、4人は元からグランプリンセスの器だったんじゃなかろうかと思わされました。人を動かすプリンセスたち。人のために尽くすプリンセスたち。こういう人たちが、ひとりではできない大きな仕事をなしえるのですね。

⑥ 1年間、『Go！プリンセスプリキュア』を応援してくださってありがとうございました。え――、私もまあ大概ないい大人の年代ですが……夢だけは閉じ込めずに暮らしてきたら、この作品に……そして、ロックとクロロという宝物に出逢うことができました。みなさまも、夢はこれからもフローラちゃんが守ってくれると思います。
「その夢、絶望の檻に……閉ざしちゃダメなんだね」「だめロロ！」

伊東みやこ（いとう みやこ）

フリーズ役

①「えっ、この私が『プリキュア』に!?」という驚きしかありませんでした。

② フリーズの印象は、「何か変!!」。そして、私が配役された意味が少しわかった瞬間でもありました。

③ スタッフからの要望は、とにかく無表情、無味無臭で、ということでした。

④「絶望の檻に閉じ込める、ストップ、フリーズ、ユア・ドリーム！」。このセリフが詩織ちゃんと合うと気持ちがよかったです。たとえ、夢を奪えなくても、「だが……、絶望した！！」は強引で好きでした。アフレコ現場には、差し入れのおやつがいつもたくさんあって、とてもうれしかったです。

⑤ 茨になってまで、最終話に出られたことに、とても感謝しています。

⑥ 私自身は半年の出演でしたが、『プリキュア』に関わることができて光栄です。応援していただいて、ありがとうございました。

榊原良子（さかきばら よしこ）

ディスピア役

① “ラスボス”とのことでしたが、詳しくはうかがっていませんでしたので、ディスピア登場の台本をいただくまでは、なるべく何も考えないようにしていました。

② 過去の何かの出来事によって“絶望”の象徴と化したのではと考えましたが、スタッフの方から世の中のすべての“絶望”を象徴する“存在”で、形のないもの、との説明をいただき、“絶望”の感覚をどのように出したらよいかと考えました。

③ お子さんが観て、「この人、大嫌い」と思っていただけるように心がけたのですが、ディレクターの方から「怖すぎる、子どもが観ているので」とのダメ出しをされました（笑）。

④「絶望せよ」。短いからこそ難しいのです。現場ではほかの方々と同じく、ゼツボーグをなさっていた中務（貴幸）さんの、一瞬も力を抜くことない姿が強く印象に残っています。

⑤ 長丁場でしたので役作りがブレないようにと心がけ、どうにかブレずに終わることができてホッとしています。

⑥ 夢や希望の反対に位置するものは“絶望”だと考えます。絶望はできれば経験したくないものですが、この絶望がなければ夢も希望も生まれません。夢を追い求め、希望を持ちながら歩んでいけるのは、“絶望”があるからだと思います。絶望を“悪いもの”と決めず、絶望があるからこそ、その先に夢や希望があるのだと考えて、日々を楽しみ、生きていってください。つよく、やさしく、美しく。そして、しなやかに……。

日野聡（ひの さとし）

シャット役

① 素直にうれしかったです。『プリキュア』は歴史も長く日本を代表するタイトルでもありますので、その敵幹部として声の出演をさせていただけるのは本当に光栄なことだと、一段と気が引き締まりましたね。

② シャットは第一印象としては、見た目からして女性的な感覚のミステリアスなキャラクターかと思っておりましたが、実際は美しいものが好きというだけでザ・男でしたね。そして回を重ねるにつれ、誰にでも愛される面白いキャラクターに変化していきました。

③ 田中SDからは、「見た目と違いシャットの声質は低音でお願いします！」というリクエストをいただきまして、常にそれは意識しておりました。あとは、トワイライトが登場してからの彼の変化などに関しては、演じる際に気をつけていましたね。

④ 思い出深いシーンはたくさんあるのですが、中でも印象的だったのは、やっぱりシャットが化け猫に変化して暴れ回るときのプリキュアたちの「助けてあげよう」というひと言は、非常に深いですよね。そのひと言とその気持ちが、のちにロックを救うシャットにもつながっていくというのがまた素敵でした。

⑤ 本当に1年間通して楽しい現場で、スタッフの方とキャストみんなが非常に仲がよく、笑顔がたくさんあふれた現場でした。それぞれみんな、作品が、キャラクターが大好きで大切に思い、そういう純粋な気持ちをセリフにひとつひとつ込めてしっかり向き合う、そんな素敵な現場でしたね。このような現場、そして作品に関わることができて幸せな1年でしたね。

⑥ 1年間『Go！プリンセスプリキュア』を応援してくださったみなさま、本当にありがとうございました。この『Go！プリンセスプリキュア』の作品を通して、子どもたちに夢を届けられる作品の力、そして魅力、純粋な気持ち、そして改めて声優という仕事の意味を考え、向き合う、そんな機会を与えていただいた作品でした。そんな素敵な作品、現場と出会えたことに心より感謝しております。

井澤詩織（いざわ しおり）

ストップ役

① あこがれの『プリキュア』出演！　それはもう、うれしかったです！　ただ、最初にお話をいただいた時点では「敵幹部」という情報だけでしたので、「悪役の幹部!?　私が!?大丈夫かな!?」という気持ちだったのですが、台本と共にキャラクタービジュアルをいただいたときに、ようやく納得＆実感しました（笑）。

② ストップはフリーズと常に一緒で。最初の2回くらいは、とにかくフリーズと同時に声を合わせてしゃべるのが大変で。でもみやこさんと一緒にキャラクターを固めて、お互いの息を覚えたら、どんどんハマるのが簡単になっていって！「よっしゃ息ピッタリだー！」って思っていたら、後半あまりハモリセリフがなくなるという……（笑）。

③ ストップは女の子で、フリーズは男の子。まず、そこでひとつ個性を出しています。あとは思った以上に無感情が難しい！「そこまでだ、プリキュア！」みたいなセリフはついつい力が入ってしまいそうになるのですが、そうすると必ず「感情出すぎでーす」ってリテイクになっちゃうので、加減をみやこさんと一緒に研究しました。

④「絶望の檻に閉じ込める。ストップ、フリーズ、ユア・ドリーム！　行けゼツボーグ!!」「だが……絶望した!!」これはもう決めゼリフですから、とっても印象に残っています。思い出に残っている出来事は、初めてアフレコに参加した日の夜にご飯会にも参加したこと。あの場で、ほかのキャストの方（全員ではなかったけれど）やスタッフの方や田中SDとたくさんお話させていただいて『Go！プリンセスプリキュア』ファミリーに加わったんだなってすごく実感して、これから頑張るぞって思ったのを覚えています。

⑤ あっという間でした。さびしいです。日曜日の朝の早起きに、ようやく慣れてきたところなのに（笑）。

⑥「『プリキュア』に出演します」と発表したとき、自分が想像していた以上にたくさんの方から「おめでとう」を言っていただきました。『プリキュア』に出演することは声優になったからにはかなえたい、ひとつの夢でしたので、あのときの感動はこれからも一生忘れることはないと思います。夢をかなえるって、本当に素敵です。応援してくださって、ありがとうございました。

各話スタッフリスト

第1話
脚本／田中仁　原画／板岡錦、増田誠治、浦田幸博、藤井慎吾、藤澤研一、上野ケン、東出太、竹田直樹、藤原舞、松田千織、藤原未来夫、永澤謙一、志田直俊、濱野裕一、斉藤拓也、赤田信人、大田和寛、吉田豆良、永島英樹、星野守、黒柳賢治、飯飼一幸　背景／増田竜太郎、佐藤千恵、飯野敏典、田中里緑、篝ミキ、牟田いずみ、いいだりえ　CG ディレクター／鎌田匡晃　デジタルアーティスト／真庭秀明、岩本千尋、高村英秀、赤瀬平、猪野高史、森山美里、廣澤楠恵、中谷純也、宮本浩史、林沙樹、遠藤龍一、本岡宏紀　演出助手／鎌谷悠　製作進行／澤守洸　美術／増田竜太郎　作画監督／上野ケン　演出／田中裕太

第2話
脚本／田中仁　原画／星野守、星川信芳、原田節子、上久保聡美、大内智美、板岡錦、安田陽子、佐藤元、吉田和香子、稲上晃、坂本勝、石田一将、平村直紀、中川英樹、永澤謙一、金田栄二、松田千織、会津五月、高橋晃、高橋任治　背景レイアウト／本間薫、鷲崎博　背景／宮本里香、猿谷勝己、増田竜太郎、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CG ディレクター／川崎健太郎　デジタルアーティスト／中村充彦、黒田誠一、松本八希、田村正平、鄭載薫、先崎純一、小杉研二、副島貴大、神央薬品、ノブタコウイチ、みうら、岩間ゆたか　演出助手／嶋谷将　製作進行／堀越圭文　美術／斉藤優　作画監督／稲上晃　演出／門由利子

第3話
脚本／田中仁　原画／ユージン アイソン、ノエル アンニョンヌエボ、ポール ザルディバー、フランクリン タマング、マービン デ・レオン、ボビー デ・ラ・ペーニャ、アレン ジェラルディーノ、アルフレッド レイエス、星野守、五十内裕輔　背景／山下千歌、佐藤千恵、増田竜太郎、デザインオフィス・メカマン、田中美紀、スタジオフォレスト、中尾道弘、深谷知穂、KU DAMRYUNG、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CG ディレクター／鎌田匡晃　デジタルアーティスト／中山美緒、森重孝太、松本涼一、田中大輔、中村佳嗣、渡部高志、小川大祐、松澤伸哉、宮澤孝介、中村有希恵、安納史恵　演出助手／鈴木裕介　製作進行／澤守洸　美術／飯野敏典　作画監督／フランシス カネダ、アリス ナリオ　絵コンテ／田中孝行　演出／岩井隆央

第4話
脚本／田中仁　原画／星野守、鳥我井克美、上野ケン、野津美智子、北田美弥子、永澤謙一、田中伸昭、清水隆正、増田誠治、金田栄二、飯島秀一、大内智美、丸山匡彦、佐藤友子、藤原舞、月乃むあ、会津五月、Toei Phils.、板岡錦、藤井慎吾　背景／佐藤千恵、飯野敏典、田中里緑、いいだりえ、増田竜太郎、Toei Phils.、ダッピー・モラート　CG ディレクター／川崎健太郎　デジタルアーティスト／金井弘樹、間祖輝、木島啓介、海老沢大生、笹井麻希、八巻豊、村野徳晃、増田順也、柳賢鐵、石上由佳莉　演出助手／嶋谷将　製作進行／堀越圭文　美術／篝ミキ　作画監督／鳥我井克美　演出／座古明史

第5話
脚本／田中仁　原画／星野守、原田節子、松田千織、星川信芳、高橋任治、藤原未来夫、藤原舞、安田陽子、田中伸昭、大内智美、上野ケン、上久保聡美、冨木由美子　背景レイアウト／鷲崎博、本間薫　背景／宮本里香、猿谷勝己、藤原友美、Toei Phils.、ダッピー・モラート　CG ディレクター／鎌田匡晃　デジタルアーティスト／真庭秀明、岩本千尋、高村英秀、赤瀬平、猪野高史、森山美里、廣澤楠恵、中谷純也、宮本浩史、林沙樹、遠藤龍一、本岡宏紀　演出助手／鎌谷悠　製作進行／澤守洸　美術／斉藤優　作画監督／赤田信人、上野ケン　演出／鎌谷悠

第6話
脚本／高橋ナツコ　原画／河野宏之、永島英樹、藤井孝博、星野守、藤井慎吾　背景／篝ミキ、飯野敏典、田中里緑、増田竜太郎、デザインオフィス・メカマン　CG ディレクター／川崎健太郎　デジタルアーティスト／中村充彦、黒田誠一、松本八希、田村正平、鄭載薫、先崎純一、小杉研二、副島貴大、神央薬品、ノブタコウイチ、みうら、岩間ゆたか　演出助手／鈴木裕介　製作進行／堀越圭文　美術／田中美紀　作画監督／河野宏之　演出／三塚雅人

第7話
脚本／香村純子　原画／星野守、飯島秀一、東出太、松浦仁美、杉本道明、春川彩子、星川信芳、福島史士、西口智也、丸山匡彦、速水広一、岩永浩輔、片岡康治、大内智美、会津五月、藤原舞、松田千織　背景／篝ミキ、佐藤美幸、いいだりえ、増田竜太郎、飯野敏典、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CG ディレクター／鎌田匡晃　デジタルアーティスト／中山美緒、森重孝太、松本涼一、田中大輔、中村佳嗣、渡部高志、小川大祐、松澤伸哉、宮澤孝介、中村有希恵、安納史恵　演出助手／中村亮太　製作進行／澤守洸　美術／佐藤千恵　作画監督／松浦仁美　演出／中村亮太

第8話
脚本／伊藤睦美　原画／星野守、清水隆正、原田節子、野津美智子、北田美弥子、藤原舞、田中伸昭、永澤謙一、藤原未来夫、金田栄二、上久保聡美、鳥我井克美、美馬健二、上野ケン、会津五月　背景レイアウト／本間薫、鷲崎博　背景／宮本里香、猿谷勝己、王明月、候荻、藤原友美、Toei Phils.、オーブリー・ダガール　CG ディレクター／川崎健太郎　デジタルアーティスト／金井弘樹、間祖輝、木島啓介、海老沢大生、笹井麻希、八巻豊、村野徳晃、増田順也、柳賢鐵、石上由佳莉　演出助手／嶋谷将　製作進行／堀越圭文　美術／斉藤優　作画監督／赤田信人、上野ケン　絵コンテ／田中孝行　演出／岩井隆央

第9話
脚本／田中仁　原画／大田和寛、星野守、星川信芳、松田千織、高橋任治、宗甘美也子、増田誠治、冨木由美子、藤井慎吾、安田陽子、永島英樹、鳥我井克美、藤原舞、会津五月　背景／佐藤美幸、西田渚、いいだりえ、デザインオフィス・メカマン、田中美紀、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CG ディレクター／鎌田匡晃　デジタルアーティスト／真庭秀明、岩本千尋、高村英秀、赤瀬平、猪野高史、森山美里、廣澤楠恵、中谷純也、宮本浩史、林沙樹、遠藤龍一、本岡宏紀　演出助手／鈴木裕介　製作進行／澤守洸　美術／田中里緑　作画監督／大田和寛　演出／芝田浩樹

第10話
脚本／香村純子　原画／アポロ・アノヌエヴォ、ノエル・アノヌエヴォ、ロミオ・アノヌエヴォ、フレデリック・ウラング、ユージーン・サイソン、ロメル・ブラ、デニス・カブラオ、シーサー・デレオン、ポール・ザルデイバル、レスティ・ロケ、エド・マーテイン・クリストモ、レジー・マナバット、レミジオ・バレンシア、ボビー・デラペーニャ、アルフレッド・レイエス、ジョーイ・カランギアン、マービン・メンドザ、アレン・ジェラルディーノ、ジュデイ一ジル・バルトラゾ、ロデル・レイエス　背景／篝ミキ、増田竜太郎、本間禎章、いいだりえ、西田渚、佐藤美幸、山下千歌、佐藤千恵、田中里緑、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CG ディレクター／川崎健太郎　デジタルアーティスト／中村充彦、黒田誠一、松本八希、田村正平、鄭載薫、先崎純一、副島貴大、松澤伸哉、神央薬品、ノブタコウイチ、みうら、岩間ゆたか　演出助手／嶋谷将　製作進行／堀越圭文　美術／飯野敏典　作画監督／フランシス・カネダ、アリストテル・ナサリオ　演出／畑野森生

第11話
脚本／田中仁　原画／青山充、星野守、星川信芳、濱野裕一、田中伸昭、丸山匡彦、渡邊巧大、藤原未来夫、飯飼一幸、板岡錦、上久保聡美、永澤謙一、香川久、会津五月、北田美弥子、野津美智子、佐藤友子、大内智美　背景レイアウト／鷲崎博、本間薫　背景／宮本里香、猿谷勝己、藤原友美、王明月、チェン・ヤンフェイ、西田渚、増田竜太郎、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CG ディレクター／鎌田匡晃　デジタルアーティスト／中山美緒、森重孝太、松本涼一、田中大輔、石井規仁、中村有希恵、牧野快、小川大祐、宮澤孝介、安納史恵　演出助手／鈴木裕介　製作進行／澤守洸、松井翔　美術／斉藤優　作画監督／稲上晃、上野ケン　絵コンテ／座古明史　演出／鈴木裕介

第12話
脚本／伊藤睦美　作画監督補／五十内裕輔　原画／高山智也、橋本季子、阿部剛久、山口瀬良、佐々木雄三、細澤光、中谷友紀子、山岡峻、高橋詩奈子、リアススタジオ、志田直俊、板岡錦　背景／高橋英次、石原信明、上原里香、邱文美、鈴木祥太、志賀友香　CG ディレクター／川崎健太郎　デジタルアーティスト／金井弘樹、間祖輝、木島啓介、海老沢大生、笹井麻希、八巻豊、村野徳晃、増田順也、柳賢鐵、石上由佳莉、中田俊裕　製作進行／肥留川知明　美術／田中美紀　作画監督／中谷友紀子　演出／村上貴之

第13話
脚本／高橋ナツコ　原画／鳥我井克美、星川信芳、松田千織、増田誠治、清水隆正、板岡錦、宗甘美也子、野津美智子、福島史士、北田美弥子、会津五月、上久保聡美　背景／飯野敏典、田中里緑、増田竜太郎、西田渚、Toei Phils.、オーブリー・ダガール　CG ディレクター／鎌田匡晃　デジタルアーティスト／真庭秀明、岩本千尋、高村英秀、赤瀬平、猪野高史、森山美里、廣澤楠恵、中谷純也、宮本浩史、林沙樹、遠藤龍一、本岡宏紀　演出助手／鎌谷悠　製作進行／駒水優之介　美術／佐藤千恵　作画監督／鳥我井克美　演出／三塚雅人

第14話
脚本／成田良美　原画／河野宏之、永島英樹、藤井孝博　背景／いいだりえ、佐藤美幸、西田渚、飯野敏典　CG ディレクター／川崎健太郎　デジタルアーティスト／中村充彦、黒田誠一、松本八希、田村正平、鄭載薫、先崎純一、副島貴大、松澤伸哉、神央薬品、ノブタコウイチ、みうら、岩間ゆたか　演出助手／嶋谷将　製作進行／澤守洸　美術／篝ミキ　作画監督／河野宏之　演出／門由利子

第15話
脚本／香村純子　原画／星野守、原田節子、飯島秀一、藤原舞、高橋任治、星川信芳、藤井慎吾、美馬健二、会津五月、宗甘美也子、松田千織、生水勇気、小野隆志　背景レイアウト／本間薫、鷲崎博　背景／宮本里香、猿谷勝己、藤原友美、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、ネリート・アクーニャ　CG ディレクター／鎌田匡晃　デジタルアーティスト／中山美緒、森重孝太、松本涼一、田中大輔、石井規仁、中村有希恵、小林真理、牧野快、宮澤孝介、安納史恵　演出助手／鈴木裕介　製作進行／松井翔　美術／斉藤優　作画監督／赤田信人　絵コンテ／黒田成美　演出／岩井隆央

第16話
脚本／成田良美　原画／青山充　背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、石原信明、上原里香、邱文美、鈴木祥太、志賀友香　CG ディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／金井弘樹、間祖輝、木島啓介、海老沢大生、笹井麻希、八巻豊、村野徳晃、増田順也、柳賢鐵、石上由佳莉、中田俊裕　演出助手／中村亮太　製作進行／堀越圭文　美術／田中美紀　作画監督／青山充　演出／中村亮太

第17話
脚本／香村純子　原画／フリッツ・ウラング、アレン・ジェラルディーノ、ユージーン・アイソン、ロメオ・アンニョヌエボ、ロメル・ブーラ、アルフレッド・レイエス、ボール・ザルディバー、フランク・タマング、レム・バレンシア、レスティ・ロケ、増田誠治、田中伸昭、宗甘美也子、松田千織、上久保聡美、野津美智子、会津五月、永澤謙一、板岡錦　背景／佐藤美幸、西田渚、飯野敏典、増田竜太郎、いいだりえ、黄国威、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CG ディレクター／鎌田匡晃　デジタルアーティスト／真庭秀明、岩本千尋、高村英秀、赤瀬平、猪野高史、森山美里、廣澤楠恵、中谷純也、宮本浩史、林沙樹　演出助手／嶋谷将　製作進行／駒水優之介　美術／田中里緑　作画監督／フランシス・カネダ、アリス・ナリオ　演出／芝田浩樹

第18話
脚本／田中仁　原画／板岡錦、星川信芳、高橋任治、藤原舞、鳥我井克美、丸山匡彦、清水隆正、原田節子、丸山大勝、安田陽子、北田美弥子、会津五月、永澤謙一、志田直俊　背景／増田竜太郎、篝ミキ、いいだりえ、山下千歌、黄国威、Toei Phils.、ダッピー・モラート　CG ディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／中村充彦、川崎健太郎、松本八希、黒田誠一、鄭載薫、先崎純一、副島貴大、松澤伸哉、神央薬品、ノブタコウイチ、みうら、岩間ゆたか　演出助手／鈴木裕介　製作進行／澤守洸　美術／飯野敏典　作画監督／上野ケン　演出／畑野森生

第19話
脚本／伊藤睦美　原画／渡辺奈月、五十内裕輔、飯飼一幸、高山智也、橋本季子、山岡峻、山口瀬良、高橋詩奈子、佐々木雄三、阿部剛久、長澤遠也　背景レイアウト／鷲崎博、本間薫　背景／宮本里香、猿谷勝己、藤原友美、チェン・ヤンフェイ、増田竜太郎、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CG ディレクター／鎌田匡晃　デジタルアーティスト／中山美緒、森重孝太、松本涼一、田中大輔、石井規仁、中村有希恵、田村正平、牧野快、宮澤孝介、大沢彩也花、安納史恵　製作進行／中塚広大　美術／斉藤優　作画監督／飯飼一幸、五十内裕輔　絵コンテ／村上貴之　演出／藤本義孝

第20話
脚本／高橋ナツコ　原画／河野宏之、永島英樹、藤井孝博　背景／篝ミキ、いいだりえ、増田竜太郎、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CG ディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／金井弘樹、間祖輝、木島啓介、海老沢大生、笹井麻希、八巻豊、村野徳晃、増田順也、長谷川太陽、宮本美貴、中田俊裕　演出助手／鎌谷悠　製作進行／松井翔　美術／佐藤千恵　作画監督／河野宏之　演出／鎌谷悠

第21話
脚本／成田良美　原画／飯島秀一、星川信芳、田中伸昭、藤原未来夫、赤田信人、星野守、北田美弥子、上久保聡美、野津美智子、板岡錦　背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、石原信明、上原里香、邱文美、鈴木祥太　CG ディレクター／鎌田匡晃　デジタルアーティスト／真庭秀明、岩本千尋、高村英秀、赤瀬平、猪野高史、森山美里、廣澤楠恵、中谷純也、宮本浩史、林沙樹、遠藤龍一　演出助手／嶋谷将　製作進行／堀越圭文　美術／田中美紀　作画監督／稲上晃　演出／三塚雅人

第22話
脚本／田中仁　原画／宗甘美也子、高橋任治、松田千織、藤原舞、増田誠治、板岡錦、山岡峻、藤井慎吾、清水隆正、美馬健二、冨木由美子、上野ケン、大田和寛　背景／篝ミキ、佐藤千恵、いいだりえ、黄国威、増田竜太郎、Toei Phils.、エルウィン・サデイア　CG ディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／石井規仁、中村有希恵、大沢彩也花、山口洋平、中村充彦、川崎健太郎、松本八希、黒田誠一、鄭載薫、先崎純一、副島貴大、松澤伸哉　演出助手／鈴木裕介　製作進行／駒水優之介　美術／田中里緑　作画監督／中谷友紀子　演出／田中裕太

第23話
脚本／香村純子　原画／星川信芳、原田節子、青山充、藤原未来夫、永島英樹、福島史士、安田陽子、藤原舞、会津五月、大内智美、永澤謙一、田中伸昭、冨木由美子、丸山匡彦、清水隆正、鳥我井克美、宗甘美也子、林祐己、北田美弥子、野津美智子、上久保聡美、濱野裕一、渡邊巧大、板岡錦　背景レイアウト／本間薫、鷲崎博　背景／宮本里香、猿谷勝己、チェン・ヤンフェイ、増田竜太郎、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CG ディレクター／鎌田匡晃　デジタルアーティスト／中山美緒、森重孝太、松本涼一、田中大輔、宮澤孝介、山崎浩司、田村正平、牧野快、柳賢鐵、石上由佳莉　演出助手／嶋谷将　製作進行／澤守洸　美術／斉藤優　作画監督／鳥我井克美、上野ケン　絵コンテ／黒田成美　演出／岩井隆央

第24話
脚本／伊藤睦美　原画／青山充、星野守、濱野裕一　背景／本間禎章、篝ミキ、いいだりえ、山下千歌、西田渚、黄国威、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CG ディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／金井弘樹、間祖輝、木島啓介、海老沢大生、笹井麻希、八巻豊、村野徳晃、増田順也、中村俊介　演出助手／鈴木裕介　製作進行／松井翔　美術／飯野敏典　作画監督／青山充　演出／佐々木憲世

第25話
脚本／成田良美　原画／フリッツ・ウラング、アレン・ジェラルディーノ、ユージーン・アイソン、ロメオ・アンニョヌエボ、ロメル・ブーラ、アルフレッド・レイエス、ポール・ザルディバー、フランク・タマング、レム・バレンシア、レスティ・ロケ、飯島秀一、金田栄二、松田千織、増田誠治、永澤謙一　背景／スタジオフォレスト、柴田聡、中尾道弘、深谷知穂、杉本智美、酒井結城、抜水スンジュ、Ku Dam ryung　CG ディレクター／鎌田匡晃　デジタルアーティスト／真庭秀明、岩本千尋、高村英秀、赤瀬平、猪野高史、森山美里、廣澤楠恵、中谷純也、宮本浩史、林沙樹、遠藤龍一　演出助手／嶋谷将　製作進行／堀越圭文　美術／北村由樹子　作画監督／フランシス・カネダ、アリス・ナリオ

絵コンテ／佐々木憲世　演出／平山美穂

第43話

脚本／田中仁　原画／星川信芳、完甘美也子、鳥我井克美、上野ケン、福原恵次、松田千織、野津美智子、板岡錦、牛来隆行、永澤謙一、安田陽子、北田美弥子、上久保聡美、会津五月、大内智美、増田誠治
背景レイアウト／鷲崎博、本間薫　背景／宮本里香、猿谷勝己、チェン・ヤンフェイ、藤原友美、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ
CG ディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／高橋友彦、中村有希恵、中山美緒、大沢彩也花、木島啓介、千葉源太、竹中佑城、松浦義孝、岩本千尋、海老沢大生、長谷川太陽、中村俊介　演出助手／鈴木裕介　製作進行／駒水優之介
美術／斉藤優　作画監督／鳥我井克美　絵コンテ／黒田成美
演出／岩井隆央

第44話

脚本／成田良美　原画／高橋任治、原田節子、田中伸昭、藤原舞、上久保聡美、金田栄二、会津五月、大内智美、Toei Phils.、赤田信人
背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、石原信明、上原里香、邱文美、鈴木祥太、志賀友香、山口大悟郎
CG ディレクター／宮本浩史
デジタルアーティスト／金井弘樹、真庭秀明、関祖輝、村田則子、鄭載薫、渡邉亮太、山口綾夏、先崎純一、森田信廣、新井啓介、能沢諭、石塚恵子　演出助手／豊田百香　製作進行／堀越圭文
美術／田中美紀　作画監督／稲上晃　演出／暮田公平

第45話

脚本／成田良美　原画／増田誠治、清水隆正、飯島秀一、芹田明雄、廣中美佳、仁井学、福島史士、島崎望、藤原未来夫、上田由希子、完甘美也子、丸山匡彦、冨木由美子、松田千織　背景／飯野敏典、山下千歌、西田渚、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ
CG ディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／高橋友彦、中山美緒、岩本千尋、高村英秀、海老沢大生　武藤達也、笹井麻希、宮本美貴、赤瀬平、森山美里、松澤伸哉、廣澤稿恵
演出助手／鈴木裕介　製作進行／駒水優之介
美術／籏ミキ　作画監督／赤田信人　演出／芝田浩樹

第46話

脚本／香村純子　原画／伊藤潤樹、浜友里恵、下谷美保、高山智也、橋本季子、佐々木雄三、長澤達也、藤崎真吾、村上貴之　背景／西田渚、佐藤千恵、飯野敏典、籏ミキ、黄国威、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CG ディレクター／宮本浩史
デジタルアーティスト／金井弘樹、真庭秀明、鄭載薫、森田信廣、猪野高史、中谷純也、増田順也、本岡宏紀、村田則子、石上由佳莉、田村正平、宮澤孝介　製作進行／肥留川知明
美術／いいだりえ、田中里緑　作画監督／中谷友紀子
演出／村上貴之

第47話

脚本／伊藤睦美　原画／星野守、星川信芳、野津美智子、原田節子、北田美弥子、永島英樹、会津五月、板岡錦、永澤謙一、柳引喜子、金田栄二、志田ただし、上野ケン、上久保聡美、飯飼一幸、増田誠治
背景レイアウト／本間薫、鷲崎博　背景／宮本里香、猿谷勝己、チェン・ヤンフェイ、藤原友美、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ
CG ディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／高橋友彦、中村有希恵、中山美緒、大沢彩也花、木島啓介、千葉源太、竹中佑城、松浦義孝、岩本千尋、海老沢大生、長谷川太陽、中村俊介
演出助手／豊田百香　製作進行／堀越圭文　美術／斉藤優
作画監督／上野ケン　演出／畑野森生

第48話

脚本／香村純子　原画／渡邊巧大、飯島秀一、清水隆正、牛来隆行、山下悟、松田千織、丸山匡彦、芹田明雄、福原恵次、上久保聡美、廣中美佳、完甘美也子、藤原舞、山本拓美、会津五月、金城美保、鈴木沙知、永澤謙一　背景／籏ミキ、飯野敏典、田中里緑、いいだりえ　CG ディレクター／宮本浩史
デジタルアーティスト／金井弘樹、真庭秀明、関祖輝、村田則子、鄭載薫、渡邉亮太、山口綾夏、先崎純一、森田信廣、新井啓介、能沢諭、石塚恵子　演出助手／鈴木裕介
製作進行／駒水優之介　美術／佐藤千恵　作画監督／渡邊巧大
絵コンテ／佐々木憲世　演出／岩井隆央

第49話

脚本／田中仁　原画／河野宏之、永島英樹、藤井孝博、田中伸昭、デニス・カブラオ、ジョーイ・カランギアン、ロメオ・アンニョヌエボ、ポール・ザルディバール、アレン・レラルディーノ、ノエル・アンニョンヌエボ、ユージン・アイソン、ロメオ・ブーラ、フランシス・カネダ　背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、石原信明、邱文美、鈴木祥太、山口大悟郎
CG ディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／高橋友彦、中山美緒、岩本千尋、高村英秀、海老沢大生、武藤達也、笹井麻希、長谷川太陽、赤瀬平、森山美里、松澤伸哉、廣澤稿恵　演出助手／鎌谷悠　製作進行／堀越圭文
美術／田中美紀　作画監督／河野宏之、赤田信人、アリス・ナリオ　演出／鎌谷悠

第50話

脚本／田中仁　原画／大田和寛、完甘美也子、藤井慎吾、板岡錦、上田由希子、速水広一、松田千織、藤原舞、野津美智子、会津五月、斉藤拓也、山岡峻、黒柳賢治、大西亮、豊田桂祐、鳥我井克美、吉田昌良、飯飼一幸、上久保聡美、五十内裕輔、高山智也、渡辺奈月、橋本季子、村上貴之、藤崎慎吾、佐々木雄三、阿部剛久、山口瀬良、長澤達也、伊藤潤樹、浜友里恵、下谷美保、リアススタジオ、中谷友紀子　背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、石原信明、上原里香、邱文美、鈴木祥太、志賀友香、山口大悟郎、斉藤優、猿谷勝己、宮本里香、藤原友美、チェン・ヤンフェイ　CG ディレクター／宮本浩史
デジタルアーティスト／金井弘樹、真庭秀明、鄭載薫、森田信廣、村田則子、中谷純也、渡邊亮太、中山美緒、高橋友彦、宮本美貴、長谷川太陽、松田範雄　演出助手／田中裕太
製作進行／駒水優之介　美術／田中美紀
作画監督／中谷友紀子　演出／田中裕太

第34話

脚本／伊藤睦美　原画／青山充
背景／山下千歌、田中里緑、いいだりえ、飯野敏典、西田渚、本間禎章、増田竜太郎
CG ディレクター／宮本浩史　デジタルアーティスト／金井弘樹、真庭秀明、関祖輝、村田則子、鄭載薫、渡邊亮太、山口綾夏、先崎純一、森田信廣、新井啓介、能沢諭、石塚恵子
演出助手／鈴木裕介、豊田百香　製作進行／澤守洸
美術／籏ミキ　作画監督／青山充　絵コンテ／入好さとる
演出／岩井隆央

第35話

脚本／香村純子　原画／河野宏之、永島英樹、藤井孝博
背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、石原信明、上原里香、鈴木祥太、志賀友香　CG ディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／石井規仁、中山美緒、岩本千尋、高村英秀、海老沢大生、武藤達也、笹井麻希、中村充彦、赤瀬平、森山美里、松澤伸哉、廣澤稿恵　演出助手／嶋谷将
製作進行／堀越圭文　美術／田中美紀　作画監督／河野宏之
演出／暮田公平

第36話

脚本／成田良美　原画／鳥我井克美、完甘美也子、星川信芳、野津美智子、安田陽子、清水隆正、上久保聡美、藤原未来夫、福島史士、西村元秀、会津五月、島崎望、永澤謙一　背景レイアウト／鷲崎博、本間薫　背景／宮本里香、猿谷勝己、藤原友美、チェン・ヤンフェイ、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ
CG ディレクター／宮本浩史　デジタルアーティスト／金井弘樹、真庭秀明、鄭載薫、森田信廣、猪野高史、中谷純也、増田順也、本岡宏紀、村田則子、石上由佳莉、日向学、宮澤孝介
演出助手／鈴木裕介　製作進行／澤守洸　美術／斉藤優
作画監督／鳥我井克美　演出／芝田浩樹

第37話

脚本／田中仁　原画／原田節子、高橋任治、田中伸昭、福原恵次、藤原舞、大内智美、是本晶、芹田明雄、北田美弥子、牛来隆行、会津五月、上田由希子、永澤謙一、仲條久美　背景／籏ミキ、佐藤千恵、西田渚、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ
CG ディレクター／小林真理　デジタルアーティスト／石井規仁、中村有希恵、中山美緒、大沢彩也花、木島啓介、山崎浩司、田村正平、山口洋平、岩本千尋、海老沢大生、長谷川太陽、中村俊介　演出助手／豊田百香　製作進行／駒水優之介
美術／いいだりえ、田中里緑　作画監督／赤田信人
演出／大塚隆史

第38話

脚本／香村純子　原画／星川信芳、松田千織、上野ケン、金田栄二、北田美弥子、ノエル・アンニョヌエボ、ユージン・アイソン、デニス・カブラオ、ボビー・デラペーニャ、ポール・ザルディバー、ジョーイ・カランギアン、シーザー・デ レオン、ロメオ・アンニョヌエボ、フリッツ・ウラング　背景／籏ミキ、山下千歌、佐藤千恵、増田竜太郎、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CG ディレクター／宮本浩史
デジタルアーティスト／金井弘樹、真庭秀明、関祖輝、村田則子、鄭載薫、渡邊亮太、山口綾夏、先崎純一、森田信廣、新井啓介、能沢諭、石塚恵子　演出助手／鈴木裕介　製作進行／堀越圭文
美術／飯野敏典　作画監督／上野ケン　絵コンテ／三塚雅人
演出／岩井隆央

第39話

脚本／田中仁　原画／大田和寛、完甘美也子、星川信芳、藤原舞、丸山匡彦、藤原未来夫、野津美智子、山下悟、永島英樹、島崎望、小林之浩、鈴木勇、板岡錦、藤井慎吾、会津五月、上久保聡美、安田陽子、松田千織、大内智美、北田美弥子、永澤謙一、菅野幸子、金子俊太朗、冨永一仁、飯嶋友里恵　背景レイアウト／本間薫、鷲崎博　背景／宮本里香、チェン・ヤンフェイ、猿谷勝己、藤原友美、佐藤美幸、いいだりえ、田中里緑、西田渚、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CG ディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／高橋友彦、中村有希恵、中山美緒、大沢彩也花、木島啓介、千葉源太、竹中佑城、松浦義孝、岩本千尋、海老沢大生、長谷川太陽、中村俊介
演出助手／鎌谷悠　製作進行／澤守洸　美術／斉藤優
作画監督／大田和寛　絵コンテ／田中裕太　演出／鎌谷悠

第40話

脚本／伊藤睦美　原画／伊藤潤樹、浜友里恵、下谷美保、高山智也、橋本季子、山口瀬良、佐々木雄三、阿部剛久、長澤達也、五十内裕輔、森田岳士、増田誠治　背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、石原信明、上原里香、邱文美、鈴木祥太、山口大悟朗
CG ディレクター／宮本浩史　デジタルアーティスト／金井弘樹、真庭秀明、関祖輝、村田則子、鄭載薫、渡邊亮太、山口綾夏、先崎純一、森田信廣、新井啓介、能沢諭、石塚恵子
製作進行／肥留川知明　美術／田中美紀
作画監督／中谷友紀子　演出／中村亮太

第41話

脚本／高橋ナツコ　原画／デニス・カブラオ、ジョーイ・カランギアン、ロメオ・アンニョヌエボ、ポール・ザルディバール、アレン・レラルディーノ、ノエル・アンニョンヌエボ、ユージン・アイソン、ロメオ・ブーラ、藤原舞　背景／籏ミキ、いいだりえ、増田竜太郎、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CG ディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／高橋友彦、中山美緒、岩本千尋、高村英秀、海老沢大生、武藤達也、笹井麻希、宮本美貴、赤瀬平、森山美里、松澤伸哉、廣澤稿恵　演出助手／鈴木裕介
製作進行／駒水優之介　美術／佐藤千恵
作画監督／アリス・ナリオ、フランシス・カネダ
絵コンテ／入好さとる　演出／鈴木裕介

第42話

脚本／伊藤睦美　原画／河野宏之、永島英樹、藤井孝博、板岡錦　背景／飯野敏典、山下千歌、籏ミキ、佐藤美幸、黄国威、増田竜太郎、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CG ディレクター／宮本浩史
デジタルアーティスト／金井弘樹、真庭秀明、鄭載薫、森田信廣、猪野高史、中谷純也、増田順也、本岡宏紀、村田則子、石上由佳莉、田村正平、宮澤孝介　演出助手／豊田百香
製作進行／堀越圭文　美術／田中里緑　作画監督／河野宏之

演出／暮田公平

第26話

脚本／高橋ナツコ　原画／渡辺奈月、五十内裕輔、高山智也、橋本季子、山岡峻、山口瀬良、高橋詩奈子、佐々木雄三、阿部剛久、長澤達也、板岡錦、藤原舞、上野ケン、大内智美、星野守
背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、石原信明、邱文美、鈴木祥太、志賀友香　CG ディレクター／宮本浩史
デジタルアーティスト／金井弘樹、真庭秀明、関祖輝、猪野高史、鄭載薫、渡邊亮太、山口綾夏、先崎純一、森田信廣、中山美緒、新井啓介、石塚恵子、村田則子、石上由佳莉、副島貴大、宮澤孝介　製作進行／肥留川知明　美術／田中美紀
作画監督／五十内裕輔　演出／村上貴之

第27話

脚本／田中仁　原画／河野宏之、永島英樹、藤井孝博、板岡錦　背景／籏ミキ、佐藤美幸、田中里緑、いいだりえ、山下千歌　CG ディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／石井規仁、中村有希恵、山口洋平、笹井麻希、中村充彦、松本八希、海老沢大生、中田俊裕、岩本千尋、高村英秀、赤瀬平、中村俊介
演出助手／鈴木裕介　製作進行／駒水優之介
美術／佐藤千恵　作画監督／河野宏之　演出／芝田浩樹

第28話

脚本／伊藤睦美　原画／星川信芳、藤原舞、原田節子、北田美弥子、田中伸昭、藤原未来夫、野津美智子、上久保聡美、豊田桂祐、赤田信人、会津五月
背景レイアウト／鷲崎博、本間薫　背景／宮本里香、猿谷勝己、藤原友美、チェン・ヤンフェイ、増田竜太郎、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CG ディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／金井弘樹、真庭秀明、本岡宏紀、大沢彩也花、日向学、田村正平、村野徳晃、増田順也、中谷純也、森山美里、松澤伸哉、廣澤稿恵　演出助手／嶋谷将
製作進行／澤守洸　美術／斉藤優　作画監督／赤田信人
演出／三塚雅人

第29話

脚本／香村純子　原画／青山充、完甘美也子、鳥我井克美、清水隆正、森島浩一、安田陽子、福島史士、上野ケン、会津五月、永澤謙一、大内智美、金田栄二、冨木由美子、赤田信人、北田美弥子、上久保聡美、佐藤友子、島崎望、レジー・マナバット、レム・バレンシア、ボビー・デラペーニャ、フリッツ・ウラング、ユージン・アイソン、ロメオ・アンニョヌエボ、アルフレッド・レイエス、ロメル・ブーラ、シーザー・デ・レオン、マービン・メンドーサ、エド マーチン・クリストモ　ポール・ザルディバー
背景／本間禎章、籏ミキ、佐藤千恵、飯野敏典、増田竜太郎、Toei Phils.、ルーベン・オレンセ　CG ディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／石井規仁、中村有希恵、中山美緒、大沢彩也花、木島啓介、山崎浩司、田村正平、山口洋平、岩本千尋、海老沢大生、長谷川太陽、中村俊介
演出助手／鈴木裕介　製作進行／松井翔　美術／田中里緑、いいだりえ　作画監督／上野ケン　絵コンテ／鎌仲史陽
演出／岩井隆央

第30話

脚本／田中仁　原画／大田和寛、板岡錦、藤井慎吾、清水隆正、高橋任治、青山充、飯島秀一、永島英樹、岩永浩輔、原田節子、増田誠治、松田千織、伊藤公崇、北田美弥子、島崎望、永澤謙一、佐藤友子、菅野幸子、会津五月、月乃むあ、上久保聡子、Toei Phils.、藤原舞　背景／デザインオフィス・メカマン、高橋英次、石原信明、上原里香、鈴木祥太、志賀友香
CG ディレクター／宮本浩史　デジタルアーティスト／金井弘樹、真庭秀明、関祖輝、村田則子、鄭載薫、渡邊亮太、山口綾夏、先崎純一、森田信廣、新井啓介、能沢諭、石塚恵子
演出助手／中村亮太　製作進行／堀越圭文　美術／田中美紀
作画監督／大田和寛　演出／中村亮太

第31話

脚本／成田良美　原画／星川信芳、藤原舞、野津美智子、芹田明雄、福島史士、田中伸昭、廣中美佳、福原恵次、丸山匡彦、小林之浩、冨木由美子、豊田桂祐、完甘美也子、柳引喜子、原田節子、大内智美、上久保聡美、会津五月、藤原未来夫　背景／本間禎章、増田竜太郎、田中里緑、山下千歌、いいだりえ、Toei Phils.、エルウィン・サデーア　CG ディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／石井規仁、中山美緒、岩本千尋、高村英秀、海老沢大生　武藤達也、笹井麻希、中村充彦、赤瀬平、森山美里、松澤伸哉、廣澤稿恵　演出助手／鎌谷悠
製作進行／駒水優之介　美術／飯野敏典　作画監督／稲上晃
演出／鎌谷悠

第32話

脚本／高橋ナツコ　原画／伊藤潤樹、浜友利恵、下谷美保、高山智也、橋本季子、山岡峻、山口瀬良、高橋詩奈子、佐々木雄三、阿部剛久、長澤達也、会津五月、中谷友紀子　背景レイアウト／本間薫、鷲崎博　背景／宮本里香、猿谷勝己、藤原友美、Toei Phils.、ネリット・アクーニャ　CG ディレクター／宮本浩史
デジタルアーティスト／金井弘樹、真庭秀明、鄭載薫、森田信廣、猪野高史、中谷純也、増田順也、本岡宏紀、村田則子、石上由佳莉、日向学、宮澤孝介　製作進行／肥留川知明
美術／斉藤優　作画監督／五十内裕輔
絵コンテ／藤本義孝、田中裕太　演出／村上貴之

第33話

脚本／成田良美　原画／フリッツ・ウラング、アレン・ジェラルディーノ、ユージーン・アイソン、ロメオ・アンニョヌエボ、ロメル・ブーラ、アルフレッド・レイエス、ポール・ザルディバー、フランク・タマング、レム・バレンシア、レスティ・ロケ　背景／田中里緑、増田竜太郎、いいだりえ、飯野敏典、Toei Phils.、エルウィン・サデーア
CG ディレクター／小林真理
デジタルアーティスト／石井規仁、中村有希、中山美緒、大沢彩也花、木島啓介、山崎浩司、田村正平、山口洋平、岩本千尋、海老沢大生、長谷川太陽、中村俊介
演出助手／嶋谷将　製作進行／松井翔　美術／佐藤千恵
作画監督／フランシス・カネダ、アリス・ナリオ
演出／佐々木憲世

Gakken Mook

オフィシャル
コンプリートブック

2016年3月31日　第1刷発行

発行人　三木浩也
編集人　水谷隆介
企画編集　馬渕悠
発行所　株式会社 学研プラス
〒141-8415　東京都品川区西五反田2-11-8
印刷所　凸版印刷株式会社

編集　水野二千翔

編集・執筆　野下奈生（アイプランニング）
宮村妙子（アイプランニング）
草刈勤

デザイン　根本綾子、木村百恵、佐々木麗奈、
加藤美保子、アトリエゼロ

カバー&
表紙イラスト　原画／中谷友紀子

製作協力　東映アニメーション株式会社
東映株式会社
株式会社マーベラス

©ABC・東映アニメーション

©Gakken Plus 2016　Printed in Japan
本誌の無断転載、複製、複写（コピー）、翻訳を禁じます。
本誌を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、
たとえ個人や家庭内での利用であっても、著作権法上、認められておりません。

学研の書籍・雑誌についての新刊情報・詳細情報は、下記をご覧ください。
学研出版サイト　http://hon.gakken.jp/

STAFF

プロデューサー／植月幹夫（ABC）、高橋知子（ADK）、柴田宏明、神木優　シリーズディレクター（SD）／田中裕太　シリーズ構成／田中仁　音楽／高木洋　製作担当／山崎尊宗　美術デザイン／増田竜太郎　色彩設計／佐久間ヨシ子　色指定／佐久間ヨシ子、板坂泰江、中野倫明　キャラクターデザイン／中谷友紀子　デジタル撮影／三晃プロダクション　編集／麻生芳弘　録音／川崎公敬、林奈緒美　音響効果／石野貴久　選曲／水野さやか　記録／樋口舞子　録音スタジオ／東映デジタルセンター　オンライン編集／東映デジタルラボ、長澤亮祐、坂井美貴子　音楽協力／東映アニメーション音楽出版　美術進行／西牧正人　仕上進行／村上昌裕　CG進行／小倉裕太、横野厚一郎、髙橋麻樹、野島淳志、平川雅之、和田薫　演技事務／大山恵子、川島直樹　宣伝／多田香奈子（ABC）、阪本美鈴（ABC）

CAST

春野はるか/キュアフローラ／嶋村侑
海藤みなみ/キュアマーメイド／浅野真澄
天ノ川きらら/キュアトゥインクル／山村響
紅城トワ/キュアスカーレット／沢城みゆき　パフ／東山奈央
アロマ／古城門志帆　カナタ／立花慎之介　ミス・シャムール／新谷真弓
クロロ/ロック／甲斐田ゆき　七瀬ゆい／佳村はるか　クローズ／真殿光昭
シャット／日野聡　ストップ／井澤詩織　フリーズ／伊東みやこ
ディスピア／榊原良子　ゼツボーグ／中務貴幸　ほか

パッケージ情報

Blu-ray

vol.3まで発売中
（全4巻）
vol.4は2016年4月20日発売

各12話収録（vol.4は14話収録）　●発売元：マーベラス

DVD

vol.13まで発売中
（全16巻）
vol.14 ～ vol.16は2016年4月20日発売

各3話収録（vol.15、vol.16は各4話収録）
●発売元：マーベラス

ごきげんよう!

Gakken Mook
Go！プリンセスプリキュア
オフィシャルコンプリートブック　電子版

2023年5月　version1.0発行

発行人　村田剛
編集人　村田剛
企画編集　馬渕悠

発行　株式会社 Gakken
〒141-8416　東京都品川区西五反田2-11-8

【お問い合わせ】https://ebook.gakken.jp/contact/（電子出版専用）

©東映アニメーション
©ＡＢＣ-Ａ·東映アニメーション
©Gakken
本書の無断転載、複製、頒布、公衆送信、翻訳、翻案等を禁じます。

学研グループの書籍·雑誌についての新刊情報·詳細情報は、下記をご覧ください。
学研出版サイト https://hon.gakken.jp/

※本商品に記載している情報は、紙版の発売当時のものです。
※キャストページなど、一部のページで紙版と異なる写真を使用しています。